



* 0001515000 *

0001515-000

595-81

さし潮ひき汐

下村海南・著

日本評論社

昭和4

AAC

595
81



490

たし潮ひき汐



南海村下
著

●
社論評本日
版



献本の辭

漫畫體本は此書の骨になつてゐる、その骨
に肉づけてくれた我社友であり、親友で
ある岡本一平畫伯に、謹て此書を呈する。

自序

日本といふ國は今や思想界にも物質界にも、右にも左にも前にも後にも、全く行きつまつたといふ。

なるほど世間では失業難生計難の聲は高い、爭議、罷工、怠業さては學校までストライキに多忙を極めつつある。

物價は高くて品は悪い、貿易は逆超、財政は膨脹、御蔭で世界の一等國ともあらう御國は、あとに取り残されて金不解禁の泥看板を未だに外づさずゐる。

品物の粗製濫造を以て誇る國であるから、人間の方も盛んに粗製濫

造しつゝある。お蔭で二十歳までに四割以上も死んで仕舞ふといふ、とても勿體ない無駄を敢てしつゝある。しかもそれほど多死であつても多産であるため、人口の過剰は社會の各方面を脅かしつゝある。ここに於てか思想は悪化して困るといひ、かう不景氣ではどうもならんといふ。

果して行きつまれるか

何故に行きつまりしか

如何に展開すべきか

かうした心持から筆に上された隨筆であるから「さす潮ひく汐」と題して見た。

肩の凝らぬやうに筆を廻はした積りであるが、ものがものであるから堅苦しからざるを得ない。幸に岡本一平畫伯の漫畫がどつさり載せられてある、遠慮なく破顔哄笑して貰ひたい。

昭和四年六月二十六日

姉妹篇「鯖を読む話」の序とあはせ筆にして

海 南 識

さし潮ひき汐目次

一 漫畫讀本

岡本一平書

一 公益質庫 登場人物 代下谷巖年町 陣耀野 笠八公

二 銀行破綻 登場人物 大車 麗力 佐八 兵五 衛郎

三 財變物語 登場人物 某會社 員 某 記者 員 小出 麗 乘 物 太 知 郎 尺

四 出商業 登場人物 尾崎 實 田 實 外 國 高 野 野 義 田 門 晴

代有志 米商 總店 朝士代 高野 義田 門晴

尾崎 實 田 實 外 國 高 野 野 義 田 門 晴

五 郵便と煙草……………100

登場人物 村の書 大尾 下木 駒仁 坊太 郎太郎

六 さし潮ひき汐……………104

登場人物 同社員の郵 甲野 乙與 市 中古の社員 尾長 丙太郎

七 忠臣と良臣(石井定七東洋銀行を活かす)……………111

登場人物 元銀行重役 白井 木 藤 弟 伊野 野 孫 東海銀行員 松竹 野 藤 太

八 優生運動……………112

登場人物 同社 長瀬 井貝 右衛門 京知

九 氣狂ひとかつたい……………116

登場人物 同社 長瀬 井貝 右衛門 京知

一〇 天刑病……………121

上、モロカイ島とダミアン師……………121

中、ティン博士とナホルムーグラ……………123
下、全生病院と光田健輔君……………124

一一 續天刑病……………129

一、ドルワールド・レゼー……………129

二、ハイドノカーパス……………129

三、癩療養所反対……………130

四、喜捨すらも……………133

一二 ジュークとエドワード……………134

登場人物 同社 長瀬 井貝 右衛門 京知 右京 泉 師 長 井 宣

一三 かんじょうとかんぢょう……………135

登場人物 政友 黨員 金杉 賀田 片不 喜及

一四 楠正成とムツソリーニ……………139

登場人物 成る會 社員 世賀 直末 三 成 學校の囃子

一五 性病物語……………146

登場人物 會社 東京 長井 宣

一六 減税競争.....一四七

登場人物 銀行 堂下 太

一七 朝鮮水電.....一五五

登場人物 内地の會社員 多田 高成 安來 奈良 内

一八 粟屋農場.....一六五

登場人物 老有 木 徳 太晴

一九 友喰ひ.....一七一

登場人物 實業連中 木材業者連中 紡績業者連中 同業組合連中 農民組合連中 農協連中 毛織業者連中 縫製業者連中 地方の有志(民友色の連中) 地方の有志(民友色の連中) 阿呆かいなんそん者 若い男

二 經濟漫筆.....一八七

一 生活の向上.....一九七

二 華府の櫻.....一九九

三 消費經濟のりんかく.....二〇三

一 前書き.....一九三

二 消費經濟の研究と宣傳.....一九四

三 社交經濟の改善.....一九六

四 家庭經濟の改善.....一九七

五 第二次の改善策.....一九九

六 改善策のりんかく.....二〇一

四 御 辨 當.....二〇三

五 木材の生長と浪費.....二〇七

六 世間は狭いやうで廣い.....二一一

上 車を圖みて.....二一一

中新聞協會	二二四
下待ちほけ	二二七
七 雜誌「交通」を省みて	二三〇
八 口述試験	二三一

三 今昔社會相

はしがき	二三四
一 古事記傳	二三七
二 維新の前後	二三九
三 日本民族の特色	二四三
四 武士階級の窮迫	二四五
五 士族の稱呼	二五〇
六 公家僧侶儒醫	二五三
七 みじめな百姓階級	二五七
八 百姓一揆	二六一
九 町人の分際	二六五
一〇 町人の成金	二六八

一一 掛屋と札差と藥捐	二七一
一二 三百諸侯の取潰	二七五
一三 大名の破産	二七七
一四 大名家族と貴族院	二八一
一五 月窟雲客	二八五
一六 幕政と人口問題	二八八
一七 幕府と財政	二九一
一八 昭和の維新	二九四

目次終



公益質庫

登場人物

下谷萬年町

熊

公

代議士

陣野笠八

熊公「わっし共の小預金は全國で一年に積り積つて四十六億圓に上るさうだが、融通をう

ける方は只の十四億圓にしかならないといひますネ。」

陣野「ムハアさうか。」

熊公「ところでわし共は其日くのくらしに逐はれてお鳥目に手づまる、というて土地建物

や有價證券などは金輪際持ち合はせない、切端つまつて鍋釜や衣類まで質屋へ曲け込む。」

陣野「なる程……。」

熊公「ソリヤネ質屋の方に云はしたら、相手が信用がゼロといふ無産階級だ、質入れの品物

の保存も小面倒臭い、貸付の資金も親質屋から平均一割八分といふ高利の融通をうける、だから少々利が高くとも我慢しろといふでショウ……しかし質草の時價は五分から三分位にしか値ぶみしてくれない、利子は高いのは四割八分日歩にして十三錢一厘五毛、平均が三割六分日歩にして九錢八厘六毛……ネ戲談ぢやない、こんな高利を政府で黙つて見てゐるといふ法がネーと思ふのだが、お前さんなど高利の味を知らねえから呑氣な顔もして居られるがネ。

(陣野は少々身につまされた思ひ入れで)

陣野 「イヤ高利の味も知らない事もないがネ……」

熊公 「けどもお前さん達の高利とわつし共の高利とは少々筋がちがふだらうぢやないか。わつしらは今日は雨でフラれて仕舞ふ、鼻の下くう殿が建立できない、鍋釜も質にまける、明日天氣でかせぎに出る、質草を受け出す、時にや受け出せずに質草をとりかへる、抜き出しをする、その度ごとに假令正味一日二日の貸出でも、一月分の利子ををどらして剝ぎとられるネ、随分因業に出来てるんだからネ。」

陣野 「フンそりや實際諸君に同情するよ。」

熊公 「そこへ今度お上から公益質庫とか質公とかいふ名で、利子も年利一割五分以下で半月

計算にする、質草の交換もよろしい、抜き出しもよろしい、をどりも取らない、質が流れると競争入札にする、元利と手数料を差し引いて残りがあれば返へしてやるネ、コリヤさう無くちやならないのだ、一體今までどうかして居ただ、旦那さうぢやありませんか。」

陣野 「イヤどうもかうもない、同感だよ。」

熊公 「同感だよ」と口先許りは心細いネ、その質公とか質庫とかは一口の貸出二十圓一世帯百圓限りとなつてるので、質屋のゴウ



ツク張りがツイく騒いで、ヤレ一口五圓の十圓のヤレ一世帯の百圓を五十圓に三十圓にと運動する、お前さん達は議會で丸で質屋の代辯をしてるといふぢやないか。」

陣野 「イヤさう許りではないのだがネ……」

熊公 「お前さん達許りぢやない、政府の言ひ草も癪にさはらうぢやないか、イヤ質庫の数が少ないからイヤ貧民窟の地帯に限られるから、さう質屋の營業にさはりはあるまいのとネ、質屋や議員の鼻息をうかゞふてサ、宜い加減なお座なりの答辯も意氣地が無さすぎるぢやないか。」

陣野 「そりやさうした氣味も無いでは無いがネ……」

熊公 「それで旦那、質屋の数は一體何軒あるのかネ？」

陣野 「一萬七八千軒といつてるナ。」

熊公 「それでわつし共の質入の口數や金額は？」

陣野 「こりや我輩が政府委員になつたネ、一寸待つてくれ給へ……エト一年に二千四百五十二萬三千件、其貸出總額は一億五千五百八十萬圓、一口當りは六圓三十五錢とあるネ。」

熊公 「ソレ見なさい、わつし共は一口わづか六圓ながしの小金を借り出し、汗水たらしてかせいでは、せつせと質屋へ御奉公してゐるのですからネ。」

陣野 「サウ云はれて見ると實に同情に堪へないです……」

熊公 「ナニ言つてるんだ！ 同情に堪へないです！？ ネ旦那、質屋の数は一萬八千軒、わつし共の質入れ口數が二千四百五十萬口、ネ此質入れをする其日暮しのお人間様が五百萬人近いといふぢやありませんか、わつしソロバンが手におへネエが、わつしらと質屋と數にするのとどの位ちがふので……」

陣野 「イヤサウ理詰に來られてはネ……ソリヤ一萬八千をかりに二萬にしても、五百萬とは二百五十倍ちがふからネ。」

熊公 「それで同じ人間でしよう。」

陣野 「イヤサウ皮肉には云はんものだよ。」

熊公 「イヤ皮肉にも云ひたからうぢやないか、お前さん達は二萬足らずの高利かせぎの質屋の代辯ばかりやつて、わつしら五百萬人のためには爪の垢ほども考へないのだから。」

陣野 「イヤ、ソナナわけでは……」

熊公 「ソナナ譯にもクソにもなからうぢやないか、第一公益質庫一軒に補助一萬圓と見て年に十軒、わづか十萬圓ぼつちより豫算とやらに見てないさうですネ。」

陣野 「その通りだよ。」

熊公 「一體今の質屋の数だけになるには何年か、るといふのですかい？」

陣野 「サアまだ出来上つてるのは臺灣は別とし、内地では縣營が一、市營が十一、町村營が十七、其他十二で合計四十一しかないから、一萬八千軒の質屋並になるまでに年十軒づつ、で一八八百年、まあ市町村に一つづつ、にして一寸二千年仕事かネ。」

熊公 「戲談ぢやない、一年に十軒位の質屋とやらこしらへて何になるのだい！ 二階から眼薬といふ事もあるが、こりや飛行機から蚊の涙だ！」

陣野 「蚊の涙？ さうだよ、しかしマアさういきり立たないで……」

熊公 「いきり立つ？ ソリヤ質屋の親爺にいふ事だ……旦那はなぜ物價高値になつてるけふ日に、一口二十圓を十圓だの五圓だのと、ソナナふざけた値切り方をホザく暇がありや、なんで一年に十軒位でどうするのだ、十倍にしろ二十倍にしろと云はないのだ！」

陣野 「そりやネ豫算は財源の關係上それ〴〵切りつめてあるからネ。」

熊公 「そんなら震災手形とやら、なんとか製鋼所の買上とやらで、何百萬何千萬といふ大金を吐き出しても、旦那質屋の十萬圓は増せないといふのですかい！」

陣野 「イヤありや政府の提案でね、吾々も感心はしないのだよ。」

熊公 「ソナナラお前さん達から持出した、北海道の土地買上けとやらいふのはどうしたのです！」

陣野 「イヤよく色んな事を知つてるネ、コリヤ全く驚いたネ、しかしあれは黨議見たやうなものでネ一寸……」

熊公 「矢張り鐵道のバスや歳費の手盛りと同じ寸法ですかネ。」

陣野 「イヤコリヤ益よきびしい、痛み入るネ。」

熊公 「マア旦那達は一年に十軒位の質屋案で質屋の代辯するよりも、一萬八千の質屋の方を考へてもらひたいネ。」

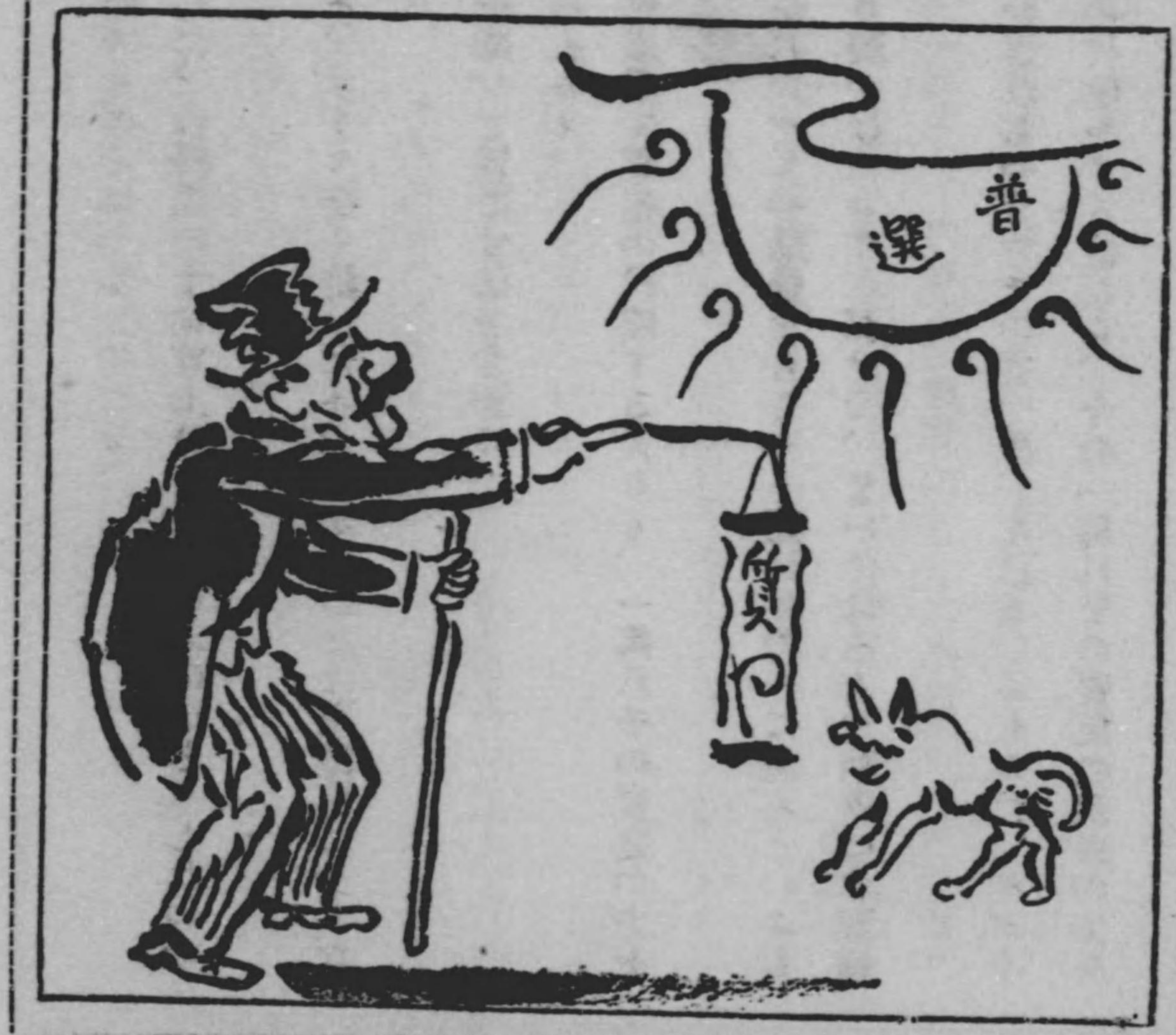
陣野 「イヤコリヤ益よきびしい、しかしバスや歳費ならこそ一運託生均一に涙ふといふものだがネ、あとは我々陣笠は只起つたり腰かけたりするだけで、甘い汁はみんな我々には素通りだからネ。」

熊公 「ヤレ〴〵旦那衆から泣言を聞かされちやコッチの立つ瀬がないといふものだ、ダガネ旦那達は一年に十軒位の質屋案で質屋の代辯をする位なら、今の一萬八千の質屋の改良の方を

考へてやつて下さい、それで質屋も立つてゆき、わっしらも今少し條件が軽くなりや大助かりでサ、ネ旦那わっしら何百年と生きられるのぢやないのですからネ。」

陣野「コリヤ全くだ！」

熊公「そりやネ旦那方の選挙の時は、今迄質屋の親爺達にそれぞれ義理もかかつてませう、さうした連中に朝から晩まで泣きつかれちや、まさに腹の中はどうでも質屋の代辯も仕方が御座んすまい、しかし大體の筋道は筋道で立てないとな。」



陣野「コリヤ全くだ……」

熊公「國民の選挙とかいうて能くマア揃ひも揃うて、どの党派もどの党派もよく氣を揃へて質屋の代辯が出来たものですネ、わっしや新聞といふやつも蟲が好かネーのだが、今度ばかりはどの新聞もどの新聞も公營質庫辯護の社説が一度ならず二度三度と書き立て、くれたとネ、わっしや全く新聞は公平だと思ふネ、ところが日本中の新聞が筆を揃へても何百萬といふ下級の者……そりや質でも置かうといふ連中だ、みな肩身が狭いから黙つて小さくなつてるとい、氣になつて、お前さん達のする所作はどうした事だい。」

陣野「コリヤ全くだ……」

熊公「いくら妥協専門の三黨首だとかお前さん達のやうな陣笠まで、解散はきらひ〜で通け廻つて來ても、まさか來年の總選挙を引きのばす事は出来ませんからネ。」

陣野「コリヤ全くだ……」

熊公「もう普選が眼の前にブラ下がつてゐるのに、あんまり足元の見えない眞似をすると估券が下がりますよ。」

陣野「こりや全くだ……」



八つあんと佐兵衛とつと銀行

銀行破綻

登場人物

車力 八五郎
大屋 佐兵衛

八「とつあん、通りの銀行は今引付け最中だ。」

佐「八つあん、吉原なかの地廻りだけに、引付けは嬉しいネ。」

八「引付けやネエンで……。」

佐「ありや取付だよ。お金を預けた連中が銀行が危なつかしいと

熊公「早く普選にしなけりやいけな、さうならぬと質庫法案を見ても此ザマだからと、自分達の首を縊つて見せてるやうなものですからネ。」

陣野「コリヤ全くだ……」

熊公「勿論お前さんなどは此次の選挙には當選覺束なしとあきらめてもるませうがネ……」

陣野「コリヤ全くだ……」 (二、三、二)



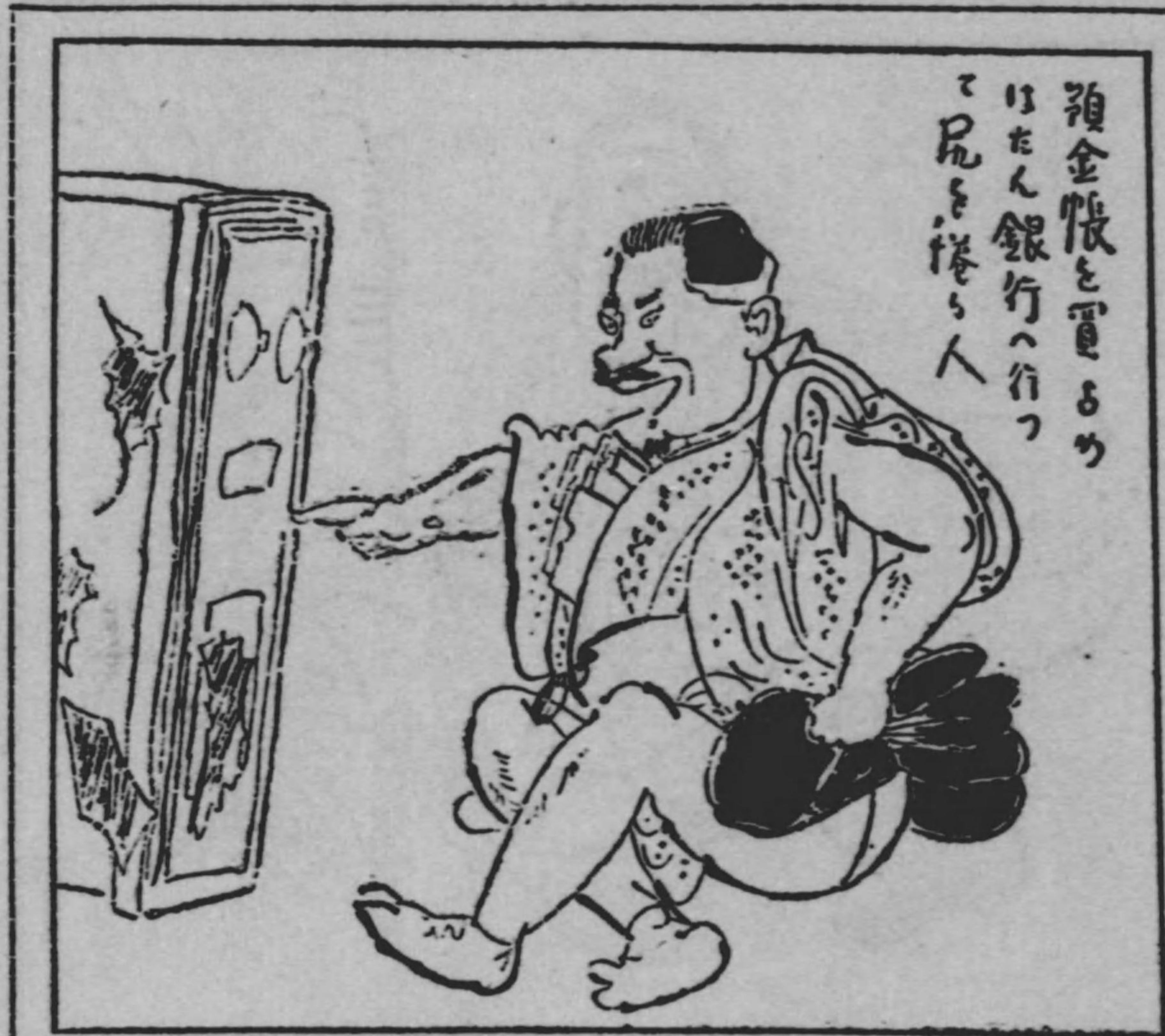
支辨停止とよし
のそりや大まど橋本へ押すまう

な、喰はず飲まずでかせぎ溜めた
お金が、利子を生まずに身も粉も
煙になつては溜らない、一層泥棒
にでもさらはれた方が、却つてあ
きらめがよいといふものだネ。」
八「とツつあん全くだよ、なぶ
り殺しよりは一層一と思ひにやら
れる方がネ、…それにしてもあ
か治ともいはれた銀行まで息つい
たとは、世の中といふものは全く
分らねえものだネ。」
佐「そりや、あか治でも中井で
も中澤でも左右田でも村井でもあ
れまで仕上げたのは皆初代の人の



悪銀行の役員使らばんでのき出さず

いふので預けた金を取り付けにゆ
くのだな。」
八「そこで銀行が面喰つて引付
けかネ。」
佐「ちがひない、コイツア大笑
ひだハ、ハ。」
八「ハ、ハ、ところがネ、隣の熊
の野郎夫婦共かせぎで爪に火をと
もしてかせぎためた金が積り積つ
て二百何兩、サア引出さうとする
と銀行が拂へないといふので嫌ア
吠えづらかいてワイ、泣いてた
がネ。」
佐「ヤレ、それは氣の毒千萬

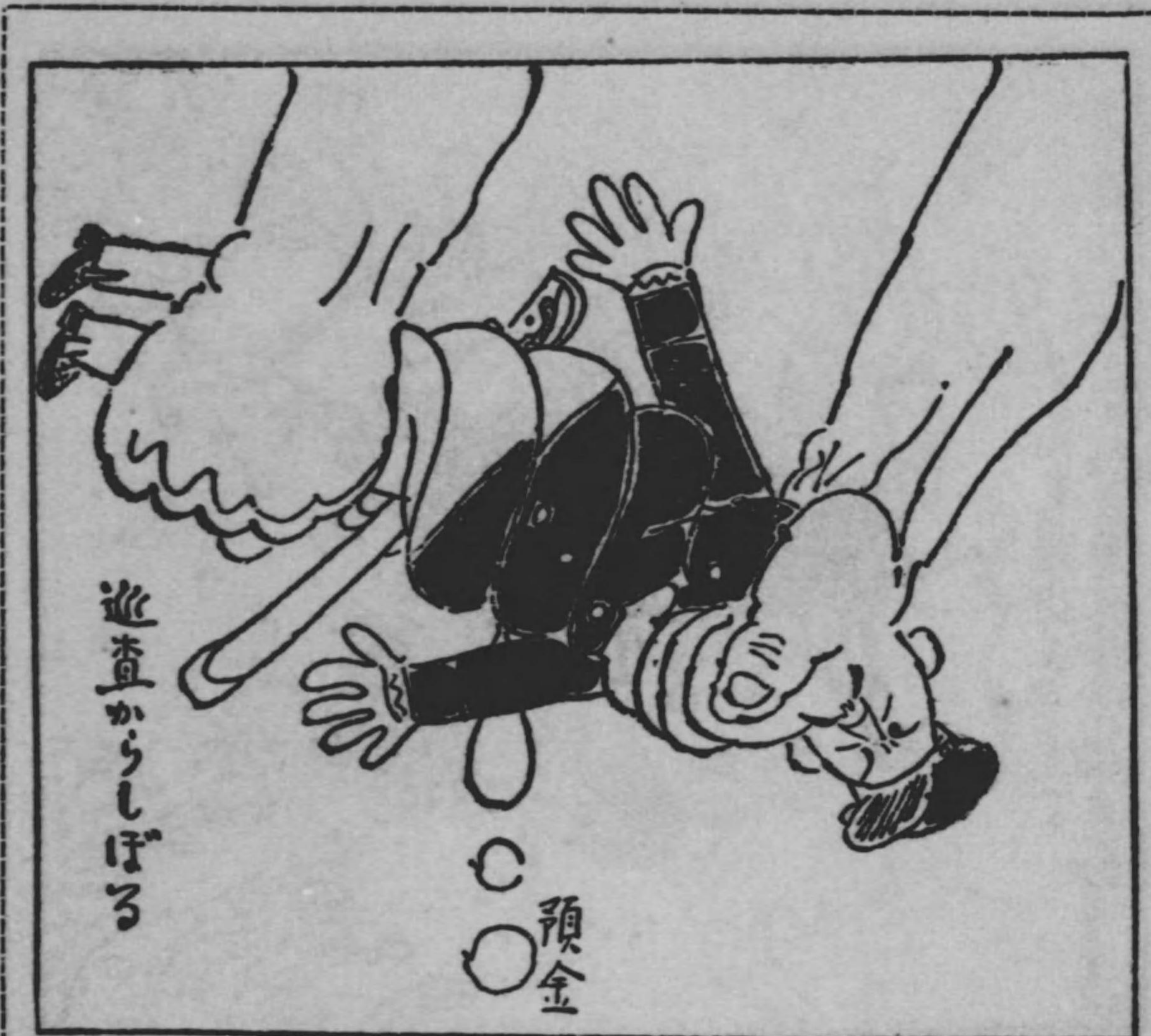


預金帳を買もち
はたん銀行へ行つ
て尻を捲らへ

り切れない、日露戦役のおとであつたかネ、淺草や青山の貯蓄銀行が潰れた時には首縊りや身投げがあつた、中にも氣の狂ふたのは可愛想に一番始末が悪いネ。」

八「成程、氣狂になられちやコリヤ槍切れネー、熊の嫌ア氣がふれネーとい、がナ。」

佐「三四年前上方で積善銀行が潰れた時も二ヶ月の間に三十近い銀行が取付に遇ふ、とうたう其中十二は休業になつた。この二月であつたか、共榮貯金とかいふ銀行が潰れたネ、なんでも全國に四五



巡査からしぼる

預金

腕一本で叩きあけたのだ、しかし、あとつぎは一代の間にそれまでに仕上げた先代のやうにはいかない、鷹が鷹を生むのは珍らしい丈に、鷹はならして鷹は生まないからね。」

八「マア、それで世の中が廻り持ちか：マア、わつしらのやうに一六銀行の借り方に廻つてると、こんな時にはビクともするのぢやネー。」

佐「その代りに年中貧乏搖ぎをしてゐる八さんなどはよいが、眞面目にコツ／＼とかせぐものはや



十ヶ所の支店があり、預金者が三十萬人を超えてたといふ、それで千萬圓ほどは缺損、それも背任横領といふ噂があるネ。」

八「背任横領といふと？」

佐「マア一口に云へば使ひ込みサ、おまけに百萬圓の資本で二千萬圓以上の貯金を預けてありながら、お上への届は半分位にしてあつたといふナ。」

八「ソリヤどうしてかネ。」

佐「何んでも届出た預金の何割といふものはお上へ供託せねばならぬ、それで、マア、早い話が千

萬圓のあたまで四百萬圓近い金を供託せずに居つたのだナ。」

八「そしてどうしたんで？」

佐「つまりそれ丈餘計に使ひ込みが出来やうといふんだわナ。」

八「とつとつあん、その銀行の事だよ、わつしの唄は江州高島郡の本庄から来たのだが、此船木といふ在所では、なんでもその銀行に縁のある橋本とかいふ醬油屋の口ききでネ、二百軒の中で百八十軒まで貯金をした、ところが支拂停止といふので雪の中を蹴立ててその橋本の家へ押しよせる、主人は尻に帆かけて遁け出したあとだ。サア家財道具あらひざらへ持ち出せといふので、丸で百姓一揆といふ騒ぎが持ち上つたといふ事だ。」

佐「そりや、ありさうな事だネ、此間も、わしが又聞きをしたのだが、新潟縣では銀行の中に非役の警視とか警部とか居て、其義理で縣内の巡查だちが僅かな手當の中からかせぎ溜めた金を預けてゐたがこれが潰れる、又熊本ではさる銀行に軍人の古手が入る、そのお義理で在郷軍人達が年金や恩給の中から虎の子のやうにしてる小金を預ける、それが潰れる。近頃悪化々々といふがこれ程人氣を悪くするものがない、それでお尻は皆自分達に来るから閉口だと縣廳の男がこぼしてたといふ事だネ。」

八「そんな銀行野郎は泥棒人殺し同様にフンじばつて突き出すわけにはいかねえかな。」
 佐「全くだよ、そこへ又コンナ時には二束三文で預け帳を買占めて、あとで銀行へケツを捲くりにくく預金者ゴロといふのもあるから、全く人氣が悪くなつて来たネ。」
 八「とツつあん！ 首縊りや身投げや氣狂や病人が出来る、色々な手違ひで迷惑する者は何萬人と數が知れぬ、これを積ればそんな野郎は火あぶり、逆はり付にしても飽き足りネーナ。」
 佐「そりや全く八つあんの言ふ通りだよ、及物は使はないが眞綿に首どころではないネ、しかしまあせい／＼何年かの懲役が關の山らしい、貯金銀行などでは重役が無限責任とかいふが、どうせさうした連中は使ひ込んで悪銭は身に付かず、又中にはチャンと然るべきところへかくしてあるから、いざとなつて逆に振つて鼻血だつて出るのぢやないよ。」
 八「ところが、とツつあん、アノ四百五十萬圓貯金詐欺の親玉高柳なんとかいふ男ネ……あの男なんどは今度の御大敵で大手振つて無罪になつたといふぢやネーか。」
 佐「サア、なんでも保釋とか謹慎とかになつたといふが、どうもわしらのやうな天保親爺には今時のお政治向きの事はよく分らない。マアお上のお仕事も數多いから中にはお目こぼしもおありだらうネ。」(二、三、二七)

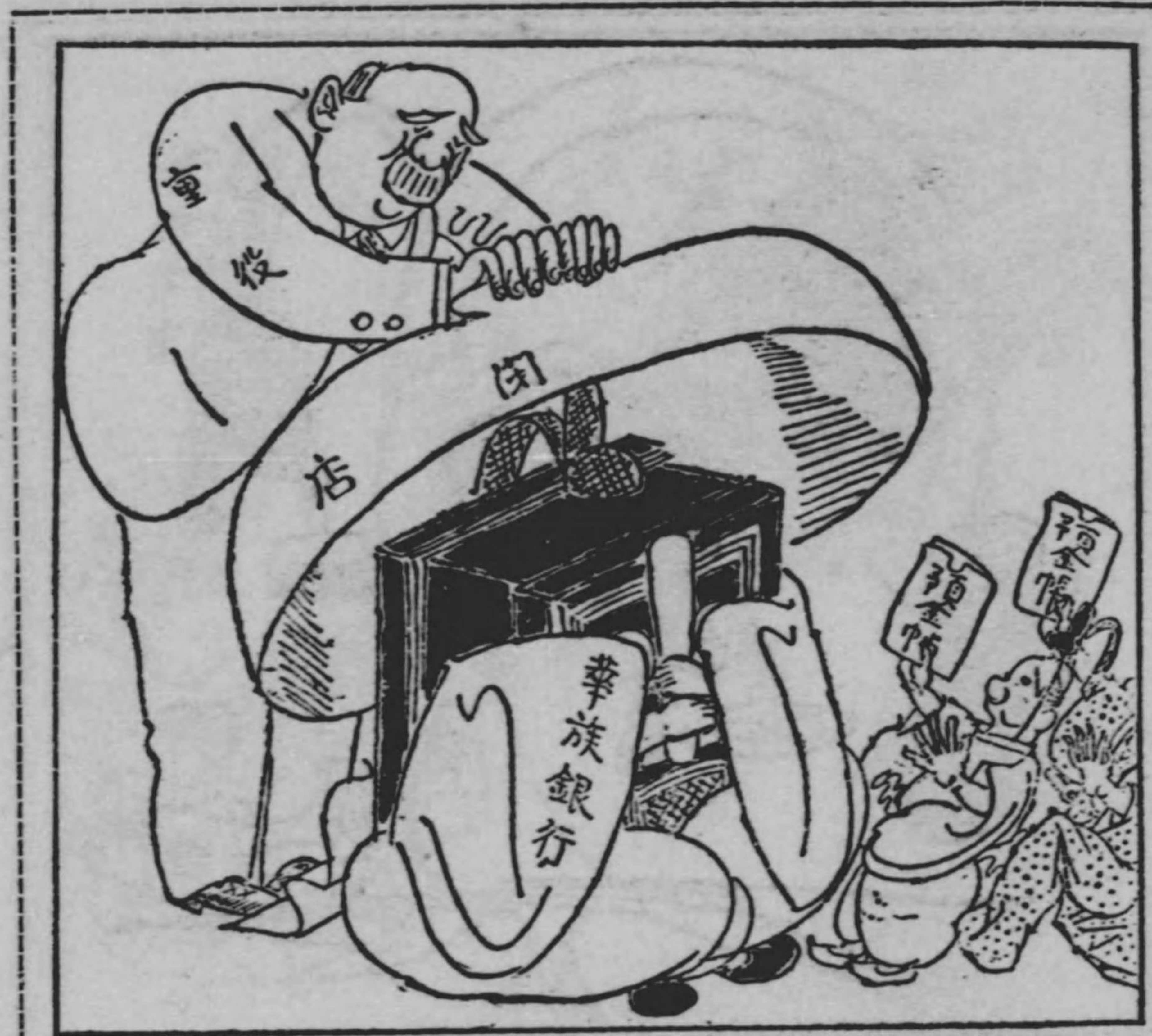


財變物語

登場人物

- ヘツボコ文士 出雲 善尺
- 某雜誌記者 小館乗太郎
- 某會社員 生野 物知

出雲「オイ小館、金持にはなりたくないナ、一日がかりで銀行から引出した七千九百圓のお金を、かへり道で渡はれたさうな。」
 小館「振つてるのは取付騒ぎで引出した親爺の金を見た娘が、雇



たものだが、その岩倉家のあとに
 種道者があつたため今は世襲財産
 制で、十五の株だけがたつきの綱
 になつて居るといふのも不思議な
 因縁だが、四月の二十日明治大帝
 の思召による故岩倉公の神道碑が
 品川の海晏寺で落成式を挙げた日
 限りで十五銀行は閉店となる、今
 度は華族達から世襲財産制解除運
 動がはじまる。廻り合はせといふ
 ものは實に妙なものだネ。」
 出雲「ナニ云つてヤがるんだ
 い、十五銀行がどうしたといふの
 だ、華族銀行潰滅？ 正に然るべ



人と手に手を取り、無断着服駈落
 ちと洒落れたとネ。」
 出雲「人生阿堵物を持つなか
 れ、吾がプロレタリア一黨は胸中
 落々
 流水任急境常靜
 落花雖頻意自閑
 なるの概がある！」
 小館「かの華族銀行の瓦解崩落
 に至りては實に溜飲三斗だネ。」
 生野「オイ君達は馬鹿にい、機
 嫌ダナ、明治十年であつたか岩倉
 具視卿が十五銀行を創立して華族
 達に株を持たし、資産安定を圖つ

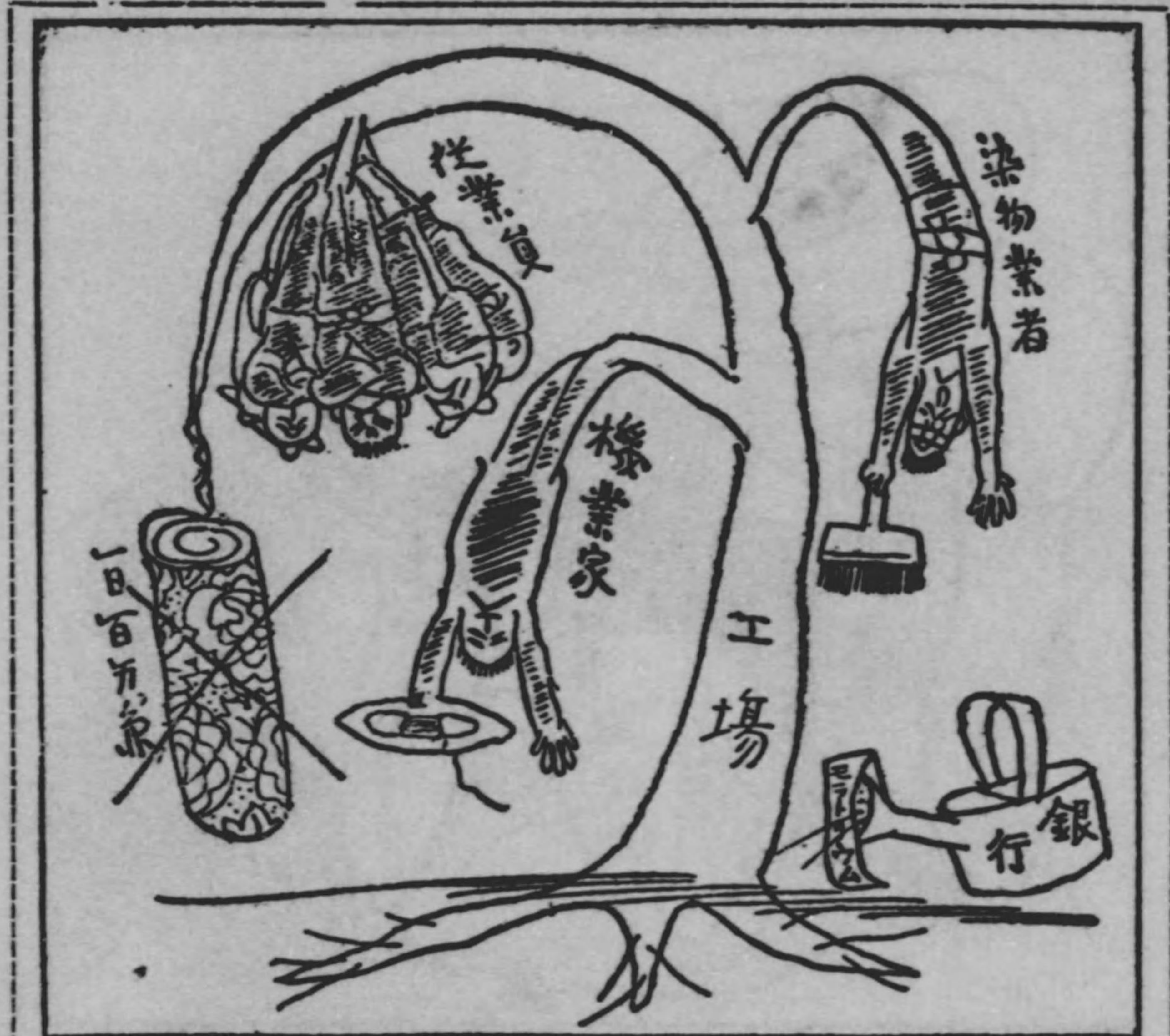


出雲 「厚顔無耻なる華族のお殿様も、今度ばかりは少々お眼が覺めただらう。」

小館 「又痛快なりと云ふべしだね。」

生野 「まあまち玉へ、貴族院といふても華族に限られてなし、華族だからとて立派な人も澤山ある、どうして馬鹿と金持には限らない、貧乏な華族もあれば、別にまとまつた金を義捐した人もあるよ。」

出雲 「貴様イヤに華族の肩を持つな、ソリヤ華族だつて人間だ、ドラ息子も出来ようからナ、身代



きことだ！」

小館 「由来彼等は只偶然に華族の家に生れたる故を以て或は無解散の貴族院に立籠り、」

出雲 「仔細らしく表には國政を憂ひ裏には利権を漁り、ロハの御招待には床の間に坐り、汽車では一等にロハ乗ります。」

小館 「しかも今度の奥丹後の震災では、貴族院議員一同から金十圓つつ見舞を出すことに打合はせたが、締切つて見ると全員三百八十八人の頭から十圓奮發したのがたゞの二百二十人也！」



んでの上だらうぢやないか、どうせ兜町や北濱の株屋共のする事だ、イヤ、さまだ！」

生野「サウいへば預金する者だつて同じ事だぜ。」

出雲「イヤ預金する方では只十五銀行華族銀行といふ名前に釣られるので、そんな眼利きをする頭はないよ。」

生野「君は預金といふとすぐ下級階級がコック／＼とためた貯金の事ばかり考へるが、どうして定期でも當座でも相當まとまつた預金をして、預け入れもすれば借り出



潰しもあるだらうよ。」

生野「だから華族銀行というても十五銀行の株主に華族はさう澤山はないよ、そこへ丁酉浪速川崎などいふ銀行が合併したのだから。」

小館「マアどつちにしても株主は自分達の選んだ重役の縮尻だ、責を負ふのは當然だ。」

生野「しかし株はいつも取引所で動いてゆく、重役を選んだ株主ばかりぢやないからネ。」

出雲「五月蠅な、株の賣買も銀行の重役の顔觸れや營業状態を睨

しもする常取引先が多いのだよ。」

出雲「だからソナ連中は自業自得サ。」

生野「君等のやうな事をいうては頭からブチこはした、現に銀行が止まつた爲に京都では西陣の工場が休みになる、六千の機械家八萬の従業員、三千の染物業者二萬の従業員が仕事がなくなる。一日に百萬圓の生産が出来たものが休業となる、十萬人の男女の職工の給金の支拂に差支へる、近くは八王子の工場だつてさうだ、千五百軒の機業家四千五百人の従業員は二週間仕事が止まつて青息吐息だ。」

出雲、小館「ア、分つたよ〜。」

生野「イヤもう少し云はしてくれ、東京には三百軒の屑問屋五千四十一人の屑屋八百九十六人の紙屑拾ひがある、問屋から一日に五六圓の小金の融通を受け、屑屋先生くづえ〜と市中をねり廻はる、所がその三百軒の問屋の胴元になつて中央屑物會社のお金を取引してゐた銀行が閉つたらう。仕事がバツタリ止まつた、屑屋の先生達皆上つたりだ。」

出雲、小館「ア、モウ分つたよ〜。」

生野「イヤ〜まだ云はしてくれ、第一小館！ お前の雜誌社だつて取引してゐる甲野銀行が

閉店となつたらどうするのだい？」

小館「ハ、ア、君はまだ一を知つて二を知らないナ、おれとこの社と來ては、甲野銀行から借金こそあれ預金などあるものか！」

生野「借金をしてる位だから餘計に困るのだよ！」

小館「ダツテ社のパラック小屋や椅子卓子出戻りの雜誌など差押へても、借金のかたには三文にもなるものかい！」

出雲「ソリヤよう分つてるが、そんなら此月末に君達の給料はどうして拂ふのだい？」

小館「……………」

出雲「成程本屋や廣告主からの集金は銀行へ預けもしよう又借金の内に入れもしよう、だが君達の給料や印刷屋への拂ひはどうするんだい、預金があつても引出せないし、無ければ無いで借り越しが出来ない、君等の給料はどこから融通するのだい。」

小館「……………」

出雲「だから人間は我輩の如く須く自分の腕一本で獨立獨歩することだよ！」

生野「オイ〜お前なんか前借りばかりして居てなにが獨立獨歩だ、マア社員や印刷の方に

はなんとか金の工面もせねばならんが、てまへ達の原稿料と来たら一番あと廻しだ！」

小館「無論だよ、その通り〜。」

出雲「オイ冗談ぢやない、無茶云ふなよ！」

生野「冗談にも無茶にもさうだらうぢやないか、本屋は本屋で賣上げは銀行へ持つてゆく、廣告主だつて化粧品屋でも、機械屋でも賣上高は銀行へ預ける、一方で原料代とか運賃とか店員や職工の給料とかそれぞれ支拂もせねばならぬ、その銀行が閉ると運轉が止まる、順押しにお前達の原稿料や給料にも響かうぢやないか。君等の筆法ならソナ銀行と取引するが悪いといふ、併しどんな銀行だつて預金を其儘積んで置くのぢやない、預かつた金には利子までつける、それだけ貸しつけて利を稼いでるのだ、一時に取付けたらどんな銀行だつて参つて仕舞ふ。そこへ銀行の營業状態の良悪に皆目見境のつかぬ連中がワイ〜と取付けようといふのだ。」

小館「イヤモウ分つたよ〜、兎に角此月末にさしか、つて給金がワイでは恐れるからネ。」

出雲「イヤ何よりもおれの原稿料だ。」

生野「ソリヤ君等の給料も原稿料も大事だらう、しかし之れで印刷の支拂が止まれば數知れぬ印刷職工は食ひ上げだ、印刷の運轉が止まれば紙屋の拂が出来ない、紙屋から製紙會社と順

順に十重八重にからんでゆく、もう今迄に渡邊、六十四、中井、中澤、村井、左右田などと可成り大きな銀行が息ついた、近江や十五銀行まで門を閉めた、モウ理も非もなく順々に火の手がのびてゆく、銀行と取引してゐる大小數知れぬ商工業者から會社工場、それに關係してゐる數知れぬ人達が將棋倒しに迷惑をうける。」

出雲、小館「イヤモウ分つたよ〜。」

生野「震災手形のとくに國家保證が一億圓であつたが、補償を受くべき手形残高が二億七百萬圓といふので問題がこんがらがつたのだが、今度は火の手が一日々々とひろがつて更に五億圓の國家保證案が出やうといふ、之に又臺灣銀行といふ別口があり、之に震手の損失があり、如何に預金者保護というてもかうした巨額の費用をそつくり國民がオンプさせられてはやり切れない、まして銀行にもピンからキリまである、何れにしても重役はもとより株主も預金者も相當責任を負はねばならぬから、この國家保證に付ては大いに研究しなければならぬよ。」

出雲「ア、頭が痛くなつて来た、おれらにソナ事は分らないよ！」

生野「デモ日本國民の中では君等は一とかどの物識だ、此位の事は心得てくれぬとモウ普選の世の中だよ、分らなけりやモウ少し講釋しやうか。」



出 商 業

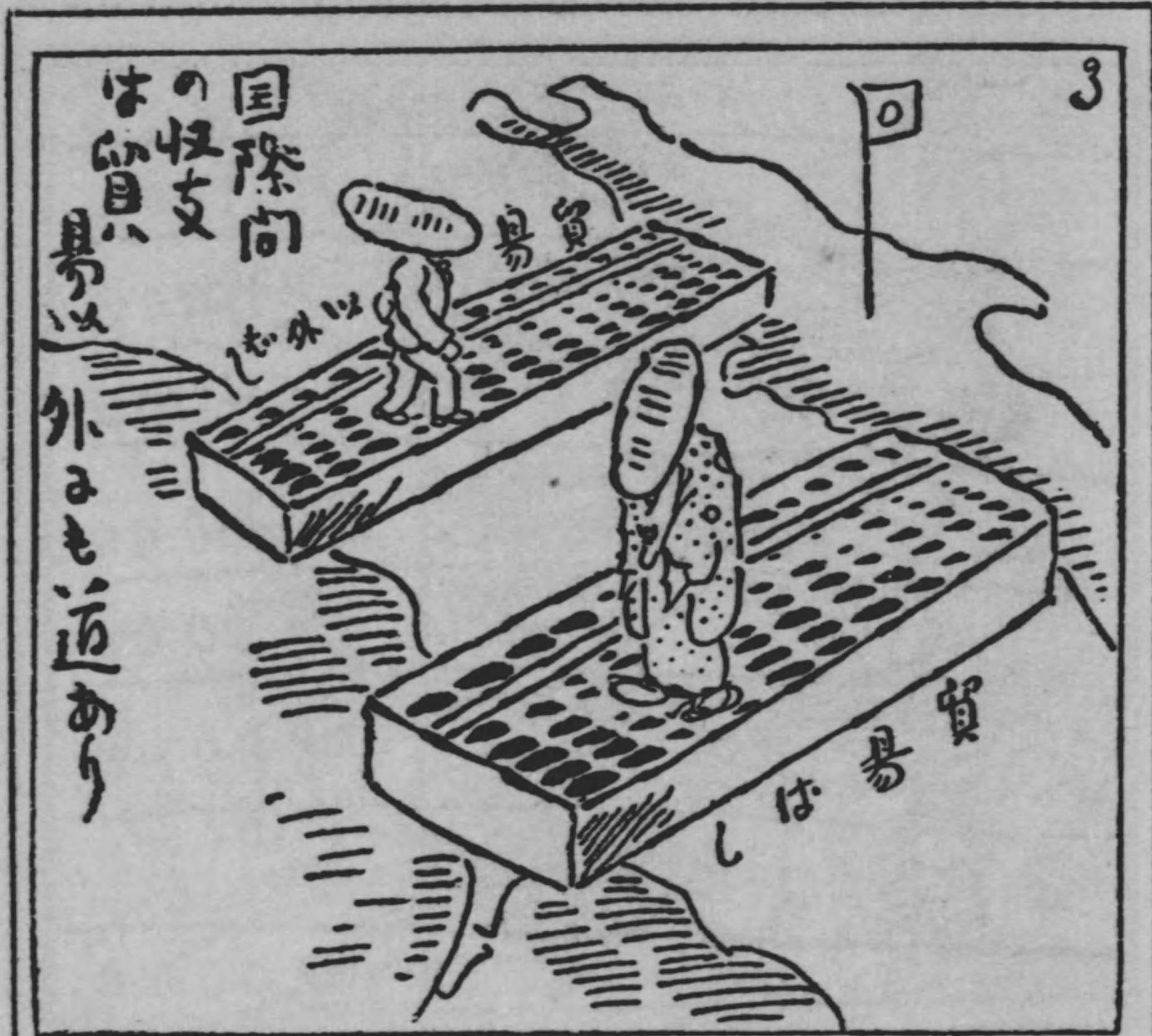
登 場 人 物

有志家總代 尾崎 眞暗
 代 議 士 陣野笠右衛門
 米國歸朝者 加勢 儀造
 海外商店員 外野 延
 聽 衆 大 勢

有志家總代尾崎眞暗「諸君、これより當地方の爲めに絶えず献身的努力をつゞけらるゝ代議士陣野笠右衛門君の御挨拶があります、どうか御静聽あらん事を希望いたし

出雲、小館「眞つ平く。」

生野「一體なら此上火の手が擴がつてもう少し行き詰つてくると君達の痛快も一變して悲鳴となり、身にしみたにがい體驗から國民の經濟常識も少しは發達しやうといふものだ。」
 出雲、小館「それには及ばないよ、痛快の取消には異議は無いよ!!」(三、四、二九)



三千二百萬圓に上つて居ます。」
 藤原乙「輸入超過だよ！」
 陣野「さうであります、それで在外正貨は益減少し更らに利廻り七分一厘といふ國辱外債まで募集せねばならぬ悲況に陥つて居ります、こゝに於て我黨は産業立國の見地に立ち……」
 藤原丙「肥料を公平に分配し……」
 尾崎「諸君靜肅に願ひます。」
 陣野「積極政策により國運の隆昌を期するが爲め、當地にありては更に中學校、高等女學校の増設



ます。」
 代議士陣野笠右衛門「諸君、私は只今尾崎君から紹介せられたる陣野であります……諸君今日は如何なる時でありますか！」
 藤原甲「昭和二年七月であります。」
 陣野「さうであります、その昭和の日本がですナ、經濟上に於て、正に行きつまりつ、あります、現に昨年の貿易はどうでありますか、輸出二十億四千四百萬圓に對し輸入は實に二十三億七千七百萬圓の巨額に達し、輸出の超過三億



5

出立産業
の雄次女

本だけ一層に考慮していたゞき度
いのであります。」

陣野「と云ひますと？」

加勢「選挙区の御機嫌取りも大
事でしょうが、海外発展にも充分
力を入れて下さいといふ事であり
ます。」

陣野「さうであります、だから
今春の議會には海外移住組合法を
制定し、百八十萬圓の豫算で土地
購入、道路の改修、土地の區劃調
査をはじめ、企業移民の保護奨励
にかゝつてゐます。」

加勢「聊か註文の出しおくれだ



益の汗稼出外海	
企業収入	123000,
外国証券利息 配当	20000,
保険関係収入	104000,
政府海外 収入	240000,
外国人本邦 内消費	48000,
日本船舶 海外収入	185000,
雑収入	x
	520000,

を圖り、床^{とこ}上川の河川改修工事の
速成を期し、間野^{まの}拔野間の鐵道建
設年度割を短縮し、更に竹柱^{たけはしら}萱根
間の鐵道延長により、益當地方富
源の開発につとめんとしつゝある
のであります。」

聽衆「とてもエエゾ。」

米國歸朝者加勢^{カセ}鐵造「陣野君に伺
ひます、貿易の逆超といふ事も尤
であります、貿易以外に吾々多
年海外に出稼して居るものが、粒
々辛苦してかせぎ上げた血と汗が
毎年内地に約七千萬圓近くも送金
されてます、此點は輸入超過の日



がまだ二百萬圓足らずではとても満足出来ないであります。」
 海外商店員外野延「加勢君の意見を補足します、由來國際間の收支は貿易外に只今加勢君の述べられた海外出稼人の勞務收益、之に南洋のゴムなど企業の收入を合せて約一億二千三百萬圓、之に外國證券の利子配當が二千萬圓、保險關係から一億四百萬圓、政府の海外收入二億四千萬圓、外國人の本邦内消費が四千八百萬圓、日本船舶の海外での收入が一億八千五百萬圓、之に雜收入を加へて約五億二

千萬圓、之に丁度同じやうに反對に海外に落ちる金が三億五千七百萬圓、つまり貿易外の經常收支が差引一億六千三百萬圓の收入超過になつてゐます。」

陣野「イヤ之は誠にお精しい事で……」

外野「ところがこゝに出商業なるものがある。」

陣野「さうであります。」

外野「知つてゐるのですか？」

陣野「イ、エ。」

外野「イヤ知らなくても耻にはなりません、此間商工審議會で初めて製造された出來立ホヤホヤの名前です。」

陣野「ト申しますと……」

外野「海外諸國相互間の商業です。」

陣野「と申しますと……」

外野「昔し近江商人といへば近江を飛び出して他國で商賣をした、我國でも此狭い天惠の薄い日本だけでははじまらない、日本をそとに印度や米國と歐洲間の棉花の取引をする。印度支

那などとジャバとの砂糖の取引をする、南洋支那相互の米の取引、その他生絲、小麥、豆油、大豆、豆粕、ゴム、綿絲、罐詰、ガシニ、ヘシアン、木材、鐵などを歐米と云はず世界各地を股にかけて取引をする運送をする、此取扱高でも一年概算三億萬圓を超えてるのである。」

陣野「盛んなものですナ。」

外野「鈴木商店、三井ことに國際汽船などが主としてかせいだので、世界大戰の時などは鈴木一手で五億近くも取扱つたでしょう、従うて國內の仕事は二段としてかうした海外の事業は一度挫折すると外人の手にうつる、再び築き上げるのが中々困難です。」

陣野「ソレハお説の通りであります。」

外野「然るに^{かむな}節穴同様の眼しか持たない日本人はそんな事のある事すら知らないから、出商業につきては金融上運送上あらゆる方面につき何等の便宜を與へてない、保護奨励どころか出商業によりて利益を得ても、所得税は其土地で課税せられた上に又本邦でも二重に課税せられる、實に眼先の見えぬにも程があつたものです。」

陣野「イヤコレハ御尤も千萬で……」

外野「加勢「猫の額の上の地盤擁護も大事だらうが、かうした方面にも一つ力を入れてくれな

くては……」

陣野「イヤ貴説全然同感だがどうして中々ソウは手が廻らないで……」

外野「加勢「どうして……」

陣野「どうしてにも日本の國全體の事が中々まとまらない、早い話が廣軌にして輸送量をまし運賃を引下げ、全國的に生産費を低下するといふよりも、ソレ々々選舉地盤の中で新線延長といふ方が忙しい位だから。」

外野「加勢「ケレドモ來年は普選ですよ！」

陣野「サアそこで頗る頭をなやめてるのでネ……」

外野「加勢「マア心配せえでもあんたは落選確實やから！」(二、六、三〇)

郵便と煙草

登場人物

村の者	尾崎坊太郎
同	大木仁惣太
新來の先生	堂下駒太郎

尾崎「先生今日は」

大木「先生今日は」

堂下「これは揃うてよう見えた、さあ〜おあがり、今日はまた一段と暑さがきびしいやうぢや。」

尾崎「へえ！ 大きに……いやもう此あつさではゆだつて仕舞ひまんネ。」

大木「しかし先生、天氣はぢり〜とあついが懐中はびゆう〜と北風でふるえてまんネ。」

堂下「そりやお前いつもいふ通り、あの世界大戰の好景氣に浮いた〜と經濟はふくれたが戦がすんでも引きしめない、出錢はもと通り、は入る金はうんとへつた、そりや懐中も寒うな

らいで何んとしようぢや。」

尾崎「そこが何んとかなりまへんか、もうい、加減に景氣も直つてくれんと。」

堂下「火事泥は泥棒の方には都合がよいが、火事に遇ふ方はたまらんからな、さう戦争が起つてたまらうかい。」

尾崎「けど先生、政府の財政やかてふくれる一方や、何んでも今度の内閣も積極政策とかいうて大分ふくれるのやいふてまつせ。」

堂下「さうだふくれる、借金してでも借りた金は返さなくても、今度の豫算で各省の新規要求が二億圓突破とあるな。」

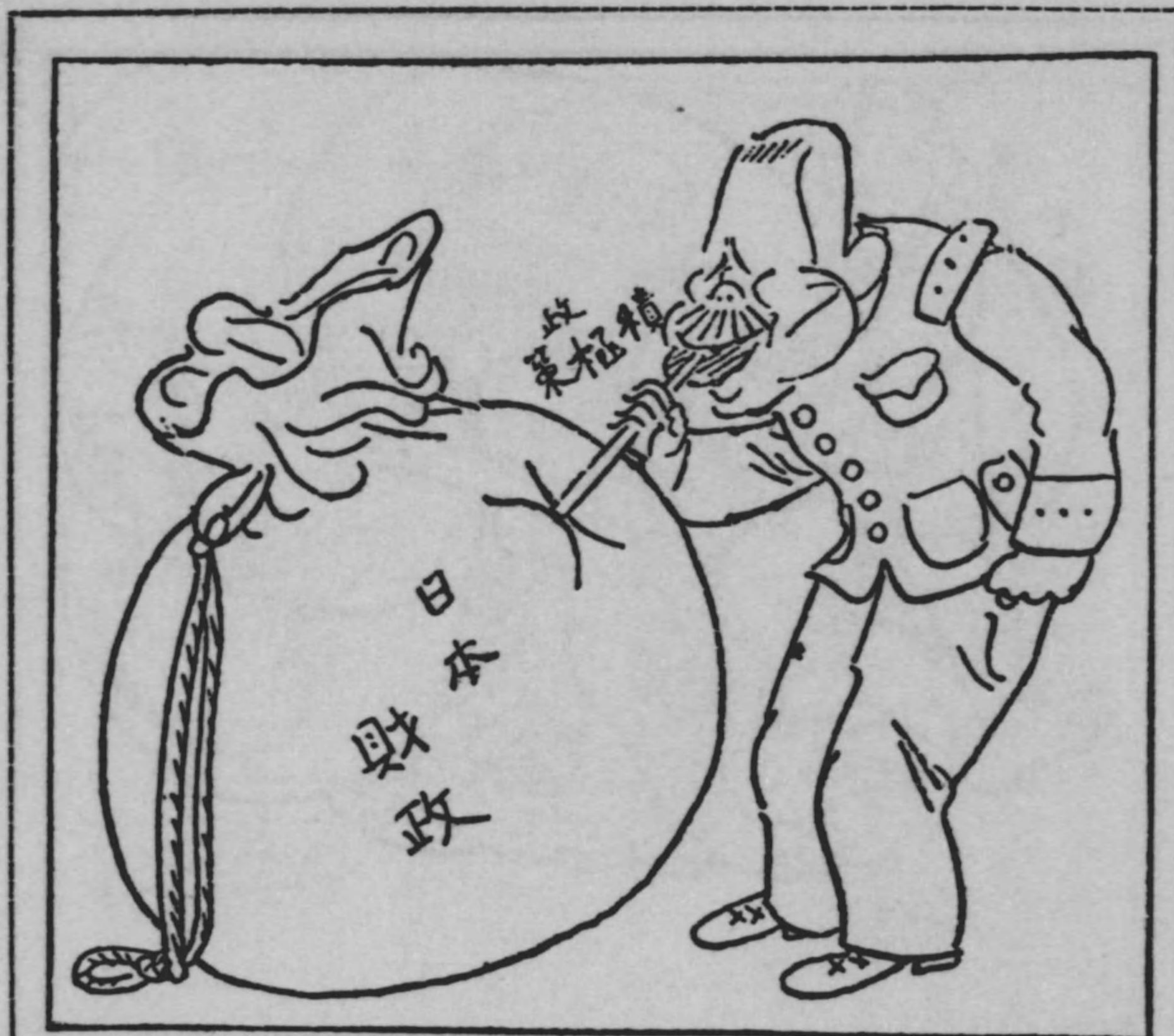
尾崎「そんなに金がありまつかいな。」

堂下「無いよ、無くても各省の大臣は日本の財政といふ事よりは、黨勢擴張の爲め自分達の省の爲め豫算の分け捕り功名に忙しいからな。」

尾崎「でも無い袖は振れまへんな。」

堂下「振れない、けれども無理に振るからな。」

尾崎「先生、先日の新聞に郵便料の値上げあれだすやろ。」



この郵便、あとの二つは鐵道と煙草の専賣だな。」

尾崎、大木「なるほど。」

堂下「われ／＼は郵便も出さねばならぬ、汽車にも乗らねばならぬ、煙草も吸はねばならぬ。」

尾崎「ところで先生汽車に乗らずに一々歩いては騒動やけれど、煙草はのまんでもよろし、のむとかへつて健康によくない。」

堂下「その通り、しかし理窟をはなれて實際問題には入つて見よう、なるほど煙草は飲まぬに越した事はないが、事實大勢の人が飲

堂下「お前いつも小説や講談ばかりしか讀まないかと思ふたら、これや感心だ恐れ入つた。」

尾崎「先生堪忍しておくれやす。いくらわたいかて小説や講談ばかりだろは殺生やな。」

堂下「それならあとは五人殺しにモダンガールの記事かね。」

尾崎「なほ悪いがな。」

大木「先生話の腰折すに郵便料の値上げて、あれどうだんね。」

堂下「あれは葉書の一錢五厘を二錢に、二錢の手紙を四錢といふのだつたな。」

尾崎「さうだ：：それで總選舉を前に控へて増税特に消費税の性質を帯ぶる生活必需の通信料金を値上げするは不利なりとの有力な反對論が出たとありまんね。」

堂下「ハ、ハ、ハ、おきまり文句だ、こりや大笑ひさ。」

尾崎「けど先生、此上郵便代まであけられてはどだいなひまへんで：：」

堂下「さうだ、私も何も郵便料の値上をえ、とは云はない、しかし郵便料の値上げはいつも問題にはなるが議會まで顔を出さない、こゝに飛んだ辻つまの合はない滑稽があるのだよ。」

尾崎「左様か、そんなに辻つまの合はぬ事がおますかいな。」

堂下「大いにあるね、先づ政府が租税と借金を除くと、ざつと大口で三大財源がある、一が



ところ皆これをい、財源として値
 上げをしては増収をはかる、煙草
 だつてもとは従價二割の印紙税に
 してあつたが、あれでは眼立つて
 思ひ切つた収入が上らない、そこ
 で明治二十七八年の戦役に禁煙草
 の專賣となり、三十七八年戦役に
 製造輸入販賣共全然專賣にして、
 あとは面白いやうにうなぎ登りに
 値上げしてきたのだ。」

尾崎「さよ／＼さう云へば煙草
 の値はよう上つた、岩谷の天狗煙
 草などは中天狗で五十本六錢」
 大木「千葉の白牡丹が五十本八



むのだ、又のみだすと中々やめら
 れない、郵便とて婦人や子供はさ
 う利用しない、いや男子でも中々
 一日一本と出す人はさうたとな
 い、そこで煙草は中々やめられぬ
 ものだから、酒とならべて何れの
 國でも大きな財源にしてある、も
 しこれが國民の保健上飲まない吸
 はない方がよいとすれば、禁止税
 というて途方もなく値を高くする
 がよい、酒一升到十圓の税を課す
 る、敷島一袋の代金を五圓にする、
 さうなればさすがにのどが鳴つて
 も手控へるだらう、ところで今の



は一年の國債利子支拂高や全國小學校の教育費より失敬してよ。」
 大木「あ、さよか、そんなにのみまつかいな。」
 堂下「そこで敷島煙草二本で一錢八厘、葉書一枚で三厘のおつりがくる、四本で三錢六厘手紙一本に六厘のおつりがくる、どうだい郵便料は安すぎると思はないかね。」
 尾崎「なる程こりやとんと気がつきまへなんだ、煙草二本で臺灣から樺太まで便りしてくれるのやさかい、とても安すぎまん。」



「錢」
 尾崎「サンライズが十本入りで三錢おまけに美人の繪カードまで景物には入つてたな。」
 堂下「さあその煙草が專賣となると、敷島が二十本入一袋八錢が振り出しで、十錢、十二錢、十五錢、今では十八錢になつてゐる。」
 尾崎「考へて見ると諸色は高くなつたが、煙草のあがり方も大變なものだんな。」
 堂下「一年に二億六千萬圓を煙にし、一億五千萬圓の純益をあけてるのだから、どうして此消費高



堂下「さあそこで一日一袋吸ふとしたら、葉書が十二枚三錢切手が六枚買へる、一日數島一袋吹かすのは珍らしくない、いや煙草のみは一袋位で納まらない、ところで毎日葉書を十二枚なり手紙を六通郵便に出す人は一體何人ある？」

尾崎「いやこりや理づめや、わたいら毎日煙草はなるべく控へ目にして飲んでまつけど、つる一日に二袋はか、さずのみまん、それで義理が缺ける便りせにやならぬ返事を出さならんと思ひなが

ら、なにもしまつしやうといふわけやおへんけど、つる筆不精なものやさかい、氣にしながら面倒臭さうて、一日く〜と無沙汰になりたがりまん。

堂下「だから煙草は贅澤品だ、通信は一般的生計に必需のものであるなど、いうてるがアリヤあべこべだ。煙草の方はどしく〜あける、郵便料の方はいつも据置にしてる、これが辻つまが合はぬといふ事だ。」

尾崎「こりや先生のいふ通りや、郵便料を上げられてもよろし、煙草の方がつらい、巻煙草二本分にあたる葉書の方はよくせきの事でないと郵便に出さないが、煙草は間がなすぎがな吹かしたがる、意地の汚ないもんでなあ。」

堂下「そこで内閣でも政黨でもなぜに郵便料値上げをいやがつて、煙草や鐵道の賃金ばかり上げるかそのわけを知つてるかね。」

尾崎、大木「知りまへんな」

堂下「一つの理由は鐵道の賃金や煙草の料金は議會にかけずにいさくさなく値上げが出来、郵便料だつて議會にかけずすめば、まさか一錢五厘などいふ厘といふはしたはとうの昔とれてゐたであらう、ところが郵便料は郵便法といふ法律の中に規定してあるから、之をいぢ

くるとなると議會にかけねばならない。」

尾崎「それでも議會へはいつもたんと法律案がでるやおへんか。」

堂下「そりや出る、しかしその法案の通過する与否とが豫算に影響するものは、通過する確信がつかないとうつかり出せない。」

尾崎「なんで税金のかゝる法律案がどしどし出るのに、郵便法だけ通過の見込が少ないいうて提案を遠慮しやはるのだすやろ。」

堂下「そこがお手の筋拜見だ、表門では多数民衆の爲め負擔を重くするといひながら、實は郵便料の値上げに一番閉口するのは議員様々だ、次には今の有権者だ。」

尾崎、大木「といふのは……」

堂下「はて分かりの悪い、無産階級なり中流階級でも、多数はさう郵便を利用しないが、銀行會社商店などになると随分郵便を利用する、ことに代議士はそれ年賀それ暑中御伺なんのかのと有権者に葉書一枚づつ、でも一萬人に百五十圓、十萬人に千五百圓、さてこれが自分の懐から出すお金となると十圓二十圓でも深甚なる考慮を拂ふネ、とにかく歳費は増さう汽車賃は無償にと心懸けてゐる方々だらう、すぐ自分達の頭へピンとくるネ、これ郵便料金値上げが口を國

民の爲めといふに借りて、いつも議會へすら顔を出さざる所以なりさ。」

尾崎「なる程ね、いはれを聞けばありがたし、こりや先生のいはる通り圖星だんな。」

堂下「それで念を押しとくがな、煙草の方でも酒の方でも、何も下級の者だからのみ方が少ない、上流の者だからのみ方が多いといふわけではない。」

尾崎、大木「大きに」

堂下「下級だから煙草は一日一袋、酒は一合、上流だから一日百袋の煙草、五斗の酒をのむといふわけにいかぬ、富めるも貧しきも人間一匹のみ料には自から限りがある、郵便の方は下流の者は一日一本にも當らないが、上流の方は一日何十何百本といふ例がある、眞の社會政策の上からいへば煙草の値上げは下級者いぢめで、郵便料の据置は上流者保護といふ事になる。」

尾崎「それで先生いろくよく御承知だが、郵便料を値上げするといかほどになりますやろ。」

堂下「實は皆下村海南の財政讀本中、專賣收入や官業收入のところに精しく出てゐる、わしは今郵便料値上げ問題といふところを一寸受けうりしたのだがな、エエとまつて下さい……ハア書狀の三錢を四錢にして約八百三拾萬圓、葉書の一錢五厘を二錢にして約千二百六十四萬

圓、通計二千餘萬圓の増收と記してあるな。」

尾崎「其なら郵便料上げて貰ふ方が氣が利いてる、先生商店のちらしやとか、刷りものやと
かありや料金は別だすやろ。」

堂下「左様々々。」

尾崎「それから代議士候補も今度の普選からは一回だけは無料になつたよに聞いてまんね、
さうだつたか？」

堂下「その通り。」

尾崎「そんなら専賣や外の税で負擔を重うされるよりは郵便の値上げの方がまだましやお
もひまんね。」

堂下「けども代議士なんていふても當り前の人間や、自分の頭の蠅は逐ひたいからな。」

尾崎「けど無料で」

堂下「それは一回だけでおまけにもう既得權だ、まあ少しでも荷を軽くしたがるからね。」

尾崎「だから先生普選にならんとあきまへんな。」

堂下「さあ普選になつてからがこれだけの事がちやんと頭へは入つてる選舉權者が何人ある

かな、今の政黨も地方民も政權の方は知つてるが政見の方はよく見えないからね。」

尾崎「公民教育たらいうてまあ折角みんなに理解してやるのやな。」

堂下「それが大事だが尾崎さん念を押しておくよ、私は頭から經費節約財政整理といふ事
を八釜しくいうてるので、此上會計がふとる許りで、諸色はますく高直になる、國民の負擔
が重くなる、貿易が逆調になるやうな事はさけない、是非やらねばならぬ事あればそれだけ一
面に節約して財源を捻出せよ、増税は勿論減債の中止には反對、起債も大に考へてほしい、郵
便料の値上も好ましくはない、しかし今迄三錢と一錢五厘に据置であつた事は、煙草や鐵道運
賃などの振合から全く釣合がとれてない……」

尾崎「先生よう分つてる、先生の心持をあんばいよう宣傳しますわ。」

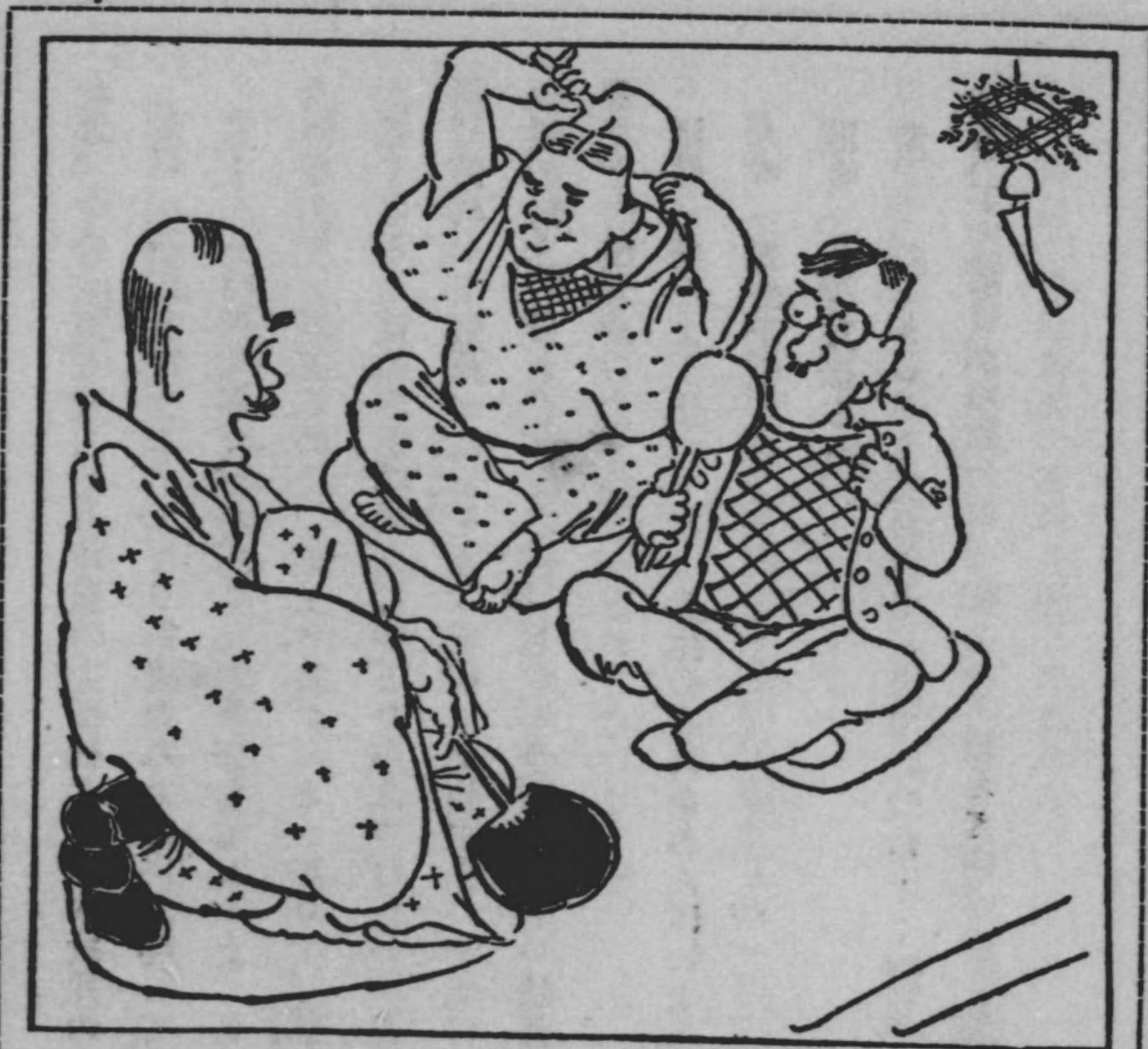
大木「先生左様なら。」

尾崎「先生左様なら。」

堂下「あ、コレく又あはて、出ていつた……煙草を忘れていて……は、あ、まだ半分残つ
てる、丁度葉書が八枚分か、かうして消えてゆくのも莫大なものぢやろなあ。」(二、八、六高輪)



尾長「大きに……」
 早井「おつさん、おれらが、よ
 ばれよとおもてんのに……」
 尾長「そや／＼……お菊どんあ
 られ三ついうて……」
 甲野「おつさん、大きに御馳走
 はん、こりや、きばつてあられや
 な一杯十銭や。」
 早井「高なつたものやな、氷も
 氷やが砂糖がえらいこつたな。」
 尾長「そりや日本といふ國は關
 税の壁をウンと築き上げてなにも
 かも高い一點張りや、砂糖やかて
 さうだすやろ。」



さし潮ひき潮

登場人物

會社員の卵 甲野 與市
 同 早井 乙平
 中古の會社員 尾長丙太郎

甲野「おつさん、どうや。」

尾長「まいとし、おんなじ事い
 うてるやうな氣もするが、今年の
 夏は格別や。」

甲野「あついな。」

尾長「あついな。」

早井「なんぞよばれまひよか。」



早井「今日はおれも獨逸の船の話聞いてほんまに感心してまんね。」

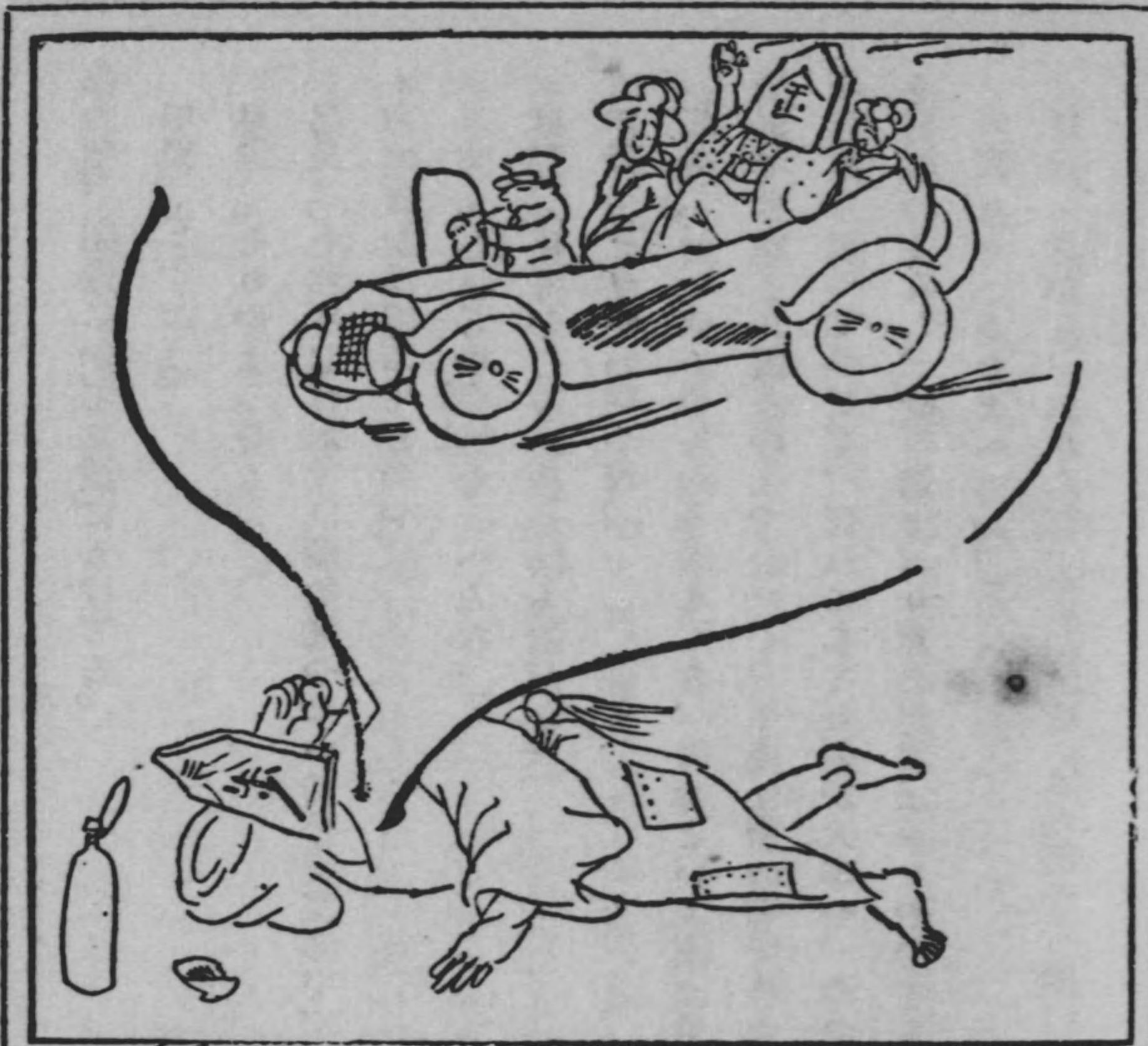
甲野「どうしたんや。」

早井「獨逸はな、あの戦^{いさ}まへはな、船の噸数が五百四十三萬噸あつた、英國が一番で獨逸はアメリカより少しおほて世界で第二番やつた、それがなんとあの戦にまけたさかいにたんと船は無いようにした、残つてる船はみんな勝つた國へやらねばならんし、なんでも船の数が一千隻噸数が四百六十二萬噸といふものをもぎとられた。」



甲野「さうなると獨逸はえらいな、日本は臺灣で砂糖を自前でつくりながら高い、獨逸は甜菜糖い^いうてビートいふ大根から安い砂糖をたんとこしらえたな、おつさん！」

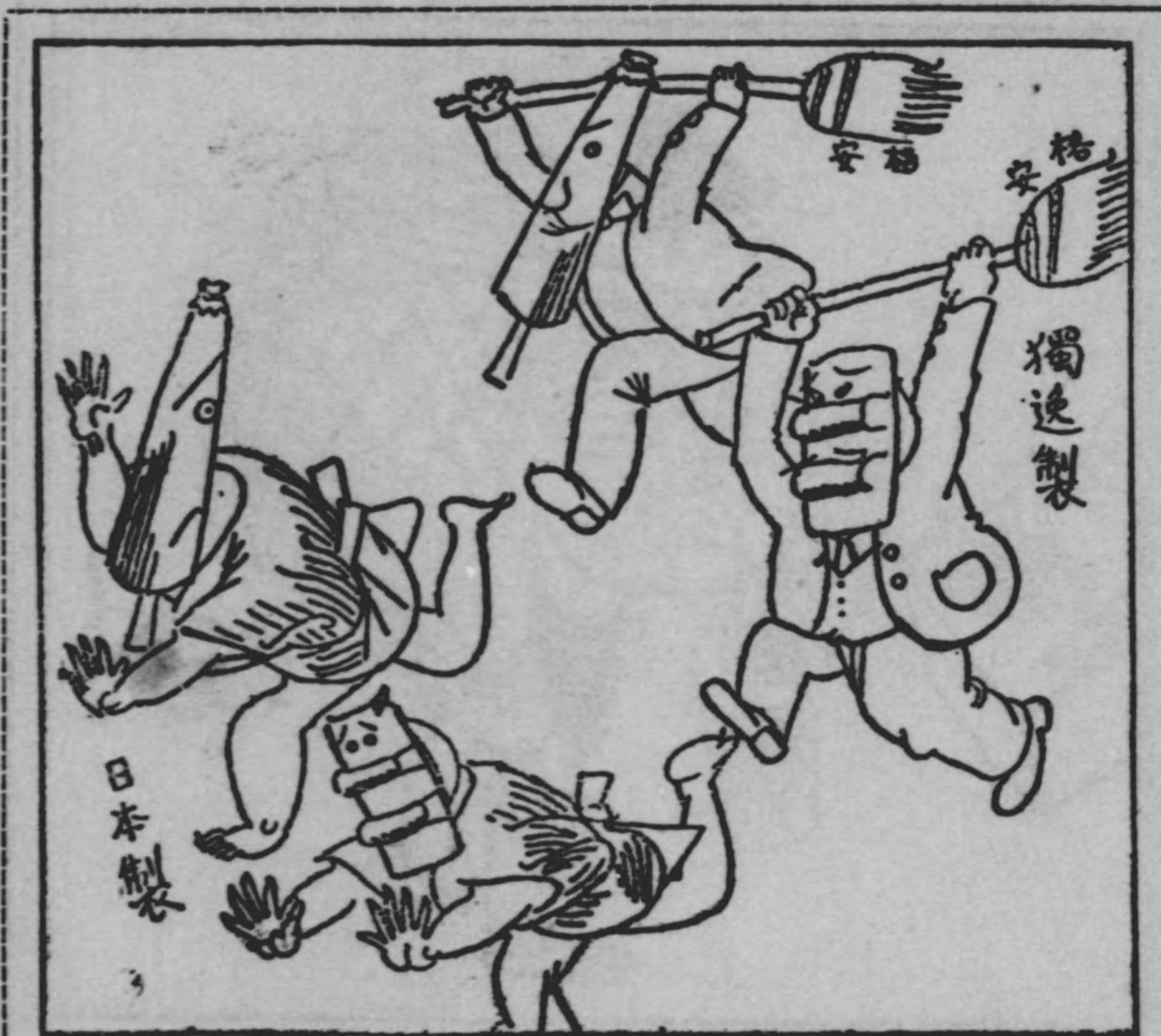
尾長「いや〜砂糖ばかりやない、染料でも何んでもみんな自分とこで好い品を安うでつくり上げる、樟腦かてさうや、日本は臺灣で天然樟腦ばかりとつてる、獨逸はアメリカからどしどし松脂^{まつやに}を仕入れては人造樟腦をつくつて逆にアメリカへも賣り出してる。」



夏は四百三萬噸でやつ張り第三番を踏みこたえてる。」

甲野「えらい!!」

早井「びつくりするがな!?! けどな全く頼りない四百萬噸でな、英國は二千萬噸近く米國も千五百萬噸といふから、上の方はうんとへだつてるが、あとは伊太利が三百三十九萬噸、佛蘭西が三百三十六萬噸、獨逸が三百三十二萬噸で、まづ似たりよつたりや、そこへ五千噸以上とか十二ノット以上とか、船齡二十五年未滿とか、まづ優秀な船の比較となると、今でも



甲野「やれ〜きつい事や。」

早井「だから戦のあとはたゞの六十萬噸になつてゐるが、さあそれからどし〜船はつくる、頂戴した國で持てあまして賣り出した船を入札でせり落して買ひもどす、五年目には三百萬噸、最近は三百三十二萬噸までうなぎ登りに上つて来た。」

甲野「それで日本はどうなつてんね」

早井「日本は戦前は百七十萬噸で第五位であつたのが、戦後英米に次で第三位となつてな、今年の

第六位で獨逸にかて立派にまけてる。」

甲野「どうしてや。」

早井「そりやよう分らん。」

尾長「それはな日本では船舶業やない船舶賣買業で、い、船を新しく造るのでなうて、ボロイ古船ばかり買ふてるのや。」

早井「それぢや長持しまへんな。」

尾長「長持どころか鼻が落ちるがな。」

甲野「そりやわややな。」

尾長「わいはいつもかうおもてる、日本といふ國は地震と海が名物や、そこであ水産業の發展で食糧とか貿易の上でかせぐ、今度は船の方で日本相手の航路ばかりやない、世界の國々をわたり廻つてかせぐ、何れにしても船が大事や、今のやうに澤山な補助を貰うてる會社は半分居眠つてるし、社外船はボロ船の相場ばかりやつてる、これぢやどだいあかんな。」

甲野、早井「あきまへんか。」

尾長「あかん、あかん、その證據には支那から桐の材を仕込んでるはるぐ獨逸まではこぶ、

そこで下駄をこしらへる、日本から竹を仕入れる、はるぐ本國まではこんでそこで唐傘をこしらへる、日本人しか使はん下駄や傘をまたはるぐ日本へ運んで来て關稅や運賃諸が、りを勘定に入れて、それでまだ割安といふので内地の下駄や傘が追ひまくられてる。」

甲野「ほんまかいな。」

尾長「ほんまやがな、それほど日本の諸色はたかうてものがわるい、つまり日本は世界の大戦で浮いたくと法外に値が上つたが、戦がやまつて反動で値が下つてくると、それ大變だと生産制限とか關稅引上げやとか、物價の釣上げばかりで、引汐にならうとするのをたゞ無理矢理に止めてる、獨逸は戦で敗けて貧乏にもなんにもたとへようない塗炭場につき落され、そのドン底から今差し汐で上つてくる、つまり引き切らぬと差汐にならんといふのやな。」

甲野「そやぐ人間の根性も戦の時の夢がまだ醒め切つてないな、この鹽梅ではいつまでたつてもらちがあかんやろな。」

早井「バットしまへんな。」

甲野「なつてまへんな。」

尾長「どだいわやや。」



忠臣と良臣

(石井定七東海銀行
を活かす)

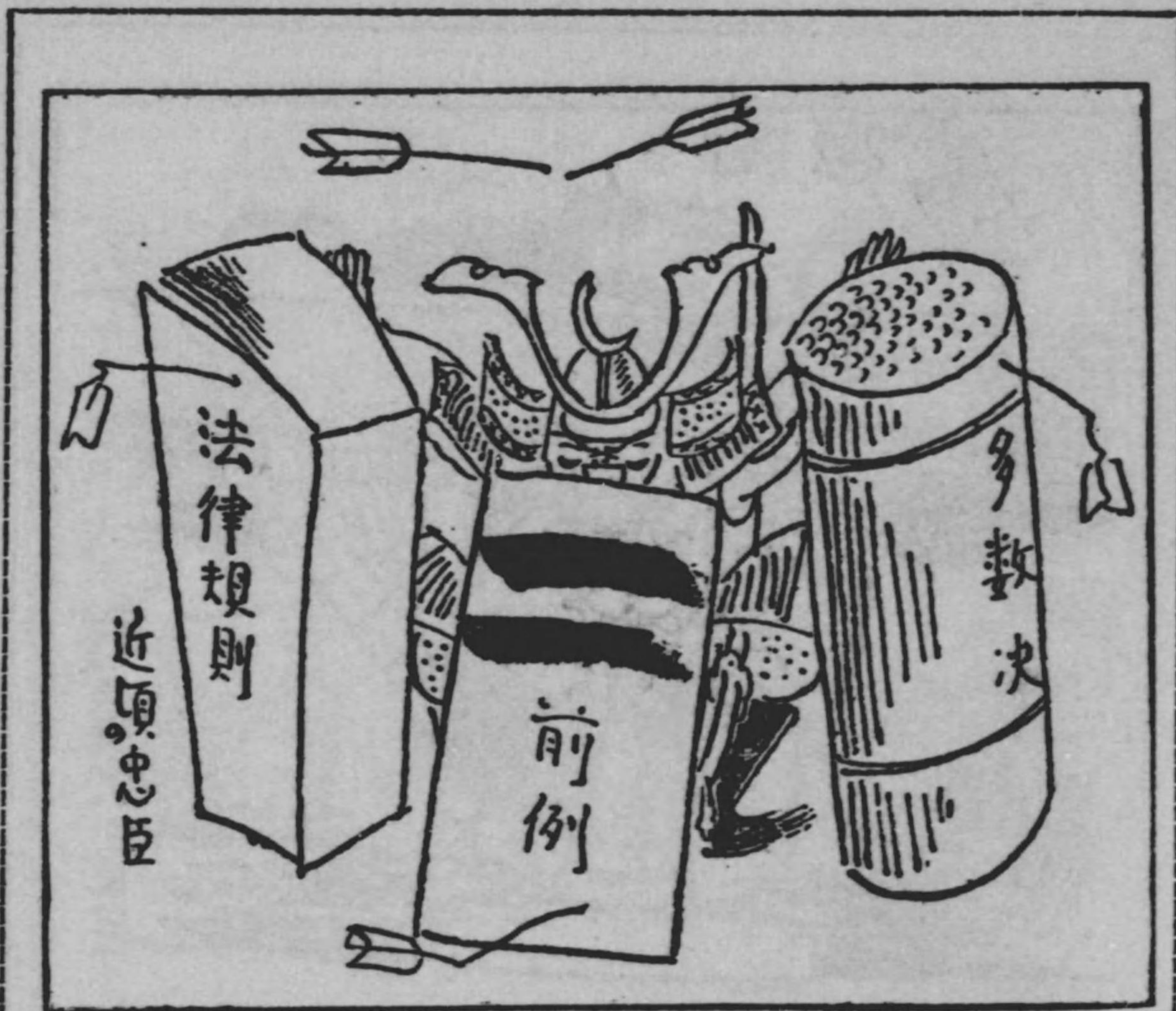
登場人物

元銀行重役 白井 木庵
舊弟子分 早伊賀勝太
舊東海銀行員 松竹野暮太

願使_三臣爲_三良臣_一勿_レ使_三臣爲_三
忠臣_一、櫻契早陶君臣協_レ心、俱
享_三尊榮_一、所謂良臣、龍逢比干
面折廷争、身誅國亡、所謂忠
臣。

早「先生此軸ものは？」

白「これはね魏徵が唐の太祖に



申上げた詞だな、實際龍逢比干の
やうに暴君や暗君に出くわして、
諫めて容れられず首は斬られる
わ、國は亡びるわではね。」

早「つまり太祖は明君で魏徵が
良臣だったのだね。」

白「さうだ、まだ房玄齡その外
良臣が澤山居たね。尤も忠臣だか
らとて暴君暗君の時に限らない、
國亂れて忠臣現はるで、まあ諸葛
孔明でも文天祥でも……」

早「淺野侯へまをやつて四十七
士出で、幕末亂れて白虎隊現はる
といふわけですな。」



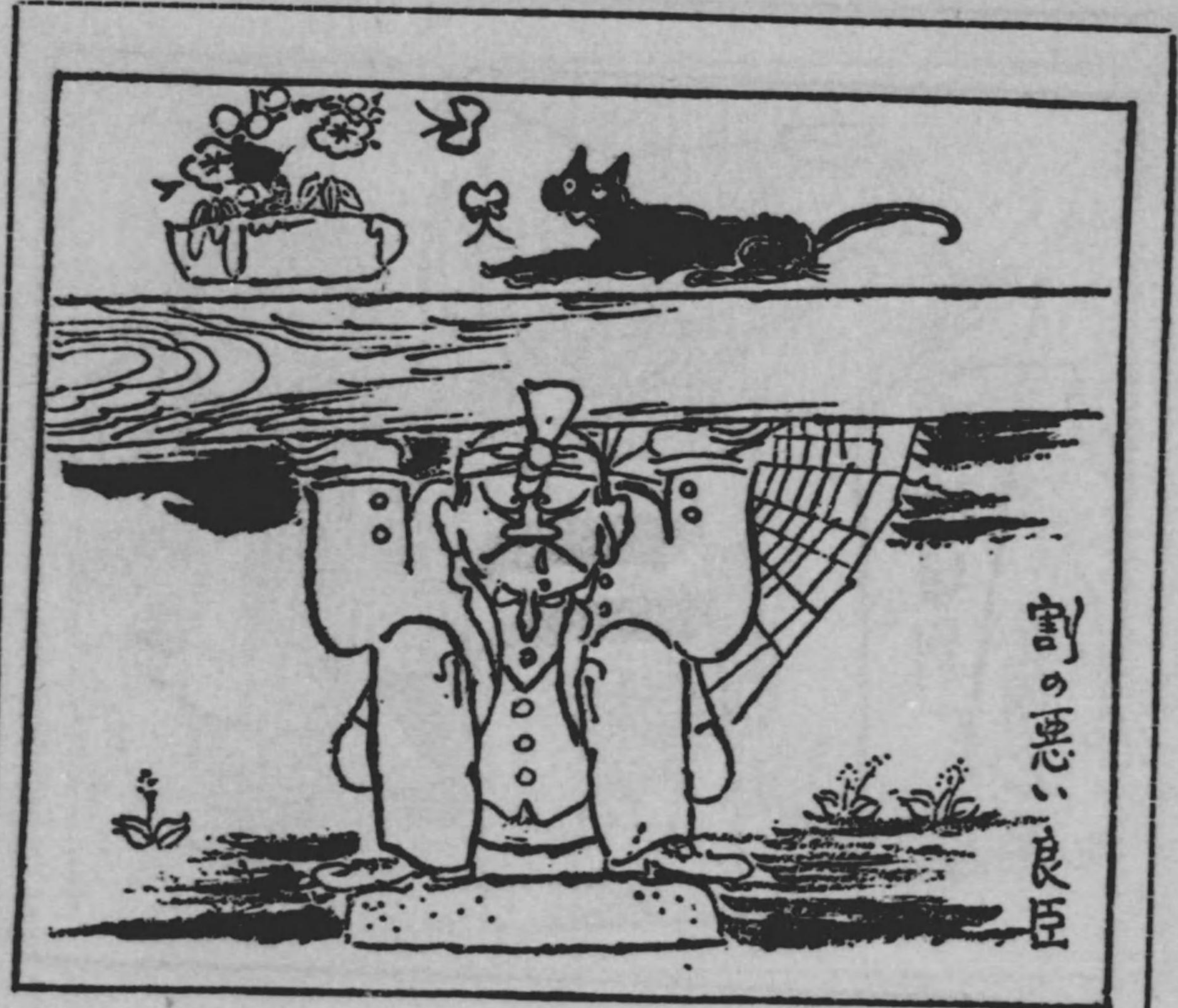
血みどろの大合戦だね。」

早「そこで忠臣は？」

白「さあ高橋の達磨さんが出て
一と先づ火の手は静まつたが、さ
てまだあと始末は中々つかないや
うだ、パニック起つても忠臣少な
しかね。」

早「近頃の忠臣は身を殺すとい
ふ事はない、みんな法律規則や先
例や多数決などいふ城壁に立てこ
もりますからね。」

白「左様々々みな頭が好すぎる
利巧すぎる、屁のよな事まで見え
もする氣にもする。どうせべら棒



白「その通りく。」

早「さうなるとチャン／＼バラ
バラの戦國から憲政の世の中に移
つたから、もう忠臣の出場もなく
なつたわけですか。」

白「左様々々昔のやうな事はな
くなつたが、早井賀君なにもチャ
ンバラ許りが忠臣の御宿ではない
よ、議會に於ける言論も銀行會社
の取引も、矢つ張り戦の駆引だか
らね。」

早「ぢや此間の經濟のパニック
も？」

白「あれなどは立派な經濟界の



本銀行に今少し氣の利いた良臣が
 るたら、あ、したへまな事になら
 ずにすんだのだらうが：、どう
 も良臣といふやつは骨が折れて眼
 に立たず全く割がよくないね。」
 早「それにしても一人や二人位
 良臣も居なくてはね。」
 白「さあ、さうなるとあの加納
 友之介な、あの人などは良臣と思
 ふね。」
 早「どうして？」
 白「どうしてと？ 東海銀行を
 第一銀行に合同しておいたから、
 あのパニツクから東海銀行を見事



な大穴があいてる、誰も彼もそれ
 ぞれ辛抱せねばならぬ、我慢せね
 ばならぬ、重役から株主から行員
 から預金者から得意先に債権者、
 どれもこれも満足しさうなはずは
 ない、もうけたお金の分け前にで
 も喧嘩がおこる、況んや袋の背負
 ひ合ひ損のなすり合ひに於てをや
 だね。少しは犠牲的精神と誠心誠
 意と金石をとかす熱を以てだね：
 ……
 早「いやよう分つてます、そこ
 で良臣の方は？」
 白「さあ前の内閣で大蔵省や日



ね。
 早「それから？」
 白「さあそれからはわしもよくは知らない、松竹君、君は始めから黙りこくつてるが、東海銀行に居たのだからよく知つてるだろう、ありやどうした手順であつたのかね。」
 松「さあ、たしか加納さんの東海へ乗り込んだのは大正十四年の七月頃と記憶してます。ところで貸借関係から預金などしらべて見ると、高利の預金が多い、その癖利息の取れぬものが一千万圓を超



に救つたではないか。」
 早「さうくありやどういふいきさつでしたかね？」
 白「いやわしも精しい事は知らん、只加納といふ人が住友の常務をしてゐたが、石井定七事件で責を引いてやめた、石井事件では殆んど手紙を負はない銀行はない、その中で住友はちやんと重役が責を引いた、引いた人も引かした銀行もあ、ありたいとおもふ。そこで鮮銀だとかいろいろのところへ加納君復活の聲が高かつたが、東海銀行の頭取といふ事になつた



商業の金融機関として存続經營の必要ありといふので、先づ重役をいろ／＼と説得した揚句、とうとう重役一同の辭表をまとめ、之を懐ろにして頭取は單獨整理にかゝりました。

白「それは／＼並大抵な事では無かつたらう！」

松「現に頭取は就任してから高利の預金や兩立など約五千萬圓に上つてゐたのを四千萬圓までに整理したので、かなり整理に力を入れたものでした。ところが新參の加納が何をすの、あんな



えてる、貸した金は焦けつゝいてる、震災手形はそのまゝになつてる、こりやこのままでは自己中毒を起す、まして經濟界がだん／＼物騒になつてきた、そこで頭取はなんでも單獨整理と合同整理とそれぞれ研究の上成案をつくつたさうです。

白「なるほどそれは奇妙な事ぢや。」

松「ところで合同するに、して、も、さきの東海の七十四合同とか、十五の川崎浪速合同のやうな事では宜しくない。ことに東海は中小

なひどい整理をしなくとも立派にやつて見せると、或る一派が反対運動を起して株の買占にかかる、中にはまとめて二萬株位賣つてもよいと之に策應するものが出る。」

早「そりや大變！一體そりや誰かね？」

松「いやまあこりや僕等の又聞きだから名前も分つてゐるがそりや……」

白「よろしい、そんな事はどうでもよろしい、それから？」

松「頭取も重役や株主の中に統一を失うては中々遂行が困難であり、先の見込もつきかねるので、とうとう昨年十二月十五日と聞いてますが、合同と腹をきめ十八日でしたか第一銀行に交渉をはじめたさうです。」

白「第一銀行とねらつたのは？」

松「なんでも」

第一に資産を急速に適當に判断し査定しうるところ、

第二に適當な合併條件を定めうるところ、

第三に合併後業績が相當よく、従來の取引先を尊重してくれるところ、

第四、行員は大體に於て引繼いで使用してくれるところ、

第五、交渉する上に個人的にも理解あるところ、

第六、株主もあの銀行なればと承認してくれさうなところ、

まあかうした標準からなげると、第一は各銀行の師匠銀行ともいはれ、加納さんも遊澤前頭取佐々木現頭取と氣心を知り合つてゐる、そこで第一を第一に選んだといふ事ですよ。」

白「さうすると直々の談判であつたやうだね？」

松「さうです、秘密の嚴守と、遺憾なく真相を傳へ、事件の進捗を早くするために……」

早「それで？」

松「なんでも三日目に第一の方からも談を進めようといふ返事があり、今年の一月の中頃通までに、いろいろ第一から注文した書類一切を提出する、一月二十六日から二月一日までに質問回答が片付く、二月のはじめに第一と東海でそれ、重役會が合併の決議をする、大藏省へ内認可の伺書を提出する、二十五日に内認可がある、三月十日に株主總會が終了、四月の十日頃でしたが正式の認可を申請する、四月の三十日に合併を實行、五月一日から第一銀行の支店となつて開業と、とん／＼拍子に片付きました。」

白「やれ／＼まあしかしよくすらく／＼と運びましたな。してその合併はどうでしたか？」

松「株の市價は五十圓券で第一は百八圓、東海は四十圓から一二圓、配當は第一が一割三分東海が八分、それで東海を五十圓として二株で第一の一株とし、重役はみなやめるが、行員は大體全部引つぎ、從來の取引先尊重といふ事で……」

白「それは結構！」

松「しかし合同の後になり合同の際決定した以外の缺損が出た時の、東海重役の補償といふ事では、その期間につき大分第一の註文と東海の重役會の間に意見の相違があつたさうでしたが、いろ／＼のいきさつを経てから、結局加納君も第一の重役となつて合併上の責任を持つこととなり、普通の補償責任期間が一二年であるのを、三ヶ月といふので難關も無事通過する、あとは八十萬圓の解散手當でしたが、内六十三萬圓は銀行員の解雇手當、残りの十七萬圓には所得税の未納とか新に隠れた缺損が出るとかで大分ごたつたやうでしたが、之もどうやら無事にすんだやうです。」

早「そこで松竹君、東海も第一に合併されてからは、第一から見るとお客が小さくて不良に見える、貸し流る、手形も割引を難んずるといふぢやないかな。」

松「ことに桐生足利邊からは大分金融が手づまるといふ苦情もあるさうですが、もと／＼東

海のと時から引しめておかねばならなかつところもあれば、又第一の方の規則になれぬため、大事をとりすぎる氣味もあつたでしょうが、預金の方を見ると、合併の爲め東海から看板をぬりかへた新第一の支店の取扱は、東海側では在來に比し二割減第一側では三割減と見込んでゐたのが、豫想が全く裏切られて合併當時に比し既に一千萬圓以上増加して、今では五千五百萬圓になつてゐるさうですから……」

白「そりや銀行の信用が高くなつたから不思議はない、いや詳しい説明を聞いて大體の様子も分つた、ありがたう、つまり君の話で教へられる事は、世の中は凡て人が第一といふ事ぢやね。」

早「といふと？」

白「さあ此合同のすらくといつたのは、佐々木加納兩君の人格の反映ぢや、一方は此人ならばと頼みにゆく、一方も此人の頼みならばと引きうける、貸借對照だの資産しらべだのと、書類は山程積んでも、中々一々調べたり又實地にあたるものでもない、御互に其人を信じあふ、それでなければ一足だつてこんな話は進められたものでない。」

松「なんでも佐々木頭取もそんな事をいつてゐたさうです、只加納君の人格と誠意に信頼し



たゞけだとね。」

白「そりやさうぢやらう、現に中井、渡邊、村井、左右田、中澤みな身代を仕上げた最初の人達が亡くなる、後をつぐ人の器量がそぐはない。大體英米のやうに凡て仕事は腕の人力の徳の人に譲つておかぬと、只資本家だといふので其人格材幹もかへり見ず、其子孫が虚器ならよいが、重器に當るといふ事は全く考へものだね。」

早「そこでその良臣はどうなります？」

白「松竹君東海には株主や預金者はどの位居たかね。」

松「さあ……私もよくは知りませんが、なんでも株主は三千五百四十人位で、預金者は五萬六千六百位でしたらうか？」

白「それで此人達は第一へ合同のお蔭で、全く今回のバニツクから助かつたのだ、もしかうしたバニツクがなかつたら、加納さんの良臣たる事は全く分らなかつたわけさ。」

松「その通りでした！」

白「加納さんは銀行の改善の爲には自分の地位もすて、かかつた、補償責任のため行きがかりで第一の平重役になつたまでだ、つまり東海の頭取の職をすててかかつた仕事だ、これが政

黨者流であつて見給へ、あの松島事件がよい手本だ、やれ詐欺だとか詐欺でないとか、眞赤になつて法廷でもみあうてゐるが、どの途何萬圓何十萬圓といふ大金がコミッションとか成功謝金とかなんとかいうて猫婆になるのだ、それを思ふと加納君の犠牲的精神と努力とに對しては大に認めねばならぬ。」

早「實際あのバニツクが無かつたら闇から闇といふ譯でもないだらうが、テンヂ問題にならなかつたわけですね。」

白「さうだとも此間信州松代藩の藩政改革をした恩田木工の傳を讀んだが、矢張り此人も良臣の方であまり手際よく改革が仕上げられたから却て名前が残つてない、あれで佞臣どもに暗殺でもされるといふやうな事になると、大變な忠臣に祭り上げられるのだがね。」

早「ところがバニツクになつてそのありがたみがあり／＼と眼に見えて分つたのだが、さて世間がどう見てゐるだらう？」

白「東海の重役株主行員預金者あたりからは、加納さんに定めしなにか感謝の意を表したでしょう？」

松「いや、ところがさうした事は無いやうですよ！」



優生運動

登場人物

會社員 道貝 稻知

隠居 長井 右京

道「御隠居さん、新年おめでたう。」

長「道貝さんはやばやとおめでたう、まあおあがり……」

道「へえ……」

長「わしが隠居ぐらしのところへ近頃は廻禮がないやうになる、そこへお婆さんが孫が生れて暮から船場へ出かけてる……」

早「それは又けしからないねー」
 白「いや／＼日本といふ國ではな、銀行が潰れると泣いたりわめいたりするがな、潰れるはずが助かつて、やれありがたいと感謝するなどは、却て失禮と心得てるのだからな。」
 早「つまり差出した事と遠慮してるので……」
 白「さあまさか遠慮してるといふわけでも無からう、皆腹の中ではあ、好かつたまあ好かつた、加納さんのおかけだ位の事は、一時や半時位は感じた事もあらうな。」
 早「まあ春秋の筆法では石井定七東海銀行を活かすといふ事になりますね。」
 白「感謝されやうがされまいが、無事にけりがついた加納君は重荷をおろして嘸ほつとしてるであらう、佐々木君もひと時ちがひで東海を救うてまあ好かつとおもうてるであらう、それでい、それでい、そこに良臣の値打があるのだから。」(二、十、二)



き聲は……。」

長「あれはお隣りの赤子や……矢つ張りこの暮に生れてね。」

道「なるほどこれでは人口問題とやら騒ぎ立て、るのも無理おまへんな。」

長「さうやな。」

道「ところがきのふ臺灣歸りの友達の話では、臺灣の生蕃はだんくへつてゆくいふてましたが。」

長「それはな、どの生蕃もみんなへつてゆくのではない、臺灣の東海岸に紅頭嶼とか火烧島とかいふ小さいく島がある、その島に



道「あの又孫さんが……。」

長「全く「あの又」だよ、二番目の倅の方が今度はたしか六人目や。」

道「わしのところでも暮に二番目が生れて、もう朝から晩迄きやあ／＼八釜しくてかなはんで通け出してきたのや。」

長「わしの方は獨り留守番で外へも出られず退屈してた、そんならまあおあがり。」

道「大きに……それではお邪魔してお茶なりお菓子なりよばれませわ……御隠居はんあの赤子の泣

かさのせり旅行
足跡は赤く落ちさる
とこなしで飛んだ風流



千人足らずとおもふがアミ族といふ蕃人がゐる、その蕃人がちりくくとへる一方やさうな。」
道「どうしてへりまんね？」
長「どうしてといふてまあ何より體質が弱い、生産率の少ない上に死亡率が多い、そこへ異人種の接觸でたんとやられるな。」
道「異人種の接觸？」
長「さう、その島へ今までに無かつた病気がは入つてくる、なにもベストやコレラやチブスやなうても、インフルエンザでも初めては入つてくると、大概はかゝる、

このカサ女房のよさしかりるで
女房の白髪を落つ
親切なもは合
ふしたならぬ
相合今也



この梅毒薬の廣告に転用を断る

そして八九分助からんな。」
道「どうしてだすやろ？」
長「つまりさうした病毒に初見参といふので、之に對する抵抗力がないのやな。日本でもコレラがはじめては入る、コレラといつてみなコロ／＼死んだな。そりや衛生や醫術も發達せなんだからやろが、初めの中は抵抗力が弱かつたな。」
道「あ、さよか。」
長「お前さんアイヌを御覽なさい、同じ事やがな。」
道「あ、ちがひない。」

生で優生運動も
産見制限一ツ目を見てる



長「外国でも十九世紀のはじめに英吉利人がタスマニアに上陸した時は、何千人といふ住人がゐたが、半世紀た、んうちに結核とアルコールのために只の四十四人になり、千八百七十六年にとつて最後のタスマニア人の一人が姿を消したさうな。」

道「なるほどな。」

長「コロンプスが千四百九十二年の十月に新大陸グアナハーニ島に上陸してからも、赤色人種は見る見る白人種の病原菌で斃されたな。なんでもそれから三世紀ばかり

り立つて「一千二百萬人の赤色人種の半を斃したものは實に痘瘡であつた」というてあるな。」

道「コロンプスはえらいおみやを持つていつたもんだすな。」

長「その代り又えらいおみやをもらうてかへつたな。このおみやたるやとても痘瘡どころの騒ぎでないな。」

道「なんだんね？」

長「煙草と梅毒……かさやな。」

道「あ、その時のおみやですか？」

長「さうや、梅毒は印度疥癬とも印度麻疹とも呼ばれてゐたが、原名アパスといふてそれが歐洲へくるとガリシヤ病と改名披露をしたな。」

道「ガリシヤ病？」

長「西班牙へかへるときコロンプスの船でビンタ丸といふのが、親船ニーナ船を見失うて一夜ガリシヤのバヨーナといふ小さい港についた。長の船路から久し振に故國の春に酔ふた船員たちは、上陸すると新大陸のアパスの病原菌の生々しいのをまきちらす、見る／＼病原は抵抗力の弱い白人種の間にはひろがるは／＼、三年経たぬ内に西班牙の宮廷に入る、歐洲全體に蔓延し

て、今度はバスコ・ダ・ガマの船が喜望峯を迂廻して印度のカルカッタにわたる、コロンブスの新大陸発見後、五年た、ぬうちに梅毒は東洋にまで侵入する。あれから五年た、ぬうち明の孝宗の末年に支那へ、それから又永正の九年といふから十年足らずで、唐瘡^{とうがさ}又琉球瘡の名で、とうとう日本へまで手がのびたな。」

道「えらいことだすな。」

長「それから長い月日の間に、世界中の人間の梅毒に對する抵抗力が次第にたかうなつてきて、手廣くはひろがつてきたが、病毒はだん／＼まあ下火^{したび}になつてきてるな。」

道「あ、それですか、異人の梅毒はともひどいといふのは……」

長「さうぢや、あれは御互ぢや、御互にすこし種變りの病毒に出くわすと珍重しられるのやな。」

道「いやさういへばうちの會社の男はな、佛蘭西土産に引つか、つたのやさうなが、六百六號をなんぼ注射してもとんときかない、こんな頑固なひどいのは珍らしいといふてな……」

長「さあそこでかさ、持の先生がまた不謹慎にそのかさ、を女房にうつす、商賣人にうつす、それからそれとうつされるからとてもやり切れんな。」

道「ありや遺傳するさうだすな。」

長「妊娠中にうつるな。淋疾は妊娠力を滅じ、梅毒は更に進んで胎子を殺すな。外國でも梅毒の母から生れた子供の六割は死産か、生後間もなく死すべき運命を持つてるといはれてる。又遺傳で先天的に胎兒のとき梅毒にか、つてる子は、七人中一人しか生き残らないといはれてるが、日本でも専門家のしらべでは累年死産者十萬人中五萬乃至六萬人は梅毒がもとになつてると報告してゐるな。」

道「そりやかなひまへんな、聞いてもぞつとするな。」

長「そのくせのと元すぐれば暑さ忘れるで、お互に病毒傳播に日夜努力してる、まあ日本は死産の多いので評判とつてる國やから、死産者の多いのは仕方がないとして、死産者が多い位だから今度は生き残つた連中の健康も感心しないな。」

道「あきまへんか。」

長「そりあいかんとも、幼兒から青年へかけての死亡率は歐米の約三倍に上るさうやからびつくりするな。」

道「へえ……まだ一人前にならん内に……」

長「さうやがな、そして家庭や學校で無駄骨をかける、先立たれる親の身になつても、先立つ本人の身になつてもたまらさかいな。」

道「ほんまだんな。」

長「その位やから日本人の平均壽命が、歐米人よりうんと短い、それでもこんな事には政府とやらも政黨とやらもまあ國民あけてのほ、んでゐるな。」

道「そりや困りまんな。」

長「そりや困る、このまゝにほつとくと、段々體質が下がつてくる、つまりは臺灣の蕃人ぢやないが、人口もへつてくる、そやから人種改良、又は優生運動といふのが外國でも盛んになつてる、日本でも一部の人は八釜しくいふてるが、何分世間では優生運動も産兒制限もチャンポンにしられてる位やさかいヒーカンするといふてるな。」

道「あ、ちがひまつか？」

長「ちがふ、お前さん達の理解のないのは無理もないが。」

道「へえ大きに……。」

長「おかみでも此邊の區別が分らんらしい。」

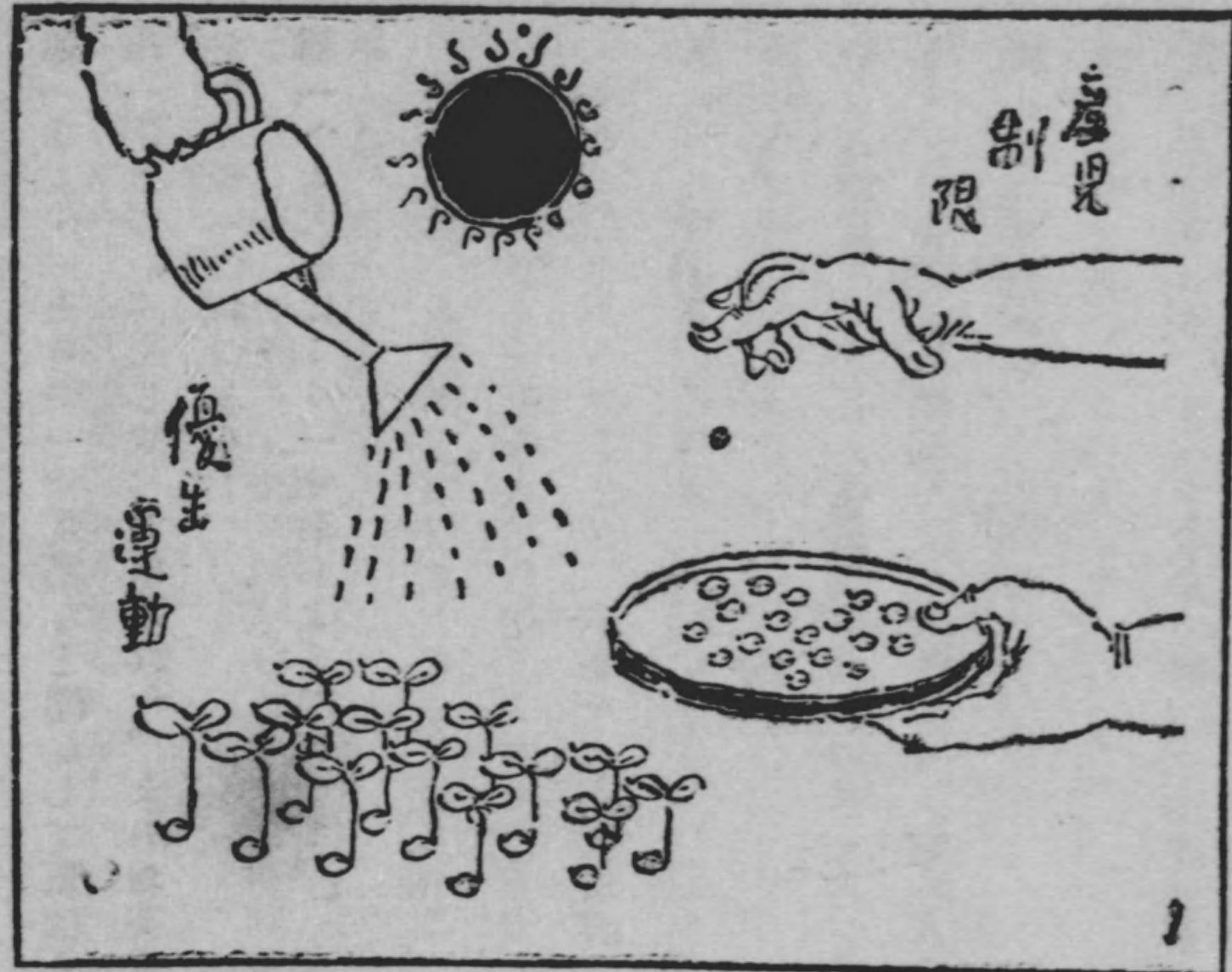
道「さよか、そりや一寸荒筋なと聞かして貰はんと……。」

長「さあだいぶんしやべり草臥れた、まあお茶でも一つ入れよう、こりや貰ひもんやが高岡のおまんや一つおつまみ……。」

道「へえ大きに……一寸おちようづへ……。」(二二二、二八)



動といふと人間の體質を改良することや。
 道「そんな事なら別に文句ないやおまへんか。」
 長「いやさうもいへんな、人種改良で数をへらすといふのも、つまりは粗製濫造はようない、一時は数をへらしてよいものをつくらうといふことになるのや。」
 道「そんなら矢張りおんなじやおまへんか。」
 長「いやちがふな、産兒制限はたとひえ、種でもたとと生んではならんといふことやし、優生運動



氣狂ひとかつ
 たい
 登場人物
 社員 道貝 稻知
 隠居 長井 右京
 道「や、おほけに失禮、いまのつゞきを聞かしておくれやす、その優生運動といふのと産兒制限とのちがひを。」
 長「さあ一口にいへば産兒制限といふと子供をあまりたんと生まぬやうに数をへらすこと、優生運



3

は悪い種なら一人でも生んだらいいかん、が、え、種なら何人生んでもよろしいといふ譯や。」

道「あ、成程違ひまん、あとの方がよけい理窟だんな。」

長「ところで種がようて制限せんならん事がある。」

道「そらまたどうして？」

長「そらなあ、よくお産になると病気になる女があるやらう。尤もさうした母親に宿つた子は大きいひ弱いやろけれど、中には赤子は丈夫でも肝心の母親が成佛することがあるやないか。」



4

道「なる程、さういふと僕の友達の中にもそんなんがおます。なんでも妻君は腎臓病かなんかで妊娠すると體がわるなる、そこでお醫師はんからも注意をうけてたんやさうな、ところがいつのまにか妊娠した。さあ亭主も女房も心配でな、氣をもんでるうちにいよいよお産になる。子はでけたが、そんなわけやさかいてんとひ弱い。」

長「そしてその妻君は？」

道「どうと寝付いたが、まあようくの事で命だけはたすかりました。」



子宝一家

6



5

長「それはまあ……。」

道「ところが今度こそはと醫師から矢張り注意をうけてるさうやのに、ゑんまんとまたはらんでな。」

長「どうした事や、どだい無分別極まる話やないか。」

道「いや其男はそこはちやんと心得て、いつも其方の用意はしてゐたんやさうやけれど、まあなんしはらんでしもうたんや、そして今度はとうとう母親の命をとられた。」

長「やれ〜。」

道「あとには子供が七つに五つに二つといふのやさかい、そら往生してる。」

長「さうやらう、子は生れても母が死んでは差引元々や、あとの子供が可愛想や。さういふ例を見たら何ぼ産兒制限や優生運動に反對な人達でも文句はないはずやないか。」

道「さうだす、そら誰一人文句あらしまへんな。」

長「ところで悪質者となるとどうやろ？」

道「といふと？」

長「まあ精神病とか、癲病とか。」

道「いやそれも文句はないな。」

長「制限しても文句はないといふのかな。」

道「そりやさうだんがな。」

長「ところでたい文句なしといふだけではすまんのや。」

道「そりや又どないしてたんね？」

長「現在外國ではだん／＼そんな病人のあとが絶えて來たのに日本では中々へらんやないか。」

道「どうしてだつしやろ？」

長「君の友達など氣がついてゐながら、みす／＼自分の妻君を亡くしてまで子を生んでる位やさかい、生まんやう生まんやう用心して、も生れたがるわけや。まして世間からのけもんにされて、天刑病なんていはれる病人に、なんでそんな分別があるもんかいな。第一氣狂ひはそんな注意もくそもあらへんやろ。」

道「てんとその通りだす。」

長「そこで？」

道「そこで？」

長「外國では法律でのつけから子を生まさんやうにしてるとこさへある。」

道「さよか。」

長「これが優生運動者などの矢蓋しくいふ問題や。」

道「わてかて異議はないが、當人達には同情しまんな。」

長「子ができんといふてかいな？」

道「そりや子が生まれただけなら却つて仕合せやけど。」

長「なんでや？」

道「どだい、楽しみがなうなるやおまへんか？」

長「どうして？」

道「そらあんだ、去勢されてしもてはな。」

長「ちよつと／＼そらお前さんは、去勢と避妊とごつちやにしてる。」

道「は、ん、ちがひまつか。」

長「そらちがふな、去勢すると男女の性慾は無くなる、ここでいふのは去勢やない。性慾は性慾で自由に満足さしてよろしい、が子供だけは生まれやうにするのや。」

道「そんな器用なことできまつか。」

長「でけるな、男子なら Vasectomy といふて、輸精管を切断する、女子なら Oöphorotomy といつて、輸卵管を切断する。しかもそいつが至つて手軽に出来るのやから妙やな。」

道「おつさん、いろんな事知つてまん、そりやとても痛うおまつしやろな？」

長「ちつともいとないな。」

道「さうすると？」

長「人間の精液一滴の中には約三百万の精蟲がある、そりやつて射精の時には約八億に上るさうや。其中からやつとの事であつたの、一疋が女子の卵から受精せられ、それかていつも受精とはきまらん位やさかい、その精蟲や卵の通り道をストップされては金輪際孕まんわけやないか。」

道「あ、さうだつつか!!」

長「そりやつて、精神病院や癲病院などではこんな手術をしてやつておいて、あとは氣の毒な業病にかつた同志が好いたやうになぐさめあへるやうにしてやりたいな。」

道「おつさん、そりやどうしたといふのや。」

長「そらな、わしが二三年前、讃州高松から小船をいそがせ小豆島へとしやれたときに、大島といふ松の茂つた景色のえ、島がある。聞くと癲病患者を收容してある島やさうな。」

道「へえ——」

長「ところで、その島からにけ出して何里といふ海上を陸へむけて泳いだ患者があつたといふ話や。」

道「なんでまた？」

長「そら、ホームシックや、さむしなるのや、男も女も隔離されて離れ島で浪の音ばかり聞かされてゐてはな。」

道「なるほど可愛想にな。」

長「みながみなともいくまいが、せめてそんな島の中で好いた同志は添はしてやりたいもんじゃないか。」

道「さうだすとも。」

長「ところが、それも融通のきかんお上のおきてかして、第一その手軽い手術さへ出来んと

きてる。」

道「なんでや？」

長「日本の刑法ではちゃんと傷害罪といふ規則がある。」

道「やれ〜。」

長「さあ、そやよつて法律の力でせめてさうした悪質者の種だけなりと絶やしたいもんならいか。」

道「全く同感ですな、しかし氣狂やかつたいの外にも問題はおまへんか？」

長「そりや結核とか、アルコール中毒とか、梅毒とか、いろいろあるが、常習犯者といふことが問題になつてゐるな。」

道「監獄通ひの連中だつたか？」

長「さうや、妊娠中も生れてからも、そんな家庭に育つた子供はよからうはずはない、そこへ世の中へ出ると世間がのけものにする、本人がひがむ。」

道「そりやさうです。」

長「その上今度は遺傳といふやつぢや、よく世間で例に出されるのが、マルチン・カリカック

一家、近頃例に出るのがイシュメール一家などとな。」

道「何だんね、其カリコミとか、イジメルとかいふのは？」

長「待つて、わしもほんの聞き覚えやさかい、一寸種本とつてくるわ。」

道「あ、さよか、そんなら又一寸おちようづへ……」

天 刑 病

上、モロカイ島とダミエン師

ホノル、をあとにして船は右舷にモロカイ島を望む、モロカイ島は癩病の隔離所として古くより知られてゐる。

癩病は土語にてマイハク乃ち支那人病と言つて居る、千八百四十五年頃初めて布哇に輸入せられ、爾來猛烈な勢で傳播するので、千八百六十六年モロカイ島に隔離所を設けられた。患者数は死亡と新入と差引いて近年猶常に千人を越えて居る。人口二十五萬人の布哇として決して少ない方ではない。しかしモロカイ島の名は只古い癩病の隔離所といふよりも、天刑病の父となり母となり友となり、終に自ら其惡疾に斃れた、教父ダミエン師によりて知られて居る。

ダミエン師は白耳義ルーバン市の人で、千八百六十四年布哇に渡來した。千八百七十三年モロカイ島の向ひのマウイ島で舊教僧侶の會合の席上に、或僧正が「我はモロカイ島の憐れな患者が牧者なき羊の如きを思うて深く痛む」と云うた時、彼は「主よ我は僧服を被せられた折か

ら、殉教は新生命の初めなりと考へてゐました。今モロカイの癩病人の間に、我は生きながら葬られん覺悟をした」と答へ、モロカイ島に渡り父子夫婦の間を生きながらもきはなされて、再び歸り能はぬ患者の群の中に其身を投じた。

モロカイの隔離所は今日こそあらゆる設備が整うて居るが、當時のダミエン師は、ラハラ樹の下に露宿し晝はお説教をする、大工左官の仕事を教へる、只一人の醫師として患者の傷口を洗ふ繻帯をする、臨終の床に儀式を行ふ、師自ら死者の爲めに造りし棺の数は實に千五百を超ゆるに至つたと傳へられてゐる。

此牧師説教者醫師葬具師兼建築家たりしダミエン師は、十有六年間の犠牲的奮闘の後、遂に惡疾に感染して千八百八十九年四月十五日天國に上つて仕舞うた。爾來殉教者相次ぎ現にブラザーダットン師の如き、既に又三十年の長き、足未だ一步も隔離所の外に出でぬとの事である。なんと尊い難有い事ではあるまいか。

中、デーモン博士とチヨルムーグラ

天刑病にはダミエン師の心的療法に對して、物的の特效薬が又布哇大學總長アーサー・エル

デー博士とカリヒ癩病患者收容所主任ジェー・ア・マクドナルド氏の共同発見によりて紹介せられた。實驗の結果成績頗る顯著にしてカリヒ收容所の患者中、全治して解放せられし者既に三十名に及んでゐるといふ。此の薬は古くより癩病に特效ありとして傳へられしチオルムーグ
ラ Chaulmogra といふ漢名大楓子とか言ふとの事である。東印度地方に産する樹木の果實に含む油から特製せられるので、目下歐米各國又我邦よりも研究の爲め専門家が布哇に見學に來てゐるさうである。是れ又誠に天來の一大福音であつて、天刑病と名けられ不治といはれた悪疾が根治せられ得るといふ事になるのである。

癩病の桿狀細菌は肺結核のそれと同じく、色素に感染せざる同一種屬のバチルスなるが故に癩病に特效あるチオルムーグ油の脂肪液は、又肺結核にも特效あるべしとて、マクドナルド氏は目下専ら其實驗中と聞いてゐる、之は加州大學のウォーカー氏スウィニー氏等も既に實驗を重ねて居るとの事であるが、若し肺結核にも特效ありとせば誠に醫界に於ける一大驚異であつて、世界億兆の人類は擧げて長へに其惠澤に潤ふ事となるであらう。

下、全生病院と光田健輔君

「あの築山はどうしたのです？」

「あれは患者達が築き上げたのです。」

「患者達が築き上げた？」

「さうです、たゞ娑婆を見たいといふ一念で築き上げた築山です。」

ところは近頃東京水道の貯水池村山の池で名高くなつたあの東村山の全生病院、全生病院で分らなければ癩病院での話である。

「なに村山に癩病院！ おい水源地に癩病院なんて無茶するな。」

と癩患者には同情しないが御自身には大に同情されるお小言がありさうだが、なにも癩病院を貯水池の岸に立て、その糞便を池へ流し込んでゐるのではないから御安心あつて然るべしである。

娑婆を見たい！ 一度入院すれば再び世の中は見られぬと絶望してゐる患者達が、せめて一目なりと娑婆が見たいと築山をつき上げた。あの瀬戸内海の大島といふ癩病院から抜手を切つて泳ぎ出たといふ話も思ひやられて、さりとては痛はしい事ではないか？

病院の櫻井醫師の話によると、癩患者は結核に對する抵抗力がないため半数以上結核で斃れ

る。癩患者の子供は結核と同じく春期發情期に發病する。傳染病と決つてはるるが體の素質と傳染の機會が多いためであらう、三割は遺傳的に發病するといふ話である。

現在の患者は東京府外十一縣で七百七十四人それで有名な光田院長が全快とあつて責任を以て社會に送り出したのが、明治四十二年創設以來唯の二人!! この二人が社會に出た事はどれだけ病院に新生の空氣をなけた事であらう。しかし全責任を以て全治を保證しても世間は刑務所を出た者よりもむごたらしく扱ふ。折角世の中に出ても生活ができぬ、いや人交はりができぬ、も少し世間の人達から理解ある同情があるべきだとかこたれてる。

全生病院の記は雜誌「雄辯」の松原富士子さんの記事によつたものであるが、この病院の院主光田健輔君は大正の十一年十月日本に渡來したデー博士と同じく、大楓子を使用して別種の療法により効果をあげてゐる、福岡市の癩治療に有名な竹内勅氏も大正のはじめ頃から試みる療法は、大楓子とはちがふさうだが相當に効果ありとの事で矢張りデー博士と意見の交換をしたらしい。いづれにしても考へさせられる事は癩病も今日では其初期であつて斑紋ができた局部的にチク／＼といったむ又無感覺になつた時など祕密一點張にせず早く専門の治療をうけると全快もしやすい病毒の蔓延を喰ひとめる事もできるといふことである。

光田君が此府縣立病院を開いた時は村民の反對はいふまでもなく、患者も一人も來ない、たまたま浮浪の患者を收容すれば、賭博をうつ女に暴行する、今日でこそ院長の靈と肉との洗禮と科學の力と相まちて、院長は神様のやうにあげられてゐるがそれまでの苦勞は並大抵な事ではなかつたらしい。

一體癩病について筆をとるとせば何よりも熊本のリデル嬢に言及せねばならぬが、御手許に資料が揃はないので、只全生病院の神佛とあがめられてる光田君のもとでは子供が生れぬやうになつてるといふ事と、世間が生めよ殖えよというても、かうした患者には全く理解乏しく同情して居らぬといふ事と、癩病患者では日本は世界第二といふ光榮を荷うてるといふ事をかき添へておしまひにする。

國名	患者數	人口萬人に付
支那	一、〇〇〇、〇〇〇	二五・〇
日本	一〇二、五八五	一九・〇
英印度	一〇二、五一三	三・二
印度支那	一五、〇〇〇	六・七

埃及	六、六一三	五・八
比律賓	五、二二三	六・九
瓜哇	四、四四三	一・六
キューバ	一、五〇〇	七・三
亞爾然丁	一、〇〇〇	一・二

歐米の文明國らしい文明國には癩病はあとを絶つた、亞爾然丁にわづか千人ばかりあるだけだ。もし世界から癩患者の見本をなくしてはいけなないと心配してゐるなら支那なり南洋や亞弗利加にはまだいくらもある。患者の數といひ人口に對する比率といひ、この表を見給へ、一等國民と自稱する人達も少しは耻を知つてくれないとこまる。(昭三、三月號經濟往來)

續 天 刑 病

一、ドルワールド・レゼー

經濟往來三月號の天刑病の記事感心して拜見しました、同療養所の中に熊本のリデル嬢あるは勿論ですが、猶一つ有名な外國人ある事がしるされてありません、それは東海道御殿場驛の近くにある神山の復生病院であります、天主教の經營で院長のドルワールド・レゼー司教は、齡既に九十歳を越え日本に渡來してから既に六十餘年になります、レゼー師の驚嘆すべき努力は只敬服の外ありません、詳しい事はその筋でおしらべ下さい、誠に偉い坊さんです。

前號の天刑病の記事につきいろいろ通信をうけました、レゼー師の事は聞いてはるましたが精しい事は承知しません、その内又筆にする事があるかも知れない、只こゝに無名士の通信を謝し、それを縁に今一回天刑病を草して見る。

二、ハイドノカーバス

癩病の特効薬として村山全生病院の光田健輔氏も、布哇カリヒの癩病患者收容所主任ジェー

・ア・マクドナルド氏も、チヨルムーグラ漢名大楓子の油から得た特效薬を用ひてゐる事は前にも述べておいたが、本月の倫敦特電では英國癩病救済協會名譽會長サー・レオナルド・ロツジャース博士は、過去十年にわたりハイドノカーバス樹油によるあらゆる研究の結果完全なる療法を發見し、初期の患者は根本的に全治し病勢の進んだものも三割は全治することを得べく、全英領に該薬品を配付すると同時に、處在ハイドノカーバス樹を植付ける事にする旨を發表したといふ。

現在の大楓子油に似たものとおもふが、其效能が公表の如しとすれば、該患者の多い我國では正に天來の福音である。

三、癩療養所反對

三月一日付であつた、大阪のある新聞に、

泉北郡の町村長殆ど全部政友會へ癩療養所設置に關する内相の取なしに感じてといふ見出しで次の如く記されてあつた。

大阪府泉北郡における二府十縣癩療養所設置問題の再燃に就ては種々取沙汰されてゐる

が、三十一日同郡右癩療養所撤回期成同盟會で郡内町村長から成る實行委員會を開いた結果、上神谷村長奥野郁氏(ほか缺席の三村長の向背は不明)を除き三十ヶ町村長が政友會へ入黨することとなり、三日開會の町村長會に入黨届けを持寄ることになつた。右の入黨は同癩療養所を設置しないと云ふ默契のもとに行はれるものと觀測されてをり、従つて町村會議員その他有力者もことごとく入黨するらしい形勢にある。右について富岡次郎氏は語る。

「私等は鈴木内相に面會陳情したところその回答が非常に懇切を極めたのでその意氣に感じ期せずして入黨したわけで、つまり政友會を信頼し總てを委せた意思表示の結果にほかならないのです」

なほ従來同郡は民政黨中林友信氏の地盤であつただけに選挙に及ぼす影響については相當注目されてゐる。

第一に事實の眞偽も保證の限りでなく、又かりにさうした事があつたにしても、何れの内閣のときにもさして珍らしい事でもなし、進んで利慾に囚はれる輩に比らべたなら、癩療養所を設置してくれるなといふだけに、或程度までうなづかされるふしが無いでも無い。

たゞ此の記事を見て感ぜられた事は、東京の府下に村山の癩療養所もある如く、大阪府下にも

近畿方面の患者のため否社會のためさうした設備がなくてかなはず、又さうした患者に對しては特に世間から同情あるべきものでありながら、さて自分達の近廻りに來られては困る、來ないためには町村長があけて或る黨へ入黨も辭しないといふ心持にも、又同情されぬ事はない。そこで地を換へてさうした患者及びその血族の立場になつて見ても、又廣く社會から見てもさうした患者の絶滅が何よりである、之れにはくりかへしていふ。

現在患者の隔離療養といふ事である。

將來の爲癩患者の生殖禁止である。

四、喜捨すらも

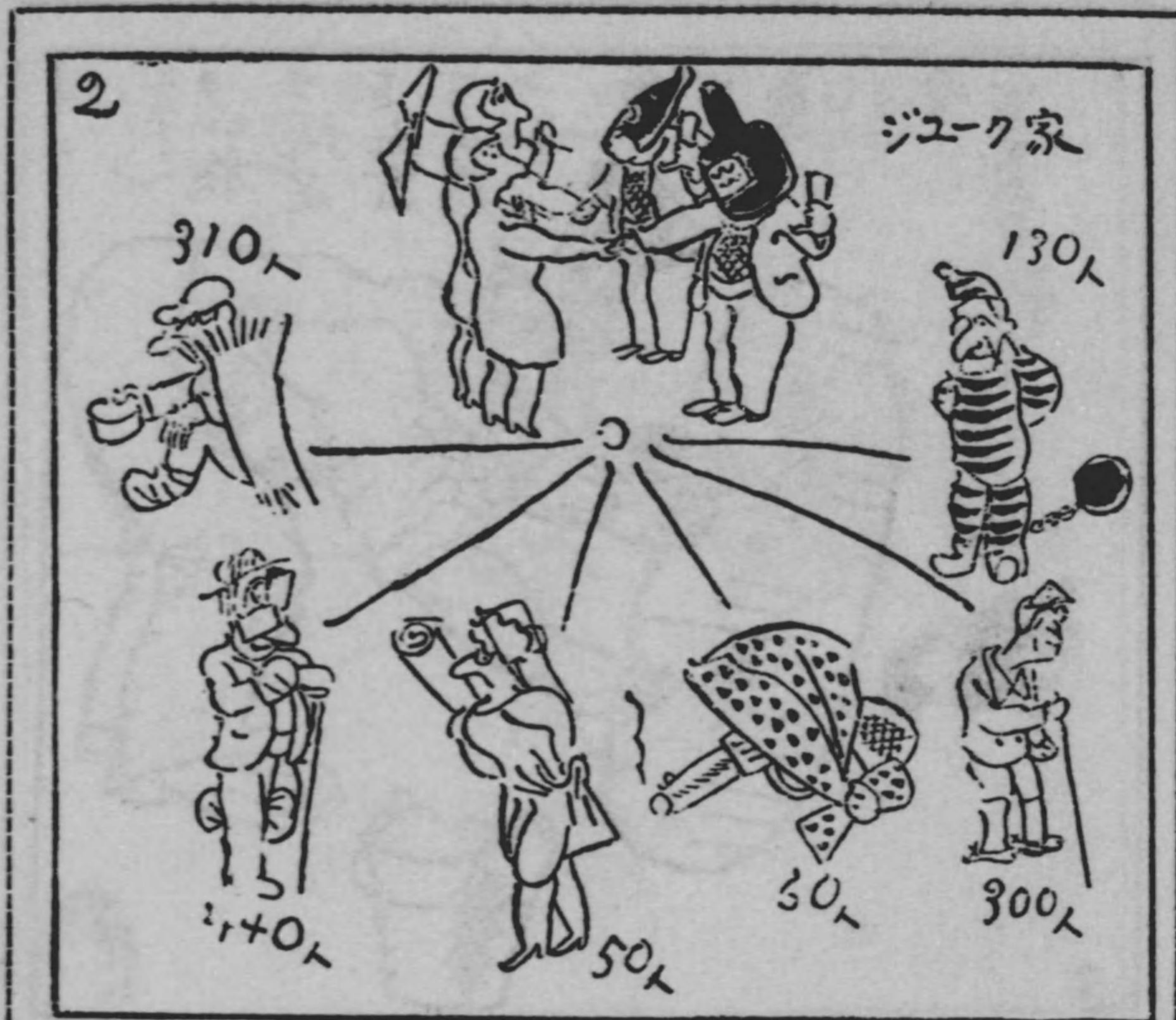
無名士の通信と泉北郡の反對運動から連想される事は、癩病院に慈善寄附の少ない事である。大正十三年春總選舉に當り護憲擁護の爲め推薦に應援に東西に馳けめぐつた。高原、米田の二君と九州の地に入つたのは四月の下旬であつたが、旅中の寸暇をぬすんでは「九州の旅」なる即興記事を筆にし朝日紙の九州版に連載した。それは「新聞に入りて」の舊著に収録されてあるが、その中に、リデル嬢の尊い癩病救濟事業を主として天女と題した一章をものしてある。

ところが恰かも僕等一行のあとに熊本に開催せられたる日本新聞協會一行の日本電報通信の能島進君と途上で一處になる、リデル嬢の事業が話題となる、それがもとになつて新聞協會は回春院と待勞院へながしか寄附すること、なつた。

それから後の話であるが能島君の話にどうも癩病院へは慈善喜捨がまことに乏しいとの事だといふ、それは團體名はしばらく別として個人名で喜捨すると、なんだかその家族か親族中に癩病の血でも引いてるかのかの如き誤解を招くからだといふ。

なんといふ情ない事であらう！ それ位いやがるものなれば、そのいやがられる身にもなつて見やう、我々はその罪は憎んでもその人は憎まないやうに心がけたい。ましてやその人の罪でもなんでもない、不幸な名も天刑病といふみじめなくちをひいた人に心から同情しやう。さうした病毒を日本からきれいに驅逐しやう。

猶此序につけ加へて置く。上掲の御殿場の復生病院熊本の回春待勞の二院の外、東京に慰癩院、草津に聖バルナバ病院、身延山に深敬院があり、之に五管區の療養所を加へて今收容患者約二千五百名、之に對して患者の實数は約三萬人に上るといふ。なんとしてもこの病毒は日本から絶ちたいものである。(昭三、五、經濟往來)

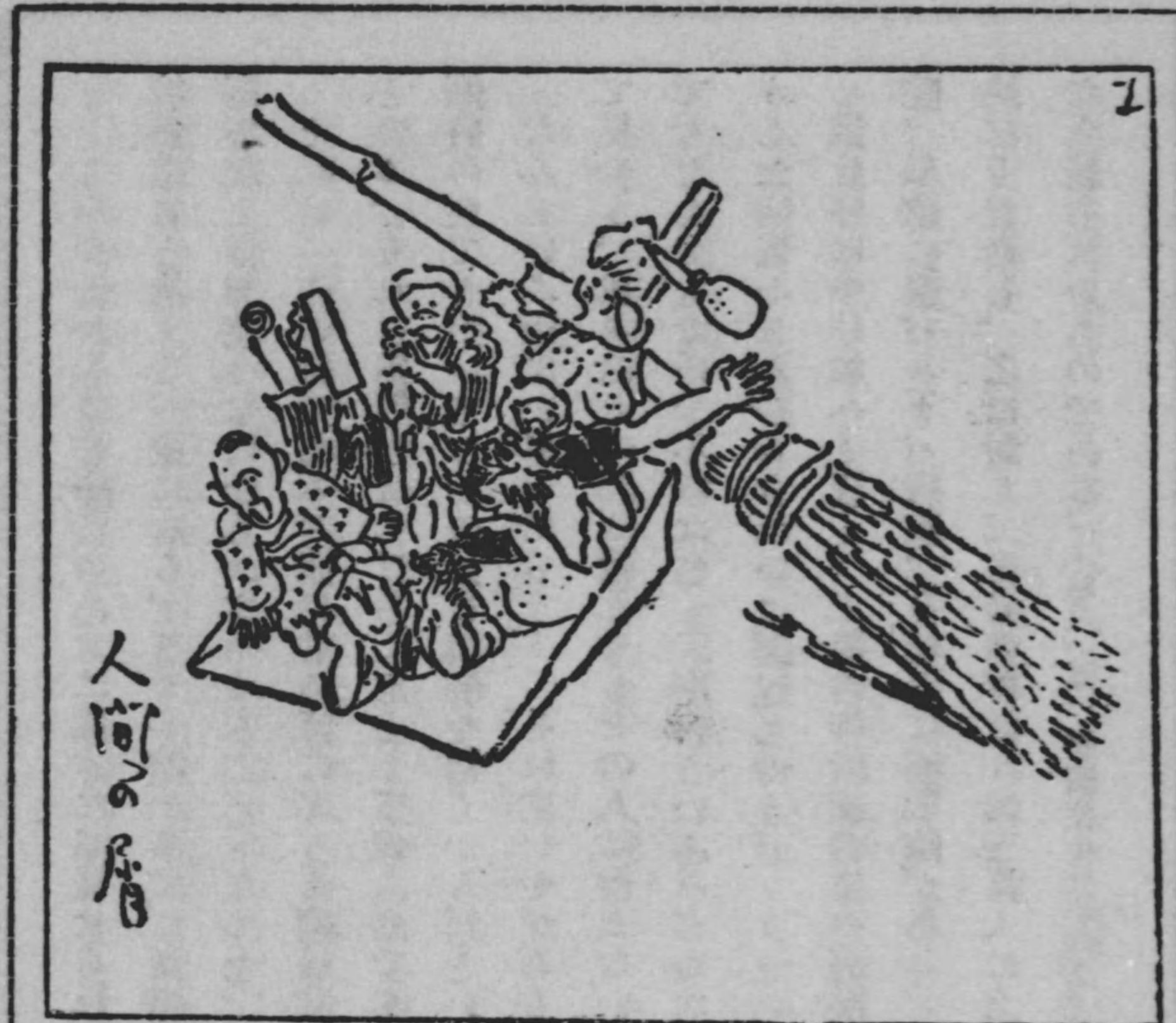


ますな。」

右「悴がおいてあるもんやさかい、それ、かう書いたある。マルチン・カリカック家で低能な娘の子孫四百八十人の中から百四十三人の白痴が生まれ、あとは悖徳者か不品行者ばかりで、満足なのは四十六人ほか無かつたとな。」

道「争はれんもんですな。」

右「まだあるで、ジュークといふ家では酒飲みで低能で怠け者の兄弟が、不良少女の姉妹と結婚したら、六代の間に千二百人ひり出した。」



ジュークとエドワード

登場人物

会社員	道貝	稲知
隠居	長井	右京
右京息醫師	長井	宣

道「や、おほけに失禮、いまの續きそれカリコミとかイヂメルとかいふのを聞かしておくれやす。」

右「よろしい、いま種本をさがしてるとこや。」

道「よう、いろんな本を持つて



道「やれ〜……」
 右「まだ〜ある……それお前のイヂメルというたイシュメールの一族やな。近頃カーネギー財團で調らべたんやさうなが、數十年前オールド・ヴァージニア州に始めて土着した怠け者で、ごろつきで通つてゐたイシュメール夫婦は、彼等一族のために手を焼いたりお話をしたりした裁判官や警察官や、醫師や實業家などの一族よりも、うんと澤山繁殖して、今では一萬二千人に達してゐるさうや。」
 道「おつさん悪い家柄もある位



道「途方もない生んだもんだすな。」
 右「どうも上等な階級の出産はへる一方やが、ゑんまんとかうした連中と來たら、めつた矢たらに生みつけるもんでな。」
 道「それから？」
 右「その千二百人の中で三百十人は世間の厄介になつてゐる貧乏人、四百四十人は極道で五體をこはして仕舞ふ、五十人は醜業婦、百三十人が罪人、外に六十人が泥棒で七人が人殺し、餘りはどうかといふと三百人は天死とあるな。」



米国の猪々退治

なら、え、方の家柄もおますやろな。」

右「そらある、よう例に出るのがジョナサン・エドワードといふ家や。その子孫千三百九十四人の中から大学の総長が十三人、大学の先生が六十五人、醫師が六十六人、宗教家が百人、陸海軍の將校が七十五人、文學者が六十人、辯護士が百三十人、公職についた者が八十六人、上院議員が三人、副大統領が一人といふ素的なレコードを出してゐる。」

道「大したもんだすな、まあい

うて見たら日本で大學の箕作さんとか、順天堂の佐藤先生とかいふとくだすな。」

右「その通りく、しかしえらい人は中々さう澤山はでて來んが、悪い方と來たらわけなしにどんく殖える、おまけにその損害も並大抵な事やない。」

道「といふと……」

右「一寸又受賣さして貰ふが、獨逸である一家は八百三十四人の子孫を生んだ。何れもからは丈夫やが、あたまの方がまたいときてる。其うち半分以上は醜業婦、乞食、飲んだくれ、罪人であつたから、獨逸の政府は此連中の爲に一億二千五百マルクの大金を費した事になつてゐるさうな。」

道「そらまた、どえらい事だすな。」

右「さつきのジュークの一族かてさうやがな、紐育州で此一族の爲に監獄や養育院で使つた金が百二十五萬弗に上つてると書いてある。」

道「へえ、なるほど。」

右「話が少々古いが一千九百年北米合衆國で第二回の國勢調査をやつたんやが、その時精神狀態の無能力者は監獄に居る者六十二萬人、監獄外にある者が約二百萬人、これに似たり寄つ

たりが約七百万人、こんな手合に費した経費は二億萬圓に上つたといふ話や。」

道「大變な金やな。」

右「それも只監獄や養育院や氣狂病院で使つたお金だけや。かうした連中のために殺されたりけがされたり盗まれたりした、精神上なり物質上の損害は計る事も出けんぐらるや。」

道「そら、さうなりまん。」

右「まあ早い話が立派な甲斐性のある男かて、一生汗水垂らして中々十萬の金はでけへん。」
道「どういたしまして一萬の金かてな。」

右「ところが薄野呂の子守娘がおかみさんに叱られた、口惜しいというて火をつける。」
道「ようあるやつや。」

右「たつた一晚で何十軒と類焼して、何十萬といふ損害、おまけに人の命さへとられる事がある。」

道「おほけに。」

右「なんぼ生めよ殖やせというたかて、五人殺しをするやうな人間一人生まれたら、その男は勿論死刑、つまり一人殖えても六人へつてる勘定やろ。」

道「ちがひおまへん、さういふ連中こそどしく例の手術をしてやるに限りまん。」
右「さうとも。」

道「外國では勿論やつてるんでつしやろな。」

右「大分やつてるさうなが、その方は一寸今、種本が分らんので……」

宣「おとつつまん新年は……や道貝君かお目出たう。」

道「やお目出たう……近頃商買は大繁昌やさうやな。」

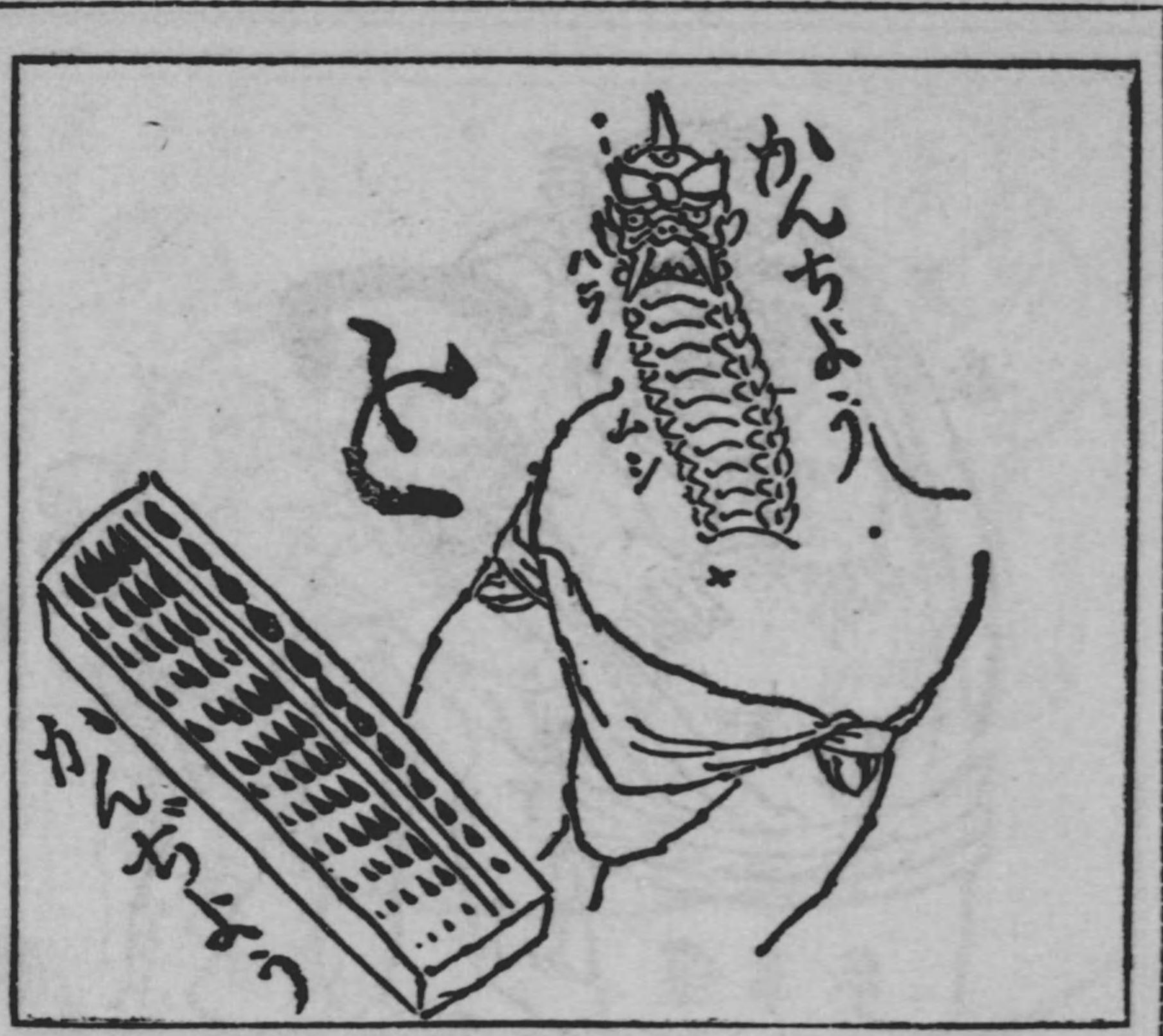
宣「いやあかん、なんし醫者仲間が無茶に殖えるさかい。」

右「いまな、稲やんにお前の優生運動の受賣り最中や。」

宣「新年早々えらい勉強で……」

右「ところであの犯罪者に子の出来ぬやう手術する國はどこやつたいな。」

宣「それだつたか、アメリカでは現在では二十二州までやつてるし、スラリライゼーションといふ殺菌法が流行してインディアナ州ではもう六百人以上の常習犯罪者に、キャリホルニヤ州では四千五百人以上にもやつたさうだす。」



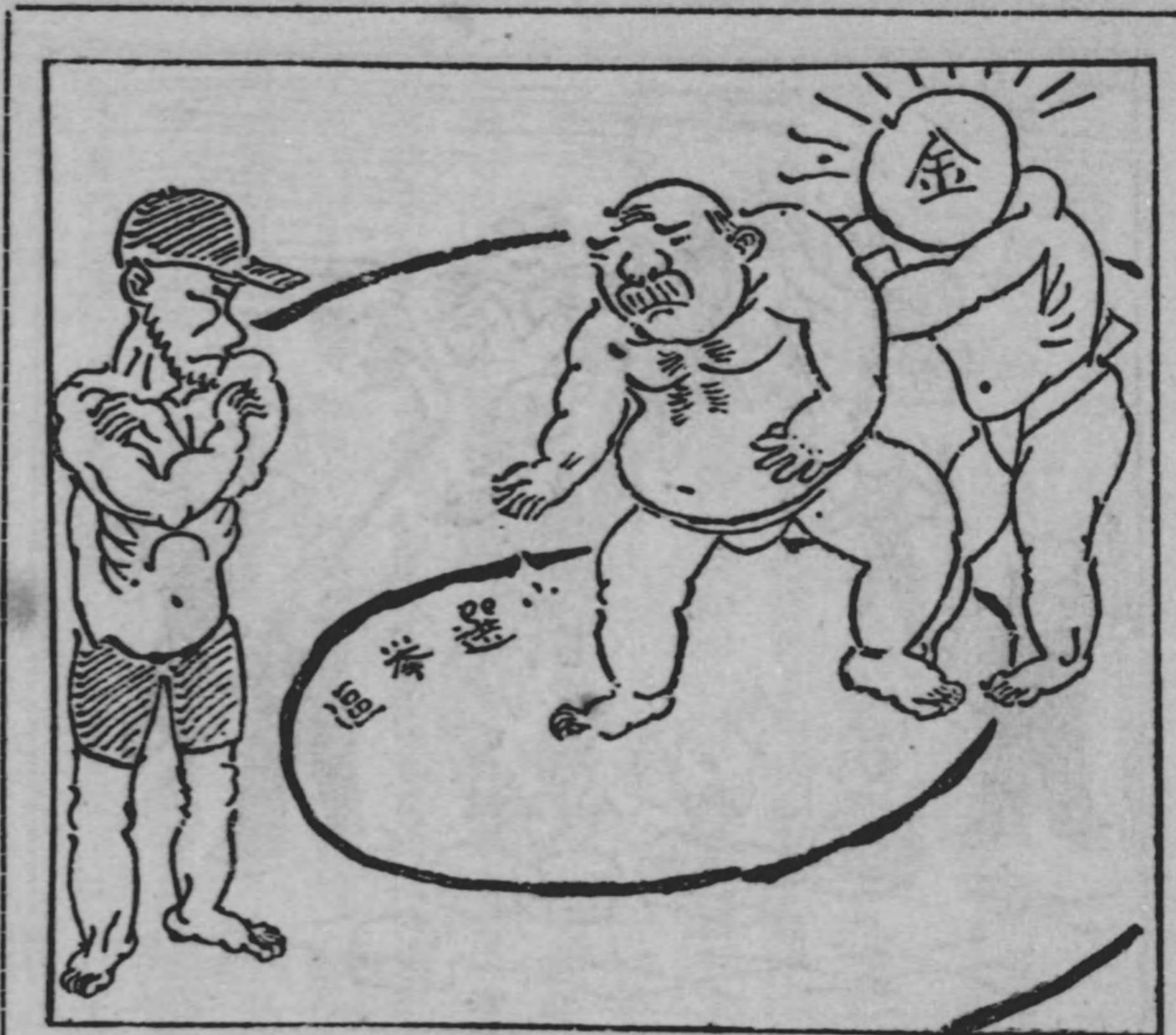
かんぢようと
かんぢよう

登場人物

- | | | |
|------|----|----|
| 政友會員 | 杉田 | 不及 |
| 無産黨員 | 金賀 | 片喜 |

杉「どうもかんぢようだ……」
 金「どうもかんぢようだ……」
 杉「どうもはじめの地方官更迭、あれは大分薬が利きすぎたね」
 金「あの浪人からの成り上り組は決死隊といふから物凄いな。」

道「それやどういふ手合にだす？」
 宜「多くは精神病缺患者身體缺患者改悛の見込ない犯行者などやが、州によると少女に暴行を加へた者に限つてゐる處もある、今の處は絶對性交能力の破壊といふ處迄は進まずに遺傳に依つて心身の缺患者か、犯罪者が生れて來ん様な生殖力の破壊に止めてるといふ程度や。」
 右「宣や、それでは子は出來んでも、矢張り暴行をやりくさると、病毒はまきちらすし第一小さい娘子が可哀想やな。」
 宜「尤も凌辱でもやらうといふ手合は、別に生殖力がなうなつたら餘計に安心して無茶しよるといふ事もありますまいが、それで暴行を差控へるといふ事にはならんので、性交能力まで奪ふべしといふ意見もあります。」
 右「そりやさうしたかてよささうなもんやな稻やん……」
 道「さうだす……一寸まつておくれやす一寸……」
 右「又おちようづかいな……若いくせにえらい便所が近いな、ハ、アあの方の病氣やな、あんたも手術をうけんならん口やないか？」



を見せたぢやないか。」
 杉「さそれほどでもなかつたら
 うが、根が生一本ない、人だが、
 見たつきがいかついからね。」
 金「でもかなり干渉はやつたぢ
 やないか。」
 杉「そりやどの内閣の時でもさ
 ……、たゞ香川や栃木で無産黨に
 手きびしくやつたので、みな落選
 はしたがために得るところより失
 ふところが大分多かつたね。」
 金「そこへ怪文書に議會政治否
 認と来たからね。」
 杉「そりやまづかつたがそもそ



杉「あれも内相が好みで拾ひ上
 けたわけでもない、はじめて内務
 畑へ飛び込む、四方八方から無性
 やたらに持ちこまれてね…。」
 金「そこへ内相の評判がこはも
 とと来たらう。」
 杉「あれはな、日本では警察官
 と裁判官といへばとてもおつかな
 いものにきめてある…：そこへ山
 岡局長はじめ腕の喜三郎とその一
 黨などと、新聞で仰山に書き立て
 るから、とても凄味がか、つてば
 かに世間の感じを硬化したね。」
 金「又うんとやるぞといふ氣合



も末だね、要は重苦しい感じだね、
 輪長のゴルフや總監のテニスの話
 などの方が明るいからね。」

金「そこで感情か……」

杉「全くさ干涉壓迫といふ聲に
 對する反感だね……民政黨がよい
 民政黨の政策がどうといふではな
 し、全く感情だね感情硬化だね。」

金「さおれの方もそのかんじよ
 うだが、同じかんじようでも一寸
 筋がちがつてな。」

杉「どうしたといふのだ？」

金「お金の方の勘定さ……三等
 汽車でも電車でもまだ乗り物のあ

るところはよいがな……」

杉「山梨の高橋君であつたかね、足が悪いので婦人達が背に負うて一里二里と雪道をつい
 ださうだね。」

金「さうさ、おまけに先生風呂もろくには入れない、めしに汁といふ事もあるが、汁はのど
 によくないといふのでめしと香のものばかりだね。」

杉「二圓三圓と札を賣る世の中に、十錢五十錢と水呑百姓の懐中から淨財が喜捨されたとい
 ふぢやないか。」

金「その通りさ……となりの信州伊那郡では、藤森君が東京の名士が應援にきた、いさ、か
 軍資のたしにもと講演會を開いたが、警察では親切にも入場料十錢は高すぎる、三錢にしなけ
 れば許さないといふので、泣々三錢にしたのはひどかつたね。」

杉「だから既成政黨では小選挙區に戻したい、制限額を高めたいといふ。無産黨では投票日
 の公休や日常給與、さては供託金、ピラ、ポスター、立看板、推薦狀の禁止を主張してるね。」

金「全くですよ、ポスターをうんと人手をかけて貼り廻るのは、一種の戸別訪問なのだか
 ら。それに深川本所ときは、われ／＼職工は朝は早くから工場にゆかねばならぬ、夜になつ

て貼りに廻はると尻からめくられてしまふしね。」

杉「その代り大分既成政黨の買収を邪魔したさうだね。」

金「そりや平地のはなしで、村々の四つ辻に張番する、尾行するね……しかし山へゆくとそこまで手は廻らない、まあ將來は既成政黨は山へ逐ひ込むのだね。」

杉「矢つ張り金は敵の世の中かね。」

金「選挙區は大きくなる、一區平均八千八百人が十一萬人になる、今までの兵卒が小隊長になつて札を賣りつけにくるから余計に毒が廻はるのサ、やれ棄權率が少くなつた? そりや買収の薬が廻つたので政治に眼覺めたが聞いてあきれよ。」

杉「かんぢようかね。」

金「かんぢようだよ、高橋君は此間朝日講堂で、しはがれた聲をふり絞つて、言論のあつ迫が何か言論のあつ迫が何か、それよりも金だ、買収だ、買収してないといふなら僕を訴へろと大見得を切つたからね。」

杉「かんぢようだね。」

金「かんぢようだよ。」(三、二、二六)



楠正成とムツソ

リーニ

登場人物

成る會社員 世賀 末也

或學校の囑託 建野 直三

世「今日の新聞を見ると尾崎号堂大にメートルをあけてるね。」

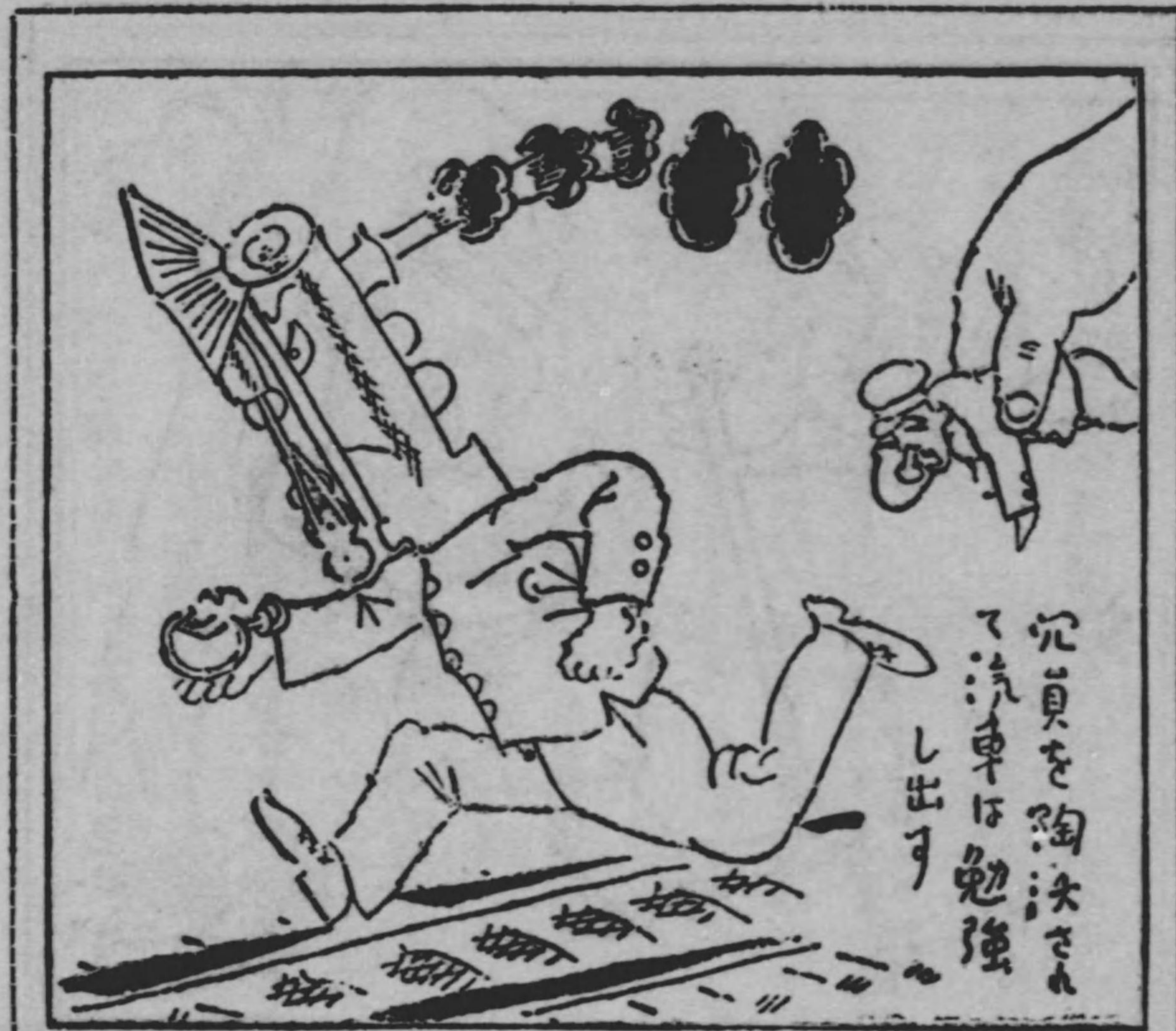
建「さうだ政友會の北條がやうやく衰へんとする時、民政黨の足利が之に代らんとしてる、われわれ中立は正に楠氏にあたる、その我々を灰色とは怪しからぬ、實業



治家連中の迂なるを歎いてるね。
 世「全くだ：：しかし誰も不景気は感心せんから。」
 建「感心せんから景氣を直すには土臺から建て直さなければいかぬ。やれ補給、やれ買上、やれ増設とつぎはぎ細工は負擔の苛重物價の騰貴となるばかりだよ。」
 世「そりやさうだ：：」
 建「大正八年から昭和二年までに、英吉利の歳計は約百七十億圓の豫算から八十三億圓の査定をしてる、戦争成金の北米合衆國でも百二十三億圓の歳計から約五十一



同志會とあいまいな協定をしやうとする政友會こそ大灰色である、これを見通す世間は色盲だとさ。」
 世「中立の楠氏は大分手前味噌もすぎるやうだが、黨弊の浸潤を憂へて政務官と事務官の別を嚴に樹立したい、日本の財政經濟行詰りを打破すべく經濟的政費の大節減を行ふべしは至極同感だね。」
 建「まだ世界大戰の時の浮いたくくの夢がさめ切らぬものがあるかも知れないが、朝野の有識者はあの大地震やあのパニックに遇ふて、まだ眼のさめ切らぬ國民や政



冗員を淘汰され
て汽車は勉強
し出す

家が國家の大計を遠観しない、古今東西みなその憂を一にするな。世「全くだ！」

建「さうだ、徳川幕府の初期にはあの戦亂つゞきのあとでも、家康は黄金三萬枚、銀子一萬三千貫目をあとにのこして、

第一は軍國の費用に備へ、第二は不慮の大災に際し賑救の費に充てんがため、第三には凶荒に備へんがため、之を自身の奉養に用ゐず天下の物と思ひ、此上とも平常の國費は年毎の入額を以て辨じ、なるべく冗費を節し



夜讀書
音楽

書い黒ジマツ

億圓を減縮してゐる。」

世「それで日本は？」

建「へらしどころかあべこべに増す一方だ、十億六千萬圓から十七億六千萬圓にうなぎ上りだ。こんなべらぼうなお先見すの其日暮しのやりくりをやつてゐては輸入は増すばかり正貨は益々流出する、おまけに公債がもう五十億を突破した。噴火口上の舞踏といふ語もあるが、これでは破産の彼岸に盲進してゐるのぢや。國の財政も地方の財政も個人の經濟も身分不相應にはりすぎてゐる、そこへ政治



て此上とも貯へよ。
 と遺言してゐる。ところが三代家光の頃から日光の造營、鳥原の亂、明曆の大火、禁裏兩度の御造營などで財用乏しきをつける。綱吉に至りては紀綱弛廢し、上下奢侈に流れ、十七年間四度の貨幣改鑄によりて一時を糊塗してゐる。それから八代吉宗は善政を施し節約につとめ歴代財政窮迫の後をうけて猶米五萬石、金三十七萬兩を餘し得たといはれてゐる。

世「政はその人にありだね。」
 建「さうだ、それが又忽ち例の

田沼時代となる、白河樂翁によりて餘ほど盛りかへしたが、家齊の豪奢その極に達し、その後水野越前が頑張つたが追つかない、政費の膨脹、奢侈の普及、士風の頹廢は、外患と相まちてとうとう幕府の覆滅となつたね。」

世「そこで号堂の經費節減論もよめる。實業同志會も政友會に經費節減や公債償還を提案してゐるらしい、がさて實行の段となると言ふにやすく、行ふにかたしだね。」

建「それなら今度は日本で大もてのムツソリーニを引合に出すかね。」

世「ムツソリーニを？」

建「ムツソリーニの勇敢さや大きな眼玉ばかりに感心してゐてはたゞ盾の一面にすぎない。ムツソリーニのえらいのは晝は鐵の人黒シャツの人であつて、夜は讀書の人である、ヴァイオリンの樂手である事である。ベトーベンやワグナーやロシニーの樂曲を弾じて自から藝術の仙境に入る、内外の書籍を涉獵して絶えず冷靜に周密に科學的に國政の將來を達觀する。」

世「日本の政治家の毎晩宴會面會で夜ふかしのとは大分ちがふな！」

建「ボアンカレはあの佛首相として忙しいながら著作をしてゐる、日本だつて伊藤博文星亨などはいつも讀書を缺かさなかつた。そこでだ、ムツソリーニはなにより先づ伊太利の財政恢復

をモットーとした、彼は百二十億リラからの歳入不足の財政を引き継いで、二億からの剰餘を生じるやうにした。既に二十億以上の公債を償却して更に五億五千萬リラの減債基金まで設けた。物價の騰貴を引下げるため通貨を收縮して約四億リラの紙幣を償却した、とう／＼此春リラの金本位恢復になつた。」

世「戦争のため創痍満身を蔽はれた伊太利は金本位を恢復し、戦争成金で浮いた／＼の日本がまだ金輸出禁止などはとても振つてるね。」

建「全くだ、日本も生ま中勝つたばかりに驕つてるのだね。」

世「それでどうしてムツソリーニは財政を旨く建て直したのかね。」

建「曰く大斧鉞さ、かれは十餘萬人の官吏の首をチョン切つたね。各官省はどし／＼潰す併合する、裁判所であらうが税務署であらうが手當り次第整理したね。ことに鐵道などは大改革でうんと役員をへらし、經費はうんと減する収入は増す、しかもその結果は皮肉ぢやないか、今まで一時間位はきつと延着した汽車がきちんと定期に着くやうになつたよ。」

世「中々やるものだね。」

建「そこへ外人観光客吸引のためホテルのチップを劃一にするとか、獨身税の収入で寡婦や

幼児の保護の資に充てるとか、日曜日のローマの電車賃を十文づ、増して肺病豫防費にむけるとか、痒いところまで手が届くぢやないか。」

世「一寸日本ではムツソリーニ式の男は見當らんね。」

建「いや／＼大和民族だ、いざとなら偉人も出てくる、國民もみな眼醒めてくるね。」

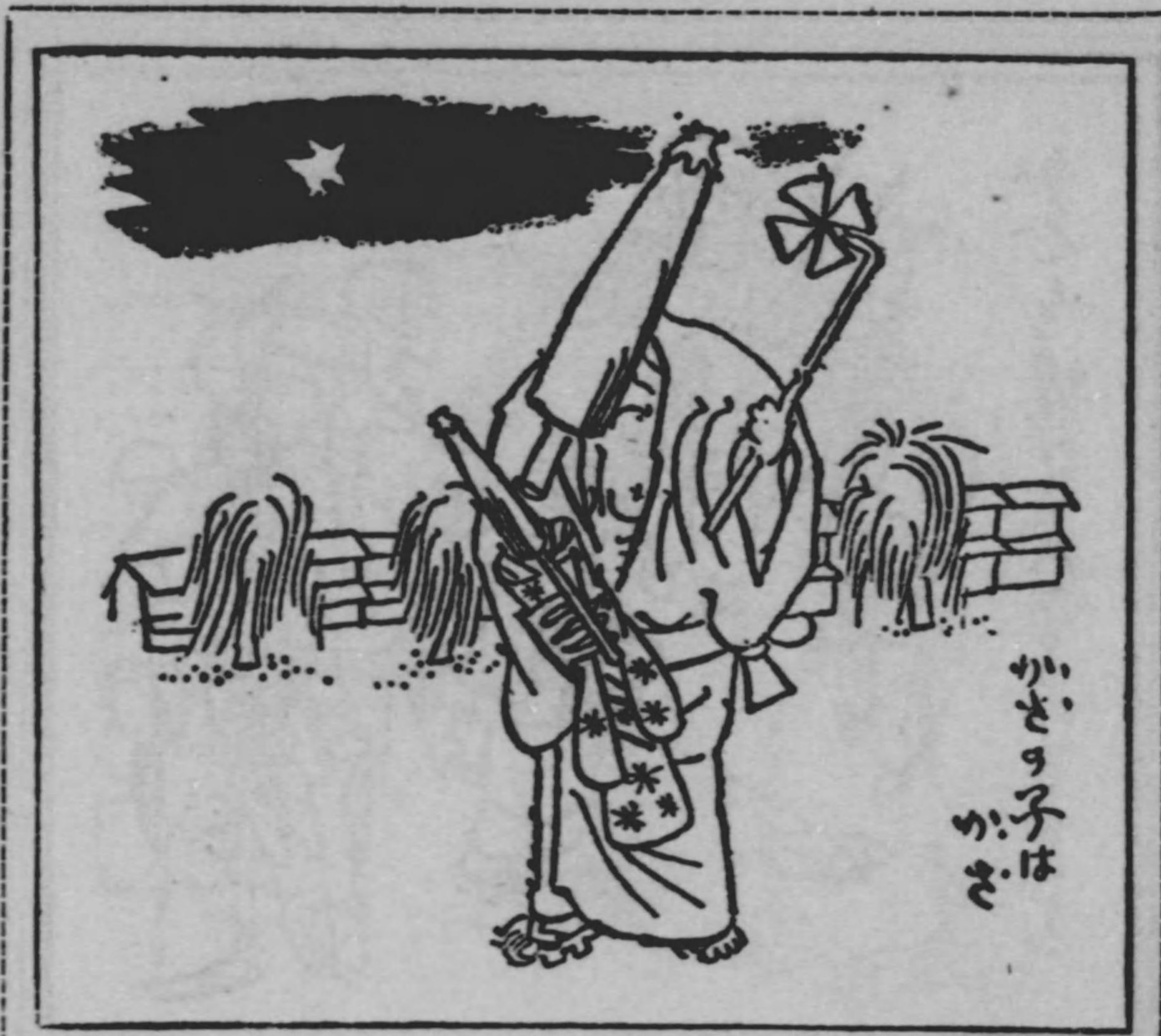
世「さうだらうか？」

建「西南戦争後の財政紊亂を建て直す爲めに、松方正義は紙幣整理を斷行する、米十二圓の値が六圓に下がる諸物價は皆下落する、百姓も町人も大反對だ、松方の身邊尤も危かつたが、世論に對抗してとう／＼財政を建て直した經濟を建て直した。」

世「あべこべに御機嫌取に忙しい政治家連中も大にくすぐつたいわ。」

建「今日はどの政黨だから政派だからというて蝸牛角上に争ふ、そんなけち臭い時代でない、すべからく此現状を打破するといふ、黨派超越の大勇猛心を政治家にも實業家にもお役人にももろ／＼の國民にも要求するね。」

世「楠氏が中立の十名足らずではいけない、政友民政みな楠氏たるべし、ムツソリーニたるべしだね。」(三、三、二九)



かざり子は
かざり

買うてうんと子供こしらへんならんのに。」

右「それなら手術をせんまでも病氣だけは根治しとかんと。」

道「丸で人をかさかさあつかひやな。」

右「さうやがな、あんたあの道にかけては評判やがな、ほんとに根治しとかんと遺傳するでな。」

宜「おとつさん梅毒には遺傳はないですよ。」

右「それでも、かさかきの子供はまだ交りも知らぬ内からかさかいで、くるがな。」



性病物語

登場人物

社員 道員 稻知

醫 居 長井 右京

右京息醫師 長井 宜

道「や、おほけに失禮……」

右「おほけに失禮もよろしいがあんた若いくせに大分便所が近すぎるな、殺菌手術でもやつとかんと、どもならんな。」

道「阿呆らしい、これから女房



運命を持つてるといって、日本でも累年死産者をしらべてゐるが約十五萬人の死産中五萬から六萬は梅毒の結果やといふてます。」

右「その位やから生き残つても弱々しい病人や低能が多い事になる。」

宜「なんしろ伯林の住民中三十歳以上の男子の六割は梅毒にかつてるといひますからな。」

道「日本では何うかいな。」

宜「内務省の調では一般患者の二十人に一人は梅毒患者だまうで……」



りんを携へると人の多多いんだよ!

宜「そりや遺傳やなうて妊娠中胎兒が病毒に傳染するので……」

右「どちらでもえ、がな、かきかきの子の出来る事は同じ事やないか。」

宜「そりやさうだす、それにどうしても家庭でも病毒に傳染する機会が多いし、又傳染しやすい體質になつてますから。」

右「外國でも同じ事やろな。」

宜「ウイレー博士は死産の三分の二は梅毒によるといって、モルロフ博士は梅毒の母體より生れたものは、六割は死産か天死の

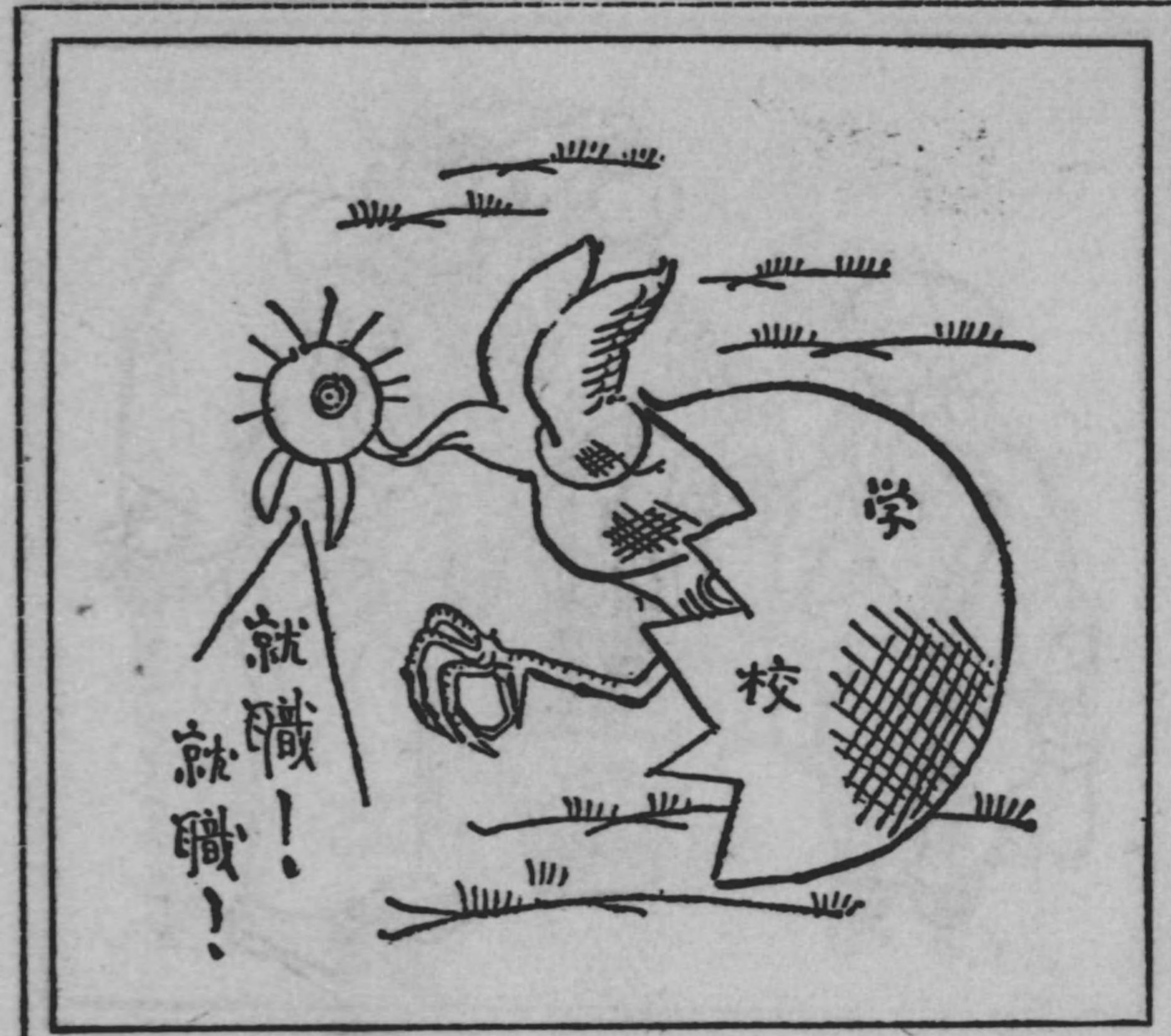


道「もうそんな話やめやうやないか。僕などはほんの一寸か、つてもう直つてる、まあ無智な労働者階級には大分注意監督もいるやろけれど。」

宜「ところがブラシユコ博士の千九百年の伯林の調査成績報告には、花柳病患者の三割は私娼、二割五分が学生……」

道「僕はもう学生やない、今は立派な実業家だす。」

宜「その実業家が一割六分で労働者はたつた一割、軍人が四分となつてる。」



道「まあしかし僕はまだかさにはか、つてないのや。」

宜「淋病やろ。」

道「まあその邊のとこやな、淋病にか、らんと男一人前になれんいふさかい。」

宜「ところがこの方が傳播がひどい。獨逸でも青年男子の四割から五割、女子の二割から二割五分は感染してゐる。淋疾にか、ると妊娠力がなくなりやすい、獨逸でも現在一千萬組の夫婦があるが、その一割は子がない、その又半数は淋病患者やさうな。」

右「そりや又どうした事やろな。」

宣「労働者は公娼相手が多いし、又早くから結婚生活に入る。有産階級は享樂の自由が利いて、ならし晩婚やさかい、有産階級の患者は労働者の約十倍にも當るといふてゐる。」

右「まあいづれにしても若い内死んで仕舞ふのはらちが早い、弱いま、でだら／＼生きられてゐるのは、本人もつらい両親もつらい。」

道「そりやほんまにさうや。」

宣「だから年齢構成の上から見ると、日本の現状は甚だ不經濟な人間の粗製濫造といふ事になつてゐる。只性慾の衝動で子供だけは偶然？ に生れるが、その生きたいと願ふ子供を充分に成育さす心懸けが全く缺けてゐる。」

道「そりやどういふ事になるんや。」

宣「こゝに同じ生れた子供でも、丈夫でせめて二十歳頃までの準備時代をすごし、世の中で何十年でも働いて、それから死ぬのがほんまもんや。それに二十歳頃までに亡くなるのでは、家庭でも學校でも、費用や手数のかけ損、心配の仕損といふ事になる。まあこのせち辛い世の中で入學難の聲高い渦の中へ、見す／＼中途退學や中途死亡をするやうな無駄な者をほり込ん

で、たゞ競争をよけいにするといふのは、なんと阿呆臭い事やないか。」

右「そんなに日本では若死が多いかしらん。」

宣「歐洲の重なる國では人口一萬人中零歳から四歳までの數がならし男女各二百人位やが、日本では男三百八十人女三百六十五人、となつてゐるから乳兒の數は約二倍の比率になるのや。その中から二十歳までに死んで仕舞ふのが、男女合して英吉利が六十七人、佛蘭西が三十六人、伊太利が百三十九人、それに日本は二百九十四人といふのやからとても振つてゐるやないか。」

道「しかし日本は多産やさかい……」

宣「そら絶對死亡數の多いのは當然やが、四歳以下の乳兒の總數に對して、二十歳までに死ぬ人の比率は、外國では一割からせい／＼三割位やのに、日本では女子三割七分男子四割二分といふのやから、まづ半分近く死んでしまふ事になる。」

右「さういふ弱い人間をつくるから、近頃の若い者は皆愚痴や不平の問屋になる。共產黨事件やかてその流れの末をせき止めやうと血眼になる前に、その源泉を冷靜にながめなけりやう。」

道「そりや全くや。おまけにけふ日のやうに在學中から就職運動にきり／＼舞して、どうし



減税競争

登場人物

銀行員 堂下小藤太

社員 松竹道灌

堂「どうも感心だな、どうも感心だな。」

松「何が感心なのだ？」

堂「いやどうにもかうにも感心だ、全く羨しいな。」

松「何がそんなに羨しいのだい？」

堂「英吉利でチャーチル蔵相の

て中々仕事にありつけんではな。」

宣「そこで各国とも人種改良といふ事に眼をつけて来たのですが、日本では人種改良も産兒制限もチャンボンで、高位高官のえらい人でも本はよまうとせんのだから。」

右「下村海南がよく引張り出す墓碑銘がある。それはアメリカの哲學者が人間の一人前になるまで、家庭や學校で費やす出錢を算出して、多くはその借錢をよう拂はずに死んでゆくからこんな墓碑銘でも立てたらよからうといふので、それこれを御覽なさい。」

本人は生存中は負債者なりき、本人は丁年以後に至るも辛うじて其生活を維持するに止まりて、毫もその少年時代に於ける投資額に對して償却する處なかりき、本人は實に支拂無能力者として死亡せり、而して永く慚愧のま、眠れり。

と書いてある、日本では猶更適切やないか。」

道、宣「そりやどうせ粗製濫造の本家やさかい、人間かて同じ事や、無理はおまへん。」

(三、四、三〇)



いよ。長々と鉦太鼓で前ぶれしても、いざとなると昭和六年より實施などと、日本橋から向島の火車を見てるやうなそんな悠長なものぢやないね。いきなり國庫より地方へ二千萬ボンドから三千萬ボンド見當の分配と来たから、一寸現在の地方税の一分五分から二割近い軽減となるね。」

松「そいつあ豪氣だな。」

堂「しかも國庫剩餘金によりて鹽梅するので、これらの政策實施により新に國民に何等負擔を増さないと宣言してゐるね。」



提出した豫算案の事さ。」

松「それがどうしたといふのだい？」

堂「まづ六億二千五百萬ボンドの減債基金繰込みに更に二億五千五百萬ボンドの償却資金設定さ。」

松「なるほど。」

堂「そこへ砂糖消費税の引下げが二百三十萬ボンドで小賣値段が一ポンドで一片の四分の一安くするな。」

松「それで地租委譲に義務教育費の國庫支辨？」

堂「いや交ぜかへしちやいけな



大猿保養め合ふ英政界の美風

からの償還金が四百五十萬ポンド、それへ経費の節約が一千五十萬ポンドさ。」

松「相變らず徹底的に緊縮整理だね。」

堂「大正八年の十六億六千五百萬ポンドから昨年は八億三千三百萬ポンドだからもうかれこれ半額の節約になつてゐるね。」

松「北米合家國だつて戦争の大成金だが大分大鉈を揮つたね。」

堂「揮つたとも、大正八年の六十一億四千百萬弗から昨年の三十五億七千二百萬弗、そこへ今度の



妙政の軽減と膨脹

松「そんなに英吉利の景氣はよくなつて来たかね？」

堂「どうして景氣は相變らず不印さ。まづ追加豫算で二百五十萬ポンド、上海の出兵で三百萬ポンドの支出増さ。それへ過剰所得税から三百萬ポンド、酒税から三百萬ポンド、麥酒から五百萬ポンドの收入減で、合して二千五百萬ポンドの不足と來てるね。」

松「それでどうして帳尻が合はされるのだい？」

堂「相續税の増収が九百五十萬ポンドに、ケンヤ及パレスタイン

總歳入が四十一億三千万弗といふので、償却にむけやうにも借金はなくなつてくる、資金もそれ／＼積立てられてある、軍事費いふてもさう／＼は増されない、そこで止むなく減税といふ事が政争の中心になつてゐるな。」

松「減税競争だな。」

堂「さうだ、大統領選挙を控へて減税政策が白熱化してゐるね。五月には下院の二億九千万弗の減税案を上院は二億五百万弗に査定し、兩院協議會の結果が二億二千三百万弗に落ちついたらしいね。」

松「その減税といふのは？」

堂「一つは會社所得税で一昨年の新法により聯邦政府からは年收の一割三分五厘、州からは経営などは四分五厘併せて一割八分といふので、企業界は大分打撃をうけ失業者四百萬といはれてゐる、そこで一分減さ。」

松「それから？」

堂「も一つは賣價三分の自動車税の全廢さ、この収入は約六千七百万弗になるさうだが、これは全米の道路營繕費として、國庫の負擔分七千百万弗であるから、これは自動車所有者に課

すべしとの聲があるね。しかし何れにしても、どうして財源をしぼり上げやうかといふのと、どうして負擔の輕減を計らうかといふのとは上下に大きなちがひさ。」

松「しかし英米などの戦時の膨脹さ加減は日本など比らべものにならないから、よしんば大蛇を揮つたといふて見てが、もと／＼日本の財政に比較してはね?!」

堂「いや／＼戦時の膨脹ぶりはちがつたにしてが、とに角世界大戰で俄かに激増した事は事實である。そこへ戦後なほうなぎ登りに上つてゆくのは感心しないね。大正八年の十億六千四百萬圓が昨年で十七億五千八百萬圓だからその増加率が高すぎるよ。」

松「それもさうだな。」

堂「まあ何よりも日本の物價の高い事を見給へ。これが東洋の離れ島だからそれほど感じないが、一寸上海へゆく、君かへりに牛肉に鶏卵では荷物になりすぎるが、洋服でもつくつて來給へ。土産か、さう煙草でもゴルフの球でも、何を買つて來ても安すぎる、旅費は浮いてくる、それだけ内地の方が高すぎる、物價の指數は戦後歐米では大概戦前の百から百四五十になつてゐるのが日本は百八十を超えてゐるのだからね。」

松「その位にしなれば輸出を減じ輸入を増し、金輸出解禁をおくれしめ、生計費の騰貴を



朝鮮水電

登場人物

内地の會社員 多田 高成

朝鮮の會社員 安來やすく奈良なら内ない

多「どうしてかう諸式が高くなるのだらう？」

安「上下心を一にして物價騰貴にいそしんでるからさ。」

多「又御箱の皮肉かね。」

安「いや事實だから仕方がない、まあ仕事をやるにしてが先だ

持ちこたへる事ができぬといふのかね。」

堂「まあさう皮肉らなくてもよいが、何よりおれの感心するのは英國の政治家の心意氣だな。」

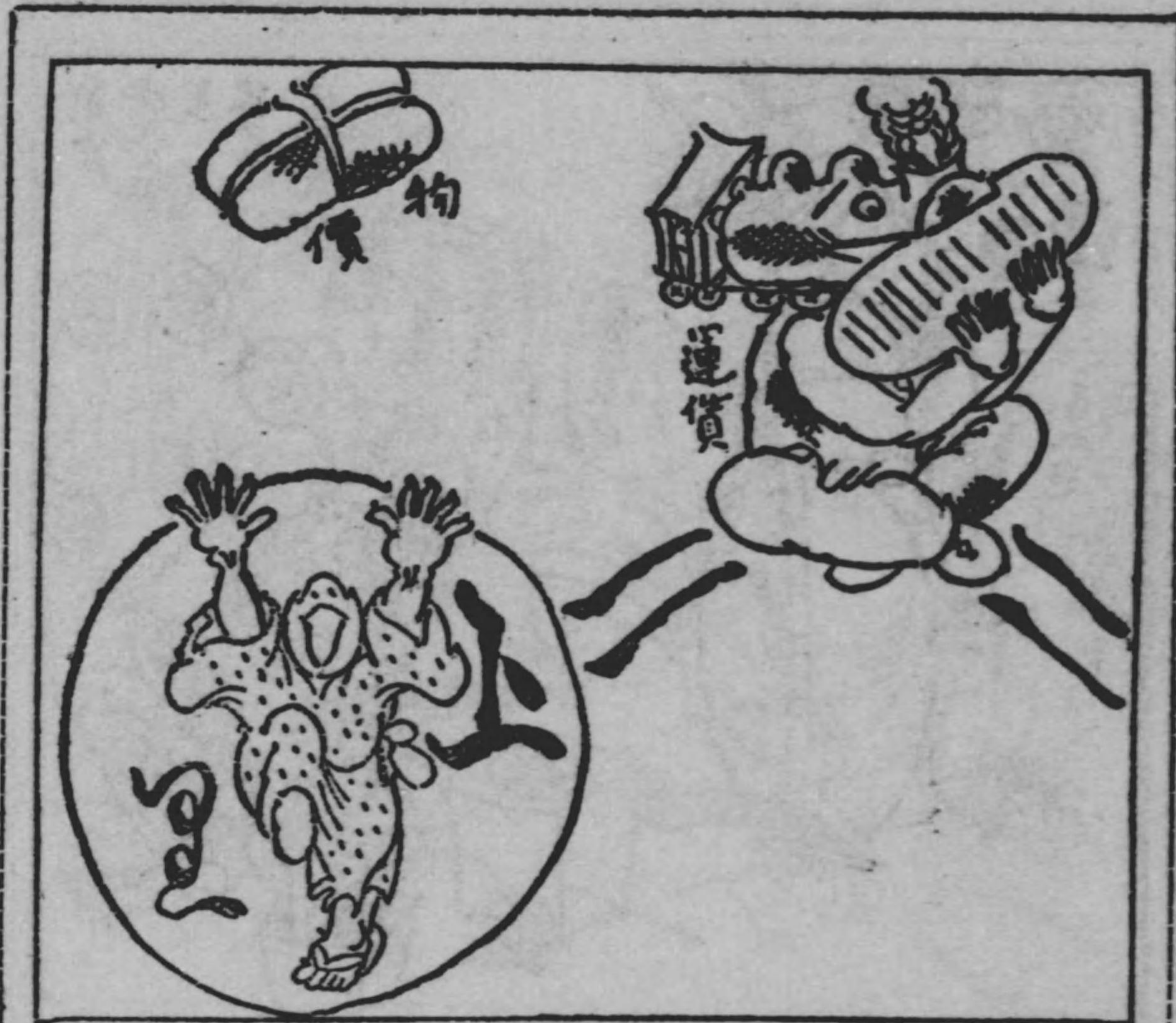
松「どんな心意氣だい？」

堂「チャーチル蔵相が議會で財政案を説明すると、労働黨の前の蔵相スノーデンも自由黨の總理ロイド・ジョージも「いやすばらしい御手柄だ」とか「とても大出来だ」とか、みな口を極めて保守黨の政策に謳歌してる。積極に政策に謳歌する代りに、消極にやれ朴烈やれ松島事件やれ乾事件やれ怪文書やれ何やれ何と、陰謀術數でケチをつけ傷けあふ、あの暗やみの恥をあばき合ふなどは、全く風教の上からいつてもいやになつちまふね。」

松「そりや君英國の政黨は國策を本位とし、日本の政黨は黨争を本位とすさ！」

堂「況んやその政黨すらもあと廻しにして私利私情にこれ動くに至つては?！」

(五、三一、波鮮の途次山陽ホテルにて)



多「何もかも高いだらけだね。」
 安「高いだらけだ、そこへ公課が煩苛で重い。原料をとりよせるにしても、出来上った品をはかすにしても、汽船汽車賃はもとより小運送費が馬鹿にかかる。」
 多「一年に費す小運送費二十億圓といふぢやないか。」
 安「いろんな事知つてゐるね、その通りだ。さてその高くなつた品物が最後の消費者の手にうつるまでその間に關門の多い事、品物は古くなり悪くなつて値段は高くなつてくる。」



つものは金だらう。」
 多「かね／＼聞いてる。」
 安「交ぜかへしちやいかんよ。その金にしてが金利は高い、だから配當も高からざるを得ない。敷地をといふても坪何十圓といふ、建築にしてが工事がすべて高い、勞銀とても勢ひ割高である、そこへ企業の組織に無駄が多い、船頭も澤山だから船員で満船になつて、人件費は高くつきすぎる、が事務だけは遠慮なく溢滞する、そこへ幹部がやたらにボーナスをぶつたくる。」



電は高すぎる。」
 多「高すぎる？」
 安「もちろん一キロ時一銭以下といふ安い電力もあるのだが……」
 多「そんな安いのはどこだい？」
 安「生憎と日本海の向ふ岸だ？」
 多「なんだつまらない。」
 安「つまらない事はない朝鮮だ、日本だよ。」
 多「どうしてそんなに安いのか？」
 安「朝鮮に咸鏡南道といふ面積は二千七十三万里先づ九州位広い」



多「全く同感だね、それから最初の動力費も高くつくぢやないか。」
 安「その通り、石炭にしてが年採炭費が高くなりたがる、撫順炭なり安い石炭を入れやうとしてもそれぢや内地炭がばつたりだといふので高く釣り上げる、九州炭も此先の壽命はもう七八十年だ、炭坑はますます深くなる上に勞銀はますます高くなる。」
 多「それなれば水電は石炭と違つてなくなる氣遣ひはない。」
 安「氣づかひはないが内地の水」



縣がある。」

多「馬鹿に廣いな。」

安「その代り人口はまだ漸く百三十六萬人しかない、その南道の山地は五千尺の高原で、なだらかに満洲の方へむけてさがつてるから、水流はみな鴨綠江の方へ流れ込んでる。」

多「なるほど。」

安「ところで南側日本海へ面しては絕壁のやうな急勾配になつてる、そこで其高原を流れてる赴戦江といふ川の溪谷に東洋第一の堰堤を築き上げたね。」

多「東洋第一？」

安「高さは岩盤上二百六十尺、長さ二百十八間、幅が基底で百九十七尺、所要コンクリート量七萬八千坪。」

多「素的だね？」

安「それでその溪谷に沿ふて周圍十九里半、深さ二百四十尺、最低水位百五十尺で、水面一方里半の貯水池ができる。」

多「随分の水だらうね。」

安「貯水量二百四十億立方尺、それでその上流の方に取入口があるから有効水量百六十七億立方尺。」

多「なんだか分らなくなつて來たね。」

安「億といふ數字になるとおれも一寸見當がつかないね。まあ素的な水だと思つておくさ。」

多「それから。」

安「それからその貯水池より更に上流に向つて一萬四千六百五十間の水路をほり赴戦嶺の横つ腹をぶちぬき、日本海の方へぬつと顔を出す。そこで平均水量一秒時八百二十五立方尺、安

全率六百六十立方尺の水を、二千三百三十尺落して十三萬四千キロの發電機を据ゑつける。更に第二發電所で四萬キロ、第三發電所で一萬八千キロ、總計十八萬キロの電力を出すのだな。」

多「豪儀なものだね、しかしそれぢや素的な金がかゝるね。」

安「總豫算四千五百萬圓だ、割安さ。」

多「ところが兎角豫算通りいかないだらう。」

安「全くだ、諸式が次第に上るからつる豫算より高くなりがちだ。尤も中にはわざと安く計上して置かぬと會社の成立資金の拂込に困るから、とにかく割安に早く出來上るやう見積るのもあるよ。」

多「これもその口だらう。」

安「そりや出來上つて見なければ分らないが、野口達といふ人を中心にして三菱系とか商船系とか少數の資本家でまとまつてゐるのだから、豫算にもあまり無理はないだらうよ。」

多「さうかね。」

安「なによりもおれが安くつくとおもふたのは第一に水利權がロハだらう。」

多「内地ぢや高く賣りつけたり、高く評價して資本にくり込む。」

安「それが無からうから先づ水利權買收費といふ大口な無駄がない、第二には沿道町村の文句が少ない。」

多「といふと？」

安「やれ水利灌溉に不便になるとか、いろ／＼沿道の町村が苦情をならべる。これがため少からぬ時と手數がかゝり、相當多額の賠償金をとられる。」

多「全くだ。」

安「第三に水路だけに十里にあまり、送電線だけで四十哩近い大工事が、一咸鏡南道廳の下にある。これが内地だつたら三つ四つの地方廳に引つか、つてさんさんお百度を踏まされる。」

多「全くだ。」

安「そこへ勢銀は朝鮮人支那人といふので安くしておとなしい。」

多「なるほど安からざるを得ないね。」

安「それで又在來の一度石灰窒素にして更にアムモニアをつくるフランクカロー式の石灰窒素法に比し経費が半減する空氣より窒素を水より水素を得て化合せしむるカザレー式により、硫安を一年に五十萬噸近くもつくつて、内地の一年の輸入二十萬噸一億五千萬圓を驅逐しやう



栗屋農場

— 強氣と弱氣 —

登場人物

旅行家 有木 眞晴

友人 老床 惣太

有「ものには強氣と弱氣とある。」

老「左様々々。」

有「時と處によりて必ずしも同じからず。」

老「御尤。」

有「況んや之に當る人間にして

といふのだ。」

多「なるほど内地の方は顔色なしだね。」

安「おまけに内地では沿道町村に水利の賠償金をとられるが、此の朝鮮水電は高原から鴨綠江に注ぐ水が減しても苦情がない。むしろ一時の洪水になる水を喰ひとめるばかりか、反対に水がかれがちな城川江を経て日本海へ絶えず平均六十立方尺づゝ落さうといふのだから、此流域で新一萬二千町歩の水田ができるね。」

多「上下で大變な相違だ。旨くいつたら内地の連中への好い手本だね。」

安「しかし内地では物價を高くする方針だからあまり好い手本にもなるまいよ。」

多「またお箱の皮肉かね。」

安「多「ハ、ハ、ハ、ハ。」」



七十四人、そこで近頃山東移民が一年に百萬人以上もはいり込むがケロリとしてるね。だから日本の満洲移住論も出てくるが、やれ商租權がどうかのといふが、なによりも日本の移民などはあの寒いところへ生活の程度が高くてとても山東苦力のやうな力作はできない。支那人と競争ボコベンあるといふ弱氣論が多いな。」

老「といふて強氣論などてんで聞いた事もないよ。」

有「ところが今度満洲で僕の友人が満洲移民の苗圃として成美農



異なるに於てをや。」

老「あい〜左様で御坐い！」

有「まぜかへしてはいかな。」

老「全くだよ。」

有「そこでなんだつたかな。」

老「大連のそれ何んとか農場の……」

有「さう〜栗屋農場の話だつたな。」

老「さう〜その農場の事さ。」

有「實はな満洲といへば日本内地の三倍もあらうか。しかも人口の密度ときたら一方里に内地の二千四百二十五人に對したゞの三百



不澤山の嶺に出稼ぎを案がり
 桐の火鉢に焙つてゐる

園へ案内してくれたね。」

老「そりやどこだい？」

有「大連の郊外西山屯といふ處で十萬坪の果樹園を經營してる粟屋萬衛といふ人の農園さ。先づ林檎畑、之れが二十町ほどずつと一直線に縦隊をなしてゐるね、各隊の間隔約二十尺！」

老「馬鹿に贅澤なやり方だね。」

有「ところが贅澤でないね。丁度勤をひく馬の往復に便なるだけに幅をはかつてある。」

老「ぢやその間にはなんにも植ゑてない。」

有「全く一草一木なしさ。そして時々その間の土を働きかへす、それは雨の少ない満洲では雨水を流しばなしにせずによく吸収させる、そこへ働かへしてあるから地下に浸透した水の蒸發をも阻止しやうといふのさ。」

老「なるほど考へてるね。」

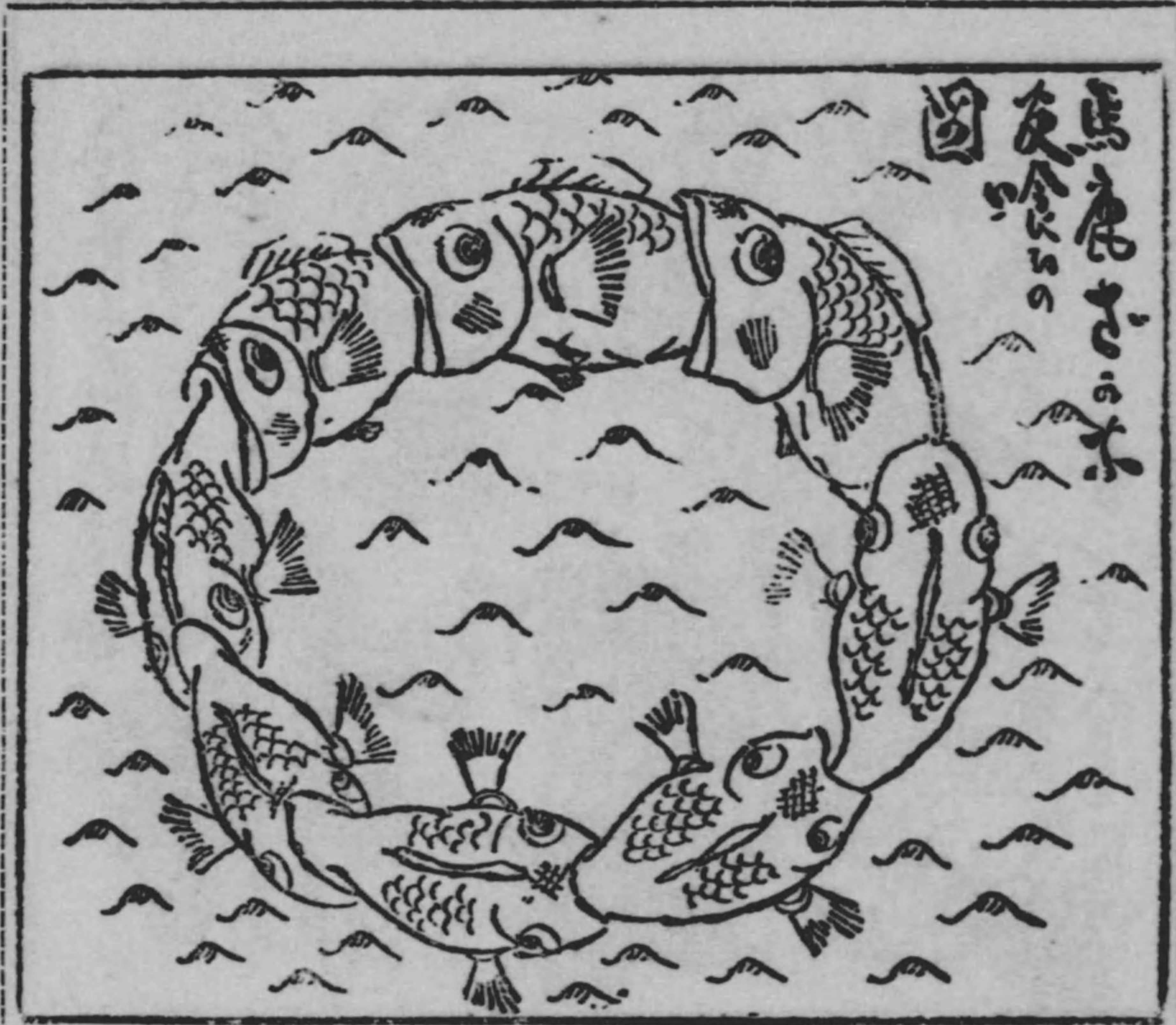
有「豆粕でも馬糞でも木の根つこにやつてもさう効力はない。丁度毛細管の延びてる根元から五六尺から十尺もへだたつたところが一番利目が多いうさうだね。」

老「成程ものは理窟だね。」

有「だから關東廳の試験所で育てた林檎とくらべると、此農場の四年生の方が育ちがよいね。櫻ん坊などは四年目から一本に二十圓づつ、今年は八千圓の収入をあけたといふからね。葡萄畑でもトマト畑でもみな理窟にできてら。パイプで林檎に水をまいてるからどうするのだといふ害蟲豫防の薬水だといふ。萬事理窟に大量生産をするといかに成功すべきかといふ事を語つてゐるね。」

老「その粟屋といふ人は農學士とでも……」

有「いや、内地の農學士は書物は讀んでる、内地の風土氣候に就ては相當心得てる。がそ



友喰ひ

登場人名

- 蠶糸業者連中 大ぜい
- 木材業者連中 大ぜい
- 紡績業者連中 大ぜい
- 同業組合連中 大ぜい
- 農民階級 大ぜい
- 鐵道未設地方の連中 大ぜい
- 毛織業セメント業 大ぜい
- 製鋼業者連中 大ぜい
- 地方の有志(政友色の連中) 大ぜい
- 地方の有志(民政色の連中) 大ぜい
- 阿呆かいなんそん者 大ぜい
- 若い男

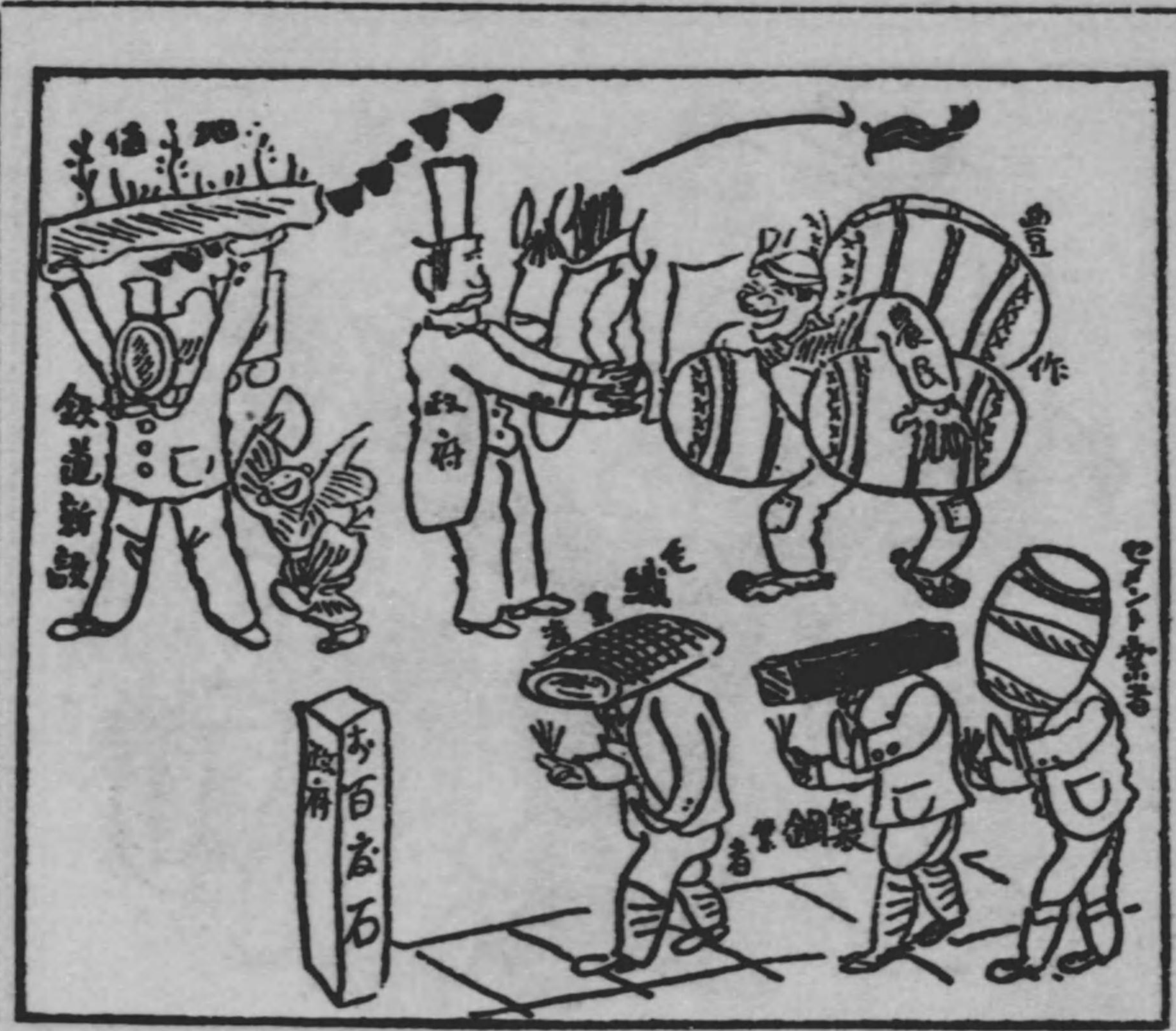
の筆法で朝鮮や滿洲にあてはめやうとするから大變さ。粟屋といふ人は滿洲に似て雨の少ない米國加州のフレスノで長く果樹園に苦勞した人だね。あの石ころの多い關東州で土地の開墾だけで四五年もかゝるといはれてゐるが、經營者自から動勞努力する米國式の農具や器械と支那式のそれと折衷してよく支那人に改良農耕の方法を指示し、滿一年にして全部の開墾と植付を了り、今年年額十四萬圓の收入を擧げんとしつゝある。つまり物事は研究と考察と努力により充分に能率をあけるべく合理化するといふ事だね。」

老「全くだ、一言もごわへん。」

有「そりや關東州内の事業で州外にはそのまゝあてはまらぬが、なにも農業といふても水香の五反百姓ばかりが農民ぢやない。なにもこれで滿洲移民に堪へるのどうのと、そんな事で年々百萬もふえる内地の人口問題が解決されるものでもなんでもない。しかし只日本人ボコペンあると悲觀ばかりしてあきらめてゐてはあまりに退嬰にすぎるからな。」

老「朝鮮でも山崎延吉君や加藤完治君の手で所謂人格化された内地移民がのり込んで相當成功してゐるさうぢやね。」

有「加藤君は滿洲だつてなんのそのといふてゐね。まあ何事によらず人間は弱氣より強氣の方が大さんよろしあるな。」(七、二九青島より歸航の日光丸にて)



が肝要。」

農民階級 「豊作もよしわるし、米の値が下がられてはとはらくしてると、おかみで米を買ひ上げて下さる、先づこれで一とたすかりといふものだ。」

鐵道未設地方の連中 「さあいよいよ鐵道の新設だ、土地の値もあがるお金も落ちてくる、一つ前祝ひとでかけるか。」

毛織業、セメント業、製鋼業者連中 「この不景気ではやりきれぬ、いづれは政府様々ぢや、もう少し運動をつづけやう。」



蠶絲業者連中 「やれ〜おかみのおなさけで油をさして貰ふたで先づ一息かね。」

木材業者連中 「わしらの方も此際輸入關税をうんと引上げて貰はんことにはな。」

紡績業者連中 「いやかういふ時には操短々々、工場の作業さへ手控へたら値段は持ちこたへるといふものだ。」

もろ〜の同業組合連中 「事業の改良發達よりも最低賣値の協定々々……なにがさて仲間からこつそり賣りくづしをやられぬやう監視



どつちに轉んでもわるくない、
 汲めども／＼つきせぬ泉
 汲んで飲めよ、飲んでうるほへ、
 おかみの袖にすがつてゐれば、
 どつちに轉んでもわるくない、
 ありがたや、ありがたや、
 天井知らずに物價が上ると、
 こちやかまやせぬ、こちやかま
 やせぬ、
 ありがたや、ありがたや!!
 阿呆がいなんそん者「あ、八釜し
 い／＼なんだがや／＼とどら聲あ
 けて騒ぎ廻はつてるのわ...なん
 だ? なんだ?



地方の有志政友色の連中「どうだ
 い地租委譲なんて畫にかいた牡丹
 餅かとおもうたら、いよく本物
 になつて来たぢやないか政友會様
 々だね。」
 地方の有志民政色の連中「地租委
 譲がなんだ、我黨の政綱では教育
 の國庫支辨といふお金が地方へた
 んまりといくのだ、民政黨さまさ
 まだよ。」
 一同合唱
 ありがたや、ありがたや、
 損をすれば足してくれる、
 下がつてくれば上げてくれる、



事……」

そん者「材木屋さんだち、意氣地が無いね、あのかさ張つた材木が、タコマやシャトルの港の棧橋に自然と角材になつて轉がつてるわけでない、切り出して製材してはるばると太平洋を渡つてくる、それで信州や越後の山奥まで持ち込まれ値段で競争してまける、金にして一億圓も輸入される、ちとしつかりせんかい！」

木材業者連「といふても此ままで負けるから仕方がない、これでは日本の山林は全く荒廢で……」



おかみの袖にすがつてゐれば、どつちに轉んでもわるくない、ありがたや、ありがたや!

ハ、ハ、ハ、オイ、糸屋さんだち、昔は三四年目位には生糸の値がすばぬけて上つたこともあつたが、人絹といふものが出て來てはもうそんな夢は見られないよ。今年一年はお上から油をさしてくれども、さう毎年々々さしついではくれないよ。」

實業業者連中「いや、そんな事は聞きとらない、まあ來年の事いへば鬼が笑ふ、さきの事はさきの